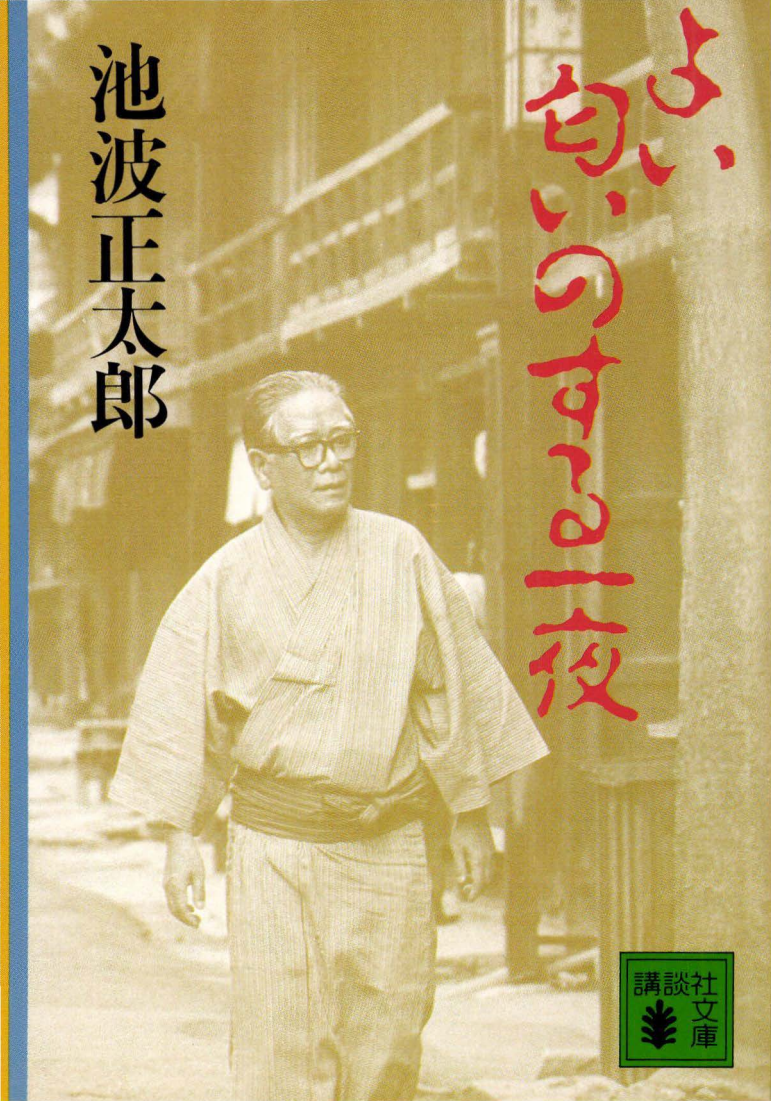
よい匂いのする夜

池波正太郎



講談社文庫



よい匂いのする一夜

池波正太郎



講談社文庫

よい匂いのする一夜

池波正太郎

講談社

目次

まえがき　5

大仁温泉　大仁ホテル　7

長野市　五明館　21

日光市　日光金谷ホテル　35

京都市　俵屋　47

丹後峰山　和久伝　59

飛騨古川　蕪水亭　71

軽井沢　万平ホテル　83

厳島　岩惣　93

フランスとスペインの宿　103

湯布院　玉の湯　117

倉敷市　倉敷アイビースクエア　127
寄　居　京　亭　139
蒲郡市　蒲郡ホテルと常磐館　149
山中温泉　よしのや依緑園　159
箱　根　富士屋ホテル　169
伊東市　龍　石　179
フランスの宿
沼津市　スカンジナビア　191
芦原温泉　開花亭　205
湯河原温泉　楽山荘　215
解　説　筒井ガンコ堂　227
中扉カット　池波正太郎　238

まえがき

この一巻は、昭和五十四年から二年間にわたり、雑誌〔太陽〕へ連載した。

この随想は、諸方の旅館やホテルを探訪したものではない。いずれも、私の過去の生活にむすびついている土地や宿を、あらためて振り返ってみたのである。

申すまでもなく、この数年間における日本の変貌については、いまさら書きのべなくとも読者のみなさんが、よく御存知であろう。

ゆえに、この本の中の旅館やホテルが、数年前のときと同じだとはかぎらない。

たとえていうならば、長野市の〔五明館〕で、長らく私の係りをしてくれた金子ときさんも、いまは、この世の人ではなく、隠居の中沢昌次さんも世を去っている。

また、フランスのホテル〔プティ・ニース〕や〔ホテル・マスネ〕も、一昨年に再訪したときは、世代が交代して、以前とはおもむきのちがった宿になってしまっていた。

いま、時代のながれは、かつてないほどのスピードをもって、大きく変りつつある。

この変転の最中に生きている人間たちは、自分が暮している日常の中の変転の実態をつ

かむことができないでいるようだが、それは当然のことで、変転変化は人間を飼いならしてしまうのだ。

しかし、何年かの歳月を経て、かつて遊んだ土地へ出かけると、否応(いやおう)もなく、この変転の結果を、わが眼に見ることになって、

「あっ……」

と、おどろく。

この一巻を、旅行の案内書のようにお読みにならず、私の随筆集として、お読みいただければ幸いである。

ホテルや旅館のメニューを、できるだけ書きとめたのは、当時のそれをメモしておくことにより、時代相の反映(はんえい)をうかがうことができるからだった。

昭和六十一年春

池波正太郎

尚、挿入のカット二十枚は、このたび、新たに描いたものである。

大仁温泉

大仁ホテル



むかしの伊豆は、ほんとうによかった。

若かったころの私どもが、伊豆にあこがれたのは、やはり、川端康成の〔伊豆の踊子〕や、伊豆と伊豆の人びとを描いた、まるでスケッチのように愛らしい掌篇に魅了されたからだろう。

太平洋戦争前の、まだ舗装もされていなかった天城街道を小さなバスに揺られながら、天城峠を越えて行くときの気分は、何ともいえぬものだった。

渓流と山々の間にはさみこまれた、いくつかの湯宿からたちのぼる湯けむりと、猪鍋や山菜をたのしんだ何日かを過ごし、天城峠を越えた瞬間に、景観はひろびろと開け、それはやがて、太平洋の汐の香につつまれ、私たちは、まっしぐらに下田の港へ駈け下りて行くのである。

そのころの下田の芸者の中には、おもわず目をみはるような美形がいたものだ。

戦後の伊豆も、日本が高度成長の狂気に包まれるまでは、まだまだ、むかしの姿を残し

ていた。

遠いむかしに書いた小説〔天城峠〕で、当時の伊豆を、私はこんなふうに描いている。

修善寺から下田行きのバスに乗り、沿道の季節はずれで客もない温泉場をいくつも抜け、森閑として、のびやかな伊豆の村々を揺られて湯ヶ島を過ぎると……おだやかな起伏を見せた山脈を背景に、梅が咲き、春の休暇中で子供たちの笑い声に満ちている街道の田園風景は、何時の間にか車窓にせまる山肌と森林に変り、狩野川に沿った道は、ゆるやかに曲りくねってのぼりはじめた。

このあたりの谷間や山で働く人夫たちが、乗ったり降りたりしはじめ、バスの中は、山男らしい笑い声と冗談で活気づいてきた。（中略）そのとき、バスの通路側に坐っていた天野に、向う側から若い女が声をかけてきた。

「ちょっと、火、かして下さんない」

ジッポーで女の煙草へ火をつけてやった天野へ、女は微笑して、

「何処へ、お泊りなの？」

「湯ヶ野の予定なんだけど……」

女は、髪がふれ合うほどに顔を近づけてきて、

「八時から九時までの間にねえ、川のフチにある共同湯で待ってるわ。はなしに来ない」

そう言って席へもどると、明るい、まったくそれは無邪気なウィンクを送ってよこした。

この女が、伊豆の温泉場を渡り歩く娼婦の一人なのは、天野にもわかった。

と、ある。

これが、まぎれもない、むかしの伊豆だったのだ。

私は出征の召集令状を受けとったときも、海兵団へ入る前の最後の二日間を、伊豆の修善寺で過ごした。二月の中ごろで、修善寺の梅は、もう満開だった。

まだ私は若かったし、人ひとりいない裏山の梅林の白く咲いた梅の香りの中で、

（もしかすると、二度と日本の梅を見られなくなるかも知れない）

などと、おもったりしたものだ。

戦争が終ったとき、生き残った自分のことを考えると、以後の三十余年間は〔拾いもの〕としかおもわれない。出征直前の、あのときの突きつめた気持は、何も私だけのものではなかったのである。

そのときに泊った旅館は、修善寺の老舗といってよく、建築もすばらしければ、石造り

の浴舎も高雅なもので、私は何度か泊っていた。

戦後、この旅館へ泊る機会がなく、いつか行ってみたいとおもいながら三十年が過ぎてしまったけれども、数年前、泊りがけの仕事で若い友人たちと共に出かけてみた。

建物も浴舎も古びたままに残っていたが、食膳に隙間もなくならべ置かれた料理は、すべて一度に持ち運ばれたものだから、酒をのむうちに、吸物も天ぷらも飯も冷え切ってしまう。

辛うじて、小さなコンロに乗せられた小さな鍋物のみが、コンロの火が燃えつきるまでは暖かい。

「こういうときには、こうするんだ」

と、私は冷えた天ぷらを鍋の中へ入れ、蓋をした。

ややあって、鍋の中の煮えた天ぷらを御飯で食べた。

「なるほど……」

友人たちは感心してくれたが、近年の温泉旅館の大半は、パートの女たちがサーヴィスをするのだし、料理するほうも時間が来れば、魚の干物一つ焙ってはくれないのだから、仕方もないことなのだ。

ただ石の底から滾々と湧き出る温泉のみが、むかしのままだったのである。

翌日、修善寺からタクシーで山越えに熱海へ出たとき、途中で、大仁の丘の上に〔大仁

ホテル）を望見した。

この旅館へも、むかし、何度か泊っている私だったが、その姿は見ちがえるほどに変貌をとげていた。七階建の堂々たる鉄筋コンクリートになってしまい、

（ああ、ここも、どこにもあるような無味乾燥のニッポン・ホテルになってしまったか……）

そうおもったとき、松林の間から、むかしのままの離れ屋が、いくつも残っているのがタクシーの窓から見えた。

（あの離れが、まだ、残っている……）

そこで私は、戦後はじめて大仁ホテルへ泊る気になった。

その日が来たのは今年の二月で、私が出征直前に修善寺を訪れた日より、数日前のことで、大仁ホテルの庭の梅は、七分咲きだった。

大仁ホテルの離れへ案内されたとき、私は自分の目を疑った。

（こんなことが、あるのだろうか……？）

四十年前に泊った離れが、そのままに残っていたからだ。

変転きわまりなかった日本の、この四十年間に、持続の美徳を、そのままに具現しているかのようだった。この離れの外形はともかく、二間つづきの屋内までも、私には見おぼ

えがあった。

ことに、その浴室である。

白いタイルのひろびろとした浴室と、畳敷きの脱衣場。そこに置かれた鏡台と座ぶとん。そして、むかしから日本人になじみの深いメーカーの石鹸までも、むかしのままなのだ。

むろん、手入れはしてあるし、このほかにも、最近に新築した離れ屋もある。

本館は、赤味がかった茶色の格調高いホテル建築でありながら、むかしのままの離れ屋と宏大な庭園を温存している。

数年前に、すべてを新しく改築したとき、離れ屋を残すことに、経営者は不安をおぼえぬではなかったが、結果は反対だった。

むかしからの常客は、ゆきとどいた、しずかな、余裕のある日本家屋で、むかしのままのサーヴィスと料理をたのしむことができるし、新しいファンも増えるばかりらしい。

それでいて本館は、どこのホテルにも負けない洋室と和室があり、ステーキを出すグリルもある。

それならば純ホテルの様式かというと、そうではない。

廊下もロビイも浴衣のままでよいのだ。

すばらしい富士の景観をほしいままにできる（むかしもそうだった）大浴場もあるし、

ディスコもある。プールもある。テニス・コートもある。

ところが、いったい、どこにあれだけ多数の客が吸い込まれてしまったかとおもうほど、ホテル内はしずかなのである。

これは念の入った建築と品格が、物をいっているのだろう。

ホテルと旅館のよいところだけを採り入れて経営しているにちがいない。

フロントの人たちも親切だし、ロビイの、みやげ物売り場に出ている品物も精選されている。

離れ屋での夕飯の献立を書いておこうか。

前菜　（盛り合せ）合鴨の八幡巻。サヨリとエビの押しずし。常節と大豆の煮物。スモーク・サーモン。ゆり根の煮物。

小鉢　コノワタ。蕗の薹。ナマコの山かけ。

煮物　蕗。サヤエンドウ。八つ頭。湯葉。

刺身　かじきまぐろ。鯛。生うに。いか。

陶板焼　牛肉。エビ。蛤。タマネギ。しいたけ。シシトウ。にんじん。

鯛めん。

御飯。香の物。

そして吸物は、女中さんが、あたためて運んでくれた。

献立といい、調理の仕方、盛りつけといい、まぎれもなく、むかしの一流旅館のものだ。魚の活づくりだとか、なんとか鍋と称するものは一品も出ない。

魚の〔生首〕ごとに刺身を盛りつけたり、野菜・肉・魚など、めったやたらに鍋で煮込むなどという、料理ともいえぬ料理を、近年の一流旅館で、

「はずかしげもなく……」

客膳へ出すのは、そうしたものを好む客が増えたからだろうか。

それとも調理と人手の手間をはぶくためなのだろうか。

考えてみれば、人間の労力というものが、時間きざみで金に換算される世の中になったのだから、仕方もないことなのだろう。

また、旅館の女中さんという職業を若い女たちが好まぬ時代ゆえ、いまは近くのパートの中年女性がやって来て、バタバタと出すものを出し、決められた時間が過ぎれば、さっさと家へ帰ってしまうのだ。

大仁ホテルの女中さんは、このホテルのオーナーである会社の社員になっている。

誇りをもって仕事をし、勤続の年月も長い。

翌朝の献立は、つぎのごとくだった。

鰆の味噌漬。
とろろ芋。
温泉卵と蕎麦。
わさび漬と山牛蒡の味噌漬。
味噌汁。御飯。

この大仁ホテルの開業は、昭和九年ごろというから、私がはじめて泊ったころは、開業して間もなかったわけだ。

いま、おもい返してみると、なるほど、本館も離れ屋にも木の香がにおうようだった。湯量は、むかしもいまも豊富だ。

おそらく、伊豆の温泉の中でも屈指の豊富さだろう。

また、むかしのはなしだが……。

三島から伊豆箱根鉄道へ乗り換えて、大仁駅へさしかかると、病気した馬の温泉療養場が見えたものだ。それほどに温泉が豊富なのである。

それでいて、修善寺・長岡の二大温泉町にかこまれている大仁は、ほとんど、むかしのままのしずけさがあって、ことに山上の大仁ホテルの平穏な環境を好む常客が、いまは、

しっかりとついてしまったようだ。

むかし、土・日曜以外の、このホテルには、あまり客が泊っていなかったようにおもえる。

いや、いたのだろうが、ほとんど見えなかった。

一度だけ、いまは亡き作家の久保田万太郎氏の姿を庭で見かけたことがあった。

画家の常客も多いらしい。

私は、伊豆の冬が好きだ。暖かいからである。

そして、富士山がよく見える季節だからでもある。

梅が咲くころは、もっともよい。

大仁ホテルの裏手には、美しい桜並木があって、旧家とも別荘ともおもえる風雅な造りの家も、まだ残っており、そのあたりを歩いていると、

（ここが、温泉の町なのか……？）

と、ふしぎにおもわれるほどなのだ。

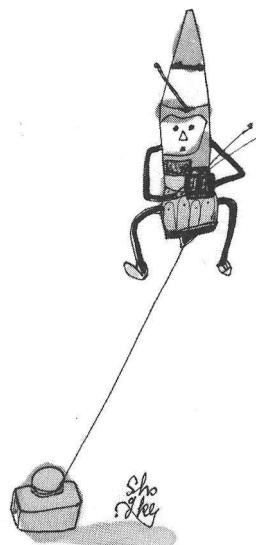
時代の激しい変転と共に、温泉旅館の経営がむずかしくなってきて、近年は、何処も彼処も手をひろげ、形だけは大きく、メカニズムの正体を知らずに、これを追いかけまわし、一歩、中へ入って客となれば、

（もう二度と来まい）

と、おもわざるを得ないような旅館が多くなった。
このため、新しい団体客のみが、入れかわり立ちかわりやって来るだけで、常客がつかない。
したがって、落ちついた経営が成り立たなくなってしまうのだ。
大仁ホテルは、むかしのままのオーナーが、品格の高い経営をくずさなかったので、常客の足が絶えなかったのだろう。
消防の設備などは、日本屈指のものらしい。
それだけ、建築にちからがこもっている。
客は、こうしたムードをたちまちに直感し、それがわかり、それを好む客があつまってくることになる。
一泊した翌日、私たちは山越えに熱海へ出た。
霧のように、雨がけむりはじめた。
海岸通りに近い、古くからあるレストランで遅い昼飯をすませ、いかの塩辛をみやげに買って、私たちは、みちたりた気分で熱海駅へ向った。

長野市

五明館



以前は、一年のうちに何度も何度も信州へ出かけて行った。

何度も出かけた土地へ旅行をするのは、私の癖なのだが、数え切れぬほどに足を運んだ京都に次いで、信州への旅が最も多かったろう。

二十何年も前のことだが、信州・松代藩（真田家）の家老で、宝暦のころに藩政改革をやった恩田木工民親を長篇小説にしてからは、真田家に素材を得た小説が期せずして生まれはじめ、ことさらに信州へ旅することが増えたのである。

小説〔恩田木工〕は、はじめて直木賞の候補にえらばれ、それから六回目の候補作〔錯乱〕で、私は直木賞を受賞した。

〔錯乱〕の主人公・真田信之は、戦国の末期に、信州・上田城主だった真田昌幸の長男であり、有名な真田幸村の兄にあたる。

私が週刊A誌に連載した〔真田太平記〕は、この真田父子を中心にしたものだが、その中で、若いころの真田幸村が、上田城を出て、同じ領内の別所温泉へあらわれる情景を

何度か書いた。

それが縁となり、別所温泉の共同浴場・石の湯の前に〔真田幸村公・隠しの湯〕と記した石碑が建つことになった。

そこで、作者の私に石碑の字を書けという。このはなしをもってきたのは、二十年来の親友で、上田市の観光係長をしている益子輝之さんだったので、大きな字を書いたことがない自分の筆を危ぶみながらも、つい、引き受けてしまった。

それが去年の十二月で、石碑の除幕式は春も浅い或る日がえらばれた。

それへ出席するついでに、

(久しぶりで、長野の五明館へ泊ってこよう)

そうおもいつくと、すこしだが胸が躍ってきた。

〔五明館〕は、私が頻繁に信州通いをしていたころの常宿だ。

はじめて、この旅館へ泊ったのは、やはり二十何年も前のことで、夏だった。

松本からタクシーで長野市へ入ると、ちょうど日も暮れてきたので、駅前から五明館へ電話をすると、

「〇〇円のお部屋なら、ちょうどあいておりますが……」

「かまいません。お願いします」

私が泊ったのは、いま食堂になっている洋間の上の、二間つづきの和室だったが、泊っ

てみて、何から何まで気に入ってしまった。

このとき、私の部屋の係りの女中さんは金子ときさんといい、いまも五明館につとめている。

当時の手帳には、ときさんのことを、

「四十前後の品よき細面の婦人。丁重にして暖かく、自然な接待ぶりは、まったく遺憾がない」

と、ある。

私が旅館に泊って、もっとも困るのは寝具だ。一流旅館でもシーツは新しいのと替えるが、掛けぶとんのカバーは、ほとんど替えぬ。これが私には気色がわるい。

いつであったか、或る温泉の一流旅館のカバーに、避妊具がくっついていたのを見たこともある。

食べ切れぬ食事の皿数を一つでも二つでも減らしてよいから、私は洗いたてのカバーとシーツの芳しい匂いに包まれて眠りたい。

むかし、私が大阪で常宿にしていた〔大宝ホテル〕という小さな宿では、三日泊れば三夜ともシーツとカバーを替えてくれた。経営者の夫婦が無類のきれい好きだったからでもあろうが、こういう宿なら、私は食事など二の次でよいのである。

五明館の寝具は、完膚なきまでに清らかだ。

そして、朝夕の食膳に出る料理は、少なくもなく多くもなく、すべてが、こころよく腹へおさまるようにととのえられている。

二十余年前、はじめて泊った夜の食膳は、つぎのごとくだ。

ソラマメの茹でたもの。
鯉の切身の煮つけ。
鮎の塩焼。
鶏の蒸焼（野菜サラダ）。
アワビと胡瓜のワサビ醤油。
ナメコの味噌汁。
キャベツとシソの香の物。
御飯。
果物（イチゴ）。

そして朝飯は、

豆腐の味噌汁。

オムレツ（五明館の名物）。
焼海苔。
胡瓜とカブの香の物。
御飯。

であったが、五明館では同じ敷地に〔銀扇寮〕という食堂を経営しており、調理場は同じだから、客室にもあるメニューを見て、たとえばビーフ・ステーキやカレー・ライスを注文することもできる。これが、まことに便利なのだ。

はじめてのときの手帳には、

「……女中さんのおときさんが、小さなオフロもございますが、とりあえず、大きなオフロを見ていただきとう存じます、というので、さっそく行ってみる。浴堂は大きく、湯があふれ、清潔きわまりなく、設備万端申しぶんなし。いい気持になって湯に浸っていると、どこからかオルゴールの音がきこえ、正面のガラスの向うに美しい裸女の人形が、ゆったりとまわりはじめた。仰天したが、何ともいえず、品のよい風流な趣向で、すっかりうれしくなる」

と、あり、また、

「……廊下や部屋に真紅の葵、白の薔薇が壺に活けられてあり」

などと、記してある。

夜になって散歩に出たが、当時の長野は、いかにも信濃の都市という雰囲気が濃厚で、一歩、裏へ入れば、白壁造りの土蔵や、田中冬二の詩に出てくるような古めかしい商店やレストランがあったりして、闇の中に花の香りがただよっていたものだ。

秋に来たとき、善光寺の境内へ入ると、リンゴを売る屋台の店々がもう立ち去ったというのに、境内の闇にリンゴの香りがたちこめているのである。

ところで、二十余年前のそのとき、翌日の列車の中で、私は五明館の弁当を食べている。その中味を手帳から書き写しておこう。

エビフライ。焼鳥。塩鮭。玉子焼。
ナスと竹の子の煮物。トウガラシの油炒め。
サラダ菜。奈良漬。小さなおにぎり。

除幕式の前日。上田市へ着いた私は、同行のTやWと共に、益子輝之さんを加えて、なじみの蕎麦屋〔刀屋〕で、たっぷりと酒をのんだ。いろいろと肴をたのみ、新鮮な野菜の漬物を私たちは、まるで馬のように「うまい、うまい」といいながら食べた。

この店の、手打ちの蕎麦切の庖丁の冴えは実に見事なもので、一人前のもりが、まず東

京の蕎麦屋の三倍はあるだろう。私は一人前をTと二人に分けてもらった。

ホテルへ帰った夜半に、突如、私の右足の踵へ痛風の発作が起った。これで三度目だ。激痛に一睡もせず朝を迎え、私はTにたのみ、薬とサンダルを買って来てもらった。

一夜のうちに腫れあがり、熱をもった右足が湿布の薬で、何とかうごくようになった。

やがて、迎えの車が来て、私たちは別所温泉へ向った。

休憩所にあてられた旅館・柏屋別荘へ入ると、そこの御隠居の持病が、やはり痛風だとかで、すぐさま、薬とステッキをくれた。薬よりも、ステッキが何より心強い。

家を出るとき、こうしたときのための携帯用ステッキを持って来なかったことに、私は胸の内で舌打ちを繰り返していたのだ。

除幕式は、無事に終った。

自分の書いた字が、おもったより、おかしくなく石にきざまれていたので、足の痛みも忘れて、ほっとした。

小雨の中で、真田十勇士に扮した若者たちが、紅白の餅を見物に撒く。清酒の樽の蓋が打ち割られる。

その後の宴会が終ってから、私たちはタクシーで長野市へ向った。

五明館に着いた車の中から、蒼い顔をした私がステッキをつき、よろめきながらあらわれたので、旅館の人たちは、びっくりしたようだ。

上田もそうだったが、長野も寒かった。
渡り廊下の両側には、葦簀で雪囲いがしてある。
この宿の中庭の雪囲いを見るのは、はじめてだった。
そして、ここの御隠居で、私と親しい中沢昌次老も、つい先ごろまで痛風だったとかで、そのときの特効薬をわけてもらった。
いや、こうしてみると、実に痛風の人たちが多い。
御隠居が、近くの隠居所からわざわざ来てくれた。
「おときが、ちょうど風邪をこじらせて、休んでおりましてな」
いつも私の面倒を見てくれるおときさんは、この近くの家に息子さん夫婦と暮している。
先ごろ、おときさんは勤続五十年の表彰を長野市から受けたそうな。
「おときが、はじめて此処へ来ましたときは、まだ髪もお下げにしておりまして、そりゃあ、可愛らしい少女でございました」
と、御隠居がいった。
大浴堂へ入りたかったが、この足ではどうにもならぬ。
仕方なく、部屋についている浴室で躰を洗ったとき、桶に右足が触れて、おもわず悲鳴をあげた。

ともかくも、痛い。着物の先がふれても、飛びあがってしまう。

ところが、入浴をすませると、大分に痛みが消え、同行の二人が待っている部屋へ行くときもステッキを手にしなかった。

こうなると、気分をよくして、私は信州牛のビーフ・ステーキをたっぷりと食べてしまった。肉と酒は痛風によろしくない。

TとWは、少し離れた一階の、和室にベッドがある部屋に泊る。戦後、この旅館へ外人客が多く泊るようになったので、こうした部屋もあるのだ。

御隠居には、三人の子息があって、三人とも、助け合って家業に従事している。長男の現当主で六代目の老舗だ。

長野市は、むかし、幕府の直轄で、善光寺があるところから、寺社奉行の支配下にあって、五明館（当時は扇屋）は善光寺十五ヵ町の束ねをしており、脇本陣をゆるされていたという。

私は今度、小諸の農家の襖の下張りから発見されたという、明治時代の五明館・扇屋の錦絵ふうのポスターを、はじめて見せてもらった。

この日は土曜日だったので、食事が終って夜が更けてから、TとWは、駅付近の映画館でオール・ナイトの映画を観たいなどといい出したが、

「でも、ここはホテルではないのですから、午前二時に帰るわけにはいきませんね」

あきらめていたようだ。

すると、帳場から、

「私どもは、いつも、朝まで起きておりますから、御自由にお出かけ下さい」

と、いわれた。

当主は、少年のころから帝国ホテルや川奈ホテルで修業してきただけに、大正年間の、がっしりとした日本建築の旅館の風趣をこわさぬようにして、ホテルの便利さを採り入れている。

TとWは自分の部屋のガス・ストーブを消して映画を観に行き、午前一時すぎに帰って来ると、部屋のストーブに火がついており、ビールをたのむと一分もかからぬうちに運ばれて来た。

このようなサーヴィスは、いま、どこの日本旅館へ行っても受けられるものではないと、二人は感激していたが、私も、三人の子息が交替で徹夜していることを、今度はじめて知ったのである。

なるほど、客へのサーヴィスということもあるだろう。

だが、客室三十の、この自分たちの旅館をまもるという情熱が、そうさせているにちがいない。

火災や盗難に備えてのことだ。

朝、目ざめると、また、少し痛みがもどってきたようだ。
昨夜は、ビーフ・ステーキのほかに、カレー・ライスも食べてしまったのだ。
ステッキをついて洗面所へ入ると、そこは、小さな電気ストーブにあたためられている。
カーテンを引くと、中庭に雪が降りはじめていた。
朝食は、焼魚・オムレツ・梅干・味噌汁・御飯・香の物だった。
この宿には、ディスコもなければ、ゲーム・マシーンもない。
若い人たちは、はじめのうち、とまどったような顔をしているが、翌朝、宿を出るときは、
「今度は、父や母を連れて来てやりたい」
と、いうそうだ。
雪は、間もなく熄んだ。
何といっても〔名残りの雪〕なのである。
昨日の夕方、此処へ着いたときよりも、いくらかは増しな足取りで、私はタクシーへ乗り込み、駅へ向った。
長野市の、表通りの街衢の変貌の中に、二十余年前の姿そのままで埋め込まれているかのような五明館の表構えを、私は車窓から振り返って見た。

日光市

日光金谷ホテル



明治、大正、または昭和初期の、日本のよき時代を偲ばせるホテルが、戦後つぎつぎに消えてゆく中で、まだ、いくつかのホテルが営業をつづけている。

だが、古い建物だけに老朽するのは当然であって、その古さが客に好まれ、また経営者の誇りでもある場合、現代の、あらゆる面でのメカニズムの中で、生き残って行くことがいかに至難であるか、いうをまたない。

そうしたホテルの一つへ、最近に泊ったとき、チェック・アウト・タイムが過ぎるまでは、エレベーターを地下まで降りさせないというので、おどろいた。つまり、近ごろは若者たちの中に、ホテルへ泊って、食べて、その料金も払わず、エレベーターで地下へ降り、逃げてしまうのがいるらしい。

同じころ、私は、大阪の古くからある店で牛肉のすき焼を食べ、勘定を払ってから玄関へ行き、下足札を出したのだが、下足番の老人は「係りの仲居がいっしょについて来ないと履物は出せません」と、いう。

これまた、勘定を払わずに食い逃げをする者が増えたからだろう。
当然、私たちは不快なおもいをした。
こうなると、ホテルのフロントにしろ、料理屋の下足番にしろ、客に対する警戒心が消えなくなってしまい、そうなるとフロントの電話の応対までが変ってくる。
つまり、このように悪質な〔客〕によって、さまざまな商売が、知らず知らず、
「荒れてゆく」
のである。
しかも、むかしの鷹揚な時代につくられたホテルは、このような客を防ぐための設備などを、まったく考えていない。客室は、ゆったりとひろく、バス・ルームなどは二坪もあって簀の子が敷いてあり、湯桶までそなえてあるホテルもあった。
ところが、いまは、たとえ一坪のスペースをも、
「むだにしてはならぬ」
という時代になってきた。
また、それでないと経営が成り立たぬ時代なのだ。
劇場もホテルも料理屋も、高層ビルディングの中に同居せざるを得なくなってきた。
そのような、いまこのとき、日光の〔金谷ホテル〕の存在は奇跡といってよいだろう。
私は、十七歳のときに金谷ホテルへ来て昼飯を食べたことがあり、戦後は十三、四年前

に別館の二階の一室へ泊った。

今度、久しぶりに泊ってみて、このホテルの何も彼も以前のままに温存されていることに瞠目したのだった。

ホテルの現社長・金谷太郎氏にいわせるなら、

「温存させてゆくために、まったく神経を磨り減らしてしまいます」

とのことだ。

温存ということは、建物や器物のみではない。ホテルではたらく人たちや、食堂の味覚をもふくめて、世界的に知られた金谷ホテルの風格を持続させてゆくことなのである。

赤い革張りの椅子。木製の古い机や鏡台やベッドが置かれている、ひろびろとした一号室（約三十畳敷きはあるだろう）へ入り、窓を開けて、霧にけむる東照宮の深い杜をながめていると、メイドが熱い日本茶とクッキーを運んであらわれる。別に口をきくわけではないが、その折目正しいメイドの物腰を見ただけでも、客は安らぎをおぼえるだろう。クッキーは明治六年以来の金谷家のホーム・メイドだ。当然、食堂のパンもそうなる。手製できるものは、でき得るかぎりホテルでつくっている。

私が泊った本館は、明治二十六年に改築したままの姿をとどめていながら、バス・ルームにも暖房設備にも、絶えず点検の目がゆきとどいている。

このホテル専属の工人が手入れをゆるめないのだ。

物事を持続して行くことの美徳は、現代の日本には通用しなくなった。古いものは、打ち捨てられてしまえば二度とかえりみられない。建物のみか、人の心も同じであって、いまや日本だか外国だかわからぬような〔日本〕になりかけつつある。

そうしたことの善悪はさておいて、日光金谷ホテルが旧態のまま生きぬいているのは、東照宮を眼前にひかえた立地条件があるからだろう。

日光が国際的な風致地区として、国の規制を受けているからだ。これが建築の乱立を防いでいる。

同じ日光でも、中禅寺から湯元へ移れば、また、いくらか様相も変ってくる。

夕闇がせまるころ、ボーイが廊下をまわって、チャイムを鳴らす。夕食の時間を知らせているのだ。

私たちは、古風な格天井の下の、落ちついた食堂へ入って、先ず〔虹鱒のホテル風〕を食べた。

外国人と日本人の双方の舌に合わせたソースの味わいは、まさに、よき時代の日本の洋食である。豚のバラ肉の蒸焼も同様。別に注文したカニのピラフもうまい。

そして、翌日の朝食がよかった。

スパニッシュ・オムレツのほどのよさ。むかし風に〔パン・ケーキ〕と称するクレープの焼きたてに、ベーコンとシロップをそえて食べるうまさは、ほんとうに朝食の醍醐味で

ある。

朝から雨が降りけむっている。

そのため、この日の予定はくずれてしまったけれども、ポットのコーヒーを自由におかわりしながら語り合っていると、もう何処へ行くのも面倒くさくなってしまうほどのくつろぎが、このホテルの食堂にはある。

金谷ホテルは、金谷善一郎が明治二十五年に創立した。金谷家は代々、東照宮の楽人だったというから、徳川幕府の扶持を受けていたわけだ。ために、明治維新となって金谷家が困窮したのはいうまでもない。

間もなく外国人の日光見物や避暑が多くなったところから、諸方に民宿が出来はじめ、金谷家も〔金谷コッテージ・イン〕という民宿を経営し、のちに、現在地に建ちかけていた〔三角ホテル〕を買収し、改造の上で金谷ホテルの創立となった。このとき外国人夫妻一ヵ月三食付で百五十円だったそうな。使用人の月給が一円程度の明治時代だった。

つまり金谷ホテルは、明治から大正、昭和の初期にかけての外国人たちを泊めることによって、みずから鍛練し、独自のスタイルをつくりあげたといってよい。

戦後のアメリカ風のホテル・スタイルとは大分にちがう趣きをとどめているのは、このためである。

明治十一年に、イギリスからやって来たイサベラ・バードの〔日本奥地紀行〕を読むと、その中に〔コッテージ・イン〕時代の金谷家が出てくる。

その清らかな屋敷の内外に、バードは目をみはっている。

金谷善一郎は、ホテルを経営するからには、どうしても英語が必要だと考え、息・真一を立教大学へ送った。のちに真一は父の跡を継ぐことになるが、この人が大正の末年に世界一周をおこなった日記が三冊、残されている。私も、見せてもらったが、まさに珍品であって、イタリアのローマ滞在中の一節に、

「……停車場デヤラレタ掏摸ノ姿ガ目ニ付テ通行人ハ皆掏摸ノ様ナ気ガスルノハ実ニ残念デアルガ、又止ムヲ得ナイ」

などとある。そのころからローマには掏摸が多かったらしい。日々の食事のメニューやホテルの設備なども丹念に視察しており、このときの見聞を、帰朝して後のホテル経営に活用したことはいうまでもあるまい。

明治から大正の初期にかけては、泊り客の七十パーセントが外国人だったという。

それにしても、丹念に造られた木造の建物は、鉄筋コンクリート建築の、

「およぶところではない……」

とさえ、おもえてくる。

本館の、明治時代の洋館の中へ入って、その一室にくつろいでいる自分が、何か自分で

はないような気分になってくるのだ。

当代の社長・金谷太郎氏は四代目になるが、

「これからがむずかしくなるとおもっています。あまりにも激しく世の中が変るものですから……」

そう、いわれた。

その中で、もっともむずかしいのが人件費だろう。

人件費の高騰によって、あらゆる業種が変型しつつある。

だが、世の中は近いうちに、また大きく変るかも知れない。

半ば自給自足の土台をかためていて、金谷という姓をホテルの〔名辞〕としているほどの、誇り高い経営が却って安全度の高いものになるかも知れない。

現代日本のメカニズムは、意外に脆いのである。

地質学と考古学の助教授として、長く東北大学におられ、若いころのアメリカ留学中にリゾート・ホテルで部屋係りのアルバイトもしたという現社長のお人柄は、このホテルにとって、まことに心強いものにちがいない。

昼近くなると、外国人の観光客が、つぎつぎにバスでホテルへ乗りつけて来た。

日光観光のコースの中に、金谷ホテルでの昼食がふくまれているのだろう。

ときには、三百もの昼食を用意しなければならないのだが、このホテルの食堂は余裕をもって、これらの観光客をさばいてゆく。

大谷川に懸かる神橋は、ホテルの眼下にあり、その向うに、江戸時代の〔象徴〕ともいうべき東照宮の建造物が深い木立に包まれている。

日光は、山岳宗教の修験道によって、先ず男体山が開かれ、鎌倉時代には、幕府の知遇を受け、三十六坊と三百余の小坊を有し、したがって、僧侶もいた。

この日光の僧侶たちは、豊臣秀吉が小田原の北条氏を攻めたとき、北条氏に味方した為、秀吉が天下人となったときには寺領の大半を奪われている。時代小説が、まだ鍬を入れていない分野といってよい。

秀吉から徳川家康へ天下が移り、さらに家康の遺骸が久能山から日光へ移されてのち、徳川幕府の繁栄と歩みを一にした東照宮の権威は非常なものだったろう。

昼すぎになっても、雨は熄まず、山々は霧の中に隠れ、冷気もするどい。

「ともかくも、戦場ガ原まで行ってみよう」

昼すぎに、私たちはタクシーで金谷ホテルを発った。

晴れていたなら、私は、さらに金精峠を越え、丸沼を経て奥日光の山々をのぞみながら、上州の沼田へ下るつもりだったが、あきらめることにした。

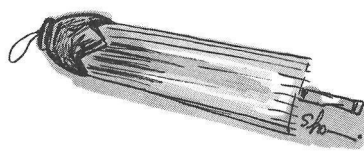
そのあたりの山々は、私の小説に何度もあらわれている。十五年ほど前には、丹念に歩

いたり調べたりしたものだった。
　ミルク色の霧の中の道が、華厳滝を遠望できる〔いろは坂〕へかかったとき、急に霧がはれた。
「や、滝が落ちていない」
　私がいうと、タクシーの運転手が、
「今年は、ほんとうに水がすくないですよ」
　と、こたえた。
　中禅寺湖畔の道を戦場ガ原へ出ると、まだ、黒い土に雪が残っている。
　ここには霧がたちこめていなかった。
　金谷ホテルのあたりの桜は七分咲きで、桃が満開だったが、ここはまだ、凜冽たる冬の名残りが山々にも、木々の枝にもあった。
　しかし、何といっても土の色に春が来ている。
　土の匂いが戦場ガ原にただよい、灰色の空に鷲が一羽、悠然と旋回している。
「さて、これでは戻るより仕方がないな」
「このところ、取材では、よく雨に降られますね」
「ぼくは、雨男ではなかったはずなんだが……」
「ですが、雨と霧のために、現代的な建物が見えなかったし、その上、金谷ホテルへ泊っ

たので、なんだか、明治時代の男になったような気分です」
と、二十八歳のKがいった。
日光駅へ着くと、また、雨が降り出してきた。
発車まで一時間もある。
私は駅前のみやげ物屋へ行き、トウガラシの紫蘇(しそ)巻を買った。
日光のみやげの中で、私は、これがいちばん好きだ。

京都市

俵屋



東京オリンピックの前後から〔高度成長〕の浮かれ文句に酔い痴れた日本は、

（物事が、こんなに変ってよいものだろうか……？）

と、おもうほどに変貌した。

むろん、人心も変った。人のこころが変れば当然、人という生きものの暮しも変るわけだが、中でも、都市の風景ほど空恐しく変ったものはあるまい。

私ども、東京に生まれ育った者が道に迷うのだ。それほどに景観が変りはじめた。木も水も草も花も、家も橋も川も、古きものは存続せしむべからずとでもいうように破壊された。

戦時中の軍人たちの傲慢と奢りが、そのまま政治（与・野党を問わず）と企業に乗り移ったかの感がする。

（これは、もう、近いうちに京都も変ってしまう）

と、私どもは覚悟をしないわけにはいかなかった。

そのときから数年の間、私は月のうちに、二度も三度も京都へ足を運んだ。京都へ行って何をするのかといえば、好きな店へ通って食事をしたり、飽くこともなく町中を歩きまわったりするだけのことだが、つまるところ、私のような時代小説を書いている者は、京都に、

〔江戸を偲ぶ……〕

のである。

なればこそ、京都を大切に想い、たとえば西陣あたりの夜の町筋を、何度も往ったり来たりするだけでも、それが小説の血肉となった。

そこには、まぎれもなく、町中の夜の闇があり、灯火の美しさが存在した。戦前の東京の夜が京都に残っていたことにもなる。

そのときから今日までの間に、京都も変貌した。しかし、さすがに鴨川や三条・四条の橋の上へ高速道路を乗せるような、破廉恥で愚かな行為はしていない。

創業が宝永年間という京の旅館〔俵屋〕の女あるじは、

「このような世の中になってしまっては、私の代かぎりで、絶えてしまいましょう」

などと、ずっと以前は洩らしていたようだが、今度、久しぶりに訪れると、

「いま、うちにいる最古参（勤続三十五年）の女中さんが四十代のころ、もう、こんな人たちはいなくなるだろうと絶望していましたけれど、なんとなく、いまの人たちに引き継

がれてきました。ですから、育て方しだいによって、よい女中さんも絶えないのではないかと希望をもつようになりました。心意気に感じて、お客さまのサーヴィスをしてくれる女中さん、それなくしては、私どもの商売は成り立ちません」

むしろ、心強い言葉を聞かされた。

この宿へ泊ってみれば、日本の伝統というものは、かたちではなく、人のこころに引き継がれて行くものだということが、あきらかにわかる。したがって、宿の人びとのこころがむかしのままであれば、宿の形態も変らぬのだ。

現代は、破壊の時代である。

持続、存続の美徳は、美徳ともおもわれぬ。

しかし、物事がむかしのままに存在することの安らかさは、この宿の夜更けの臥床の清らかな匂いに包まれて眼を閉じたとき、否応もなく私どもを深い眠りにさそいこまずにはおかない。

明日の我が身がわからぬ夜を迎えては、おちおち眠ることもなるまい。

近年は、旅館よりもホテルに泊ったほうが、むしろ安息を得やすい。それほどに大半の日本ふうの旅館は味気なく、不潔でさわがしく、身心が休まらなくなりつつある。

俵屋では、年輩の女中さんのいうままに身心をまかせていればよく、のびのびとして食べ、休息し、眠ることができる。

京都には、まだ、こうした旅館が他にも残っているはずだ。
それというも、旅館業の真髄が、いまもって伝承されているからだろう。
京都の景観は、まだ破壊されつくしてはいない。日本のこころを育てた景観が、である。
風致が破壊されれば、人心は荒廃する。この簡明な道理を、いまは、あらゆる指導階級が忘れてしまっている。
夕闇が濃くなり、新緑の庭の置き灯籠に灯がともると、美しく、うまい料理が、適当な間を置いて運ばれて来る。
私が泊った夜の献立は、つぎのようなものだった。

珍味　生雲丹とろろ（わさび醤油）。
向　若狭鯛あられ造り（紅蓼・防風・煎油）。
小吸物　丸仕立（スッポン・針葱・丁字麩・忍び生姜）。
八寸　子持若布・柏葉すし・鮎の飴煮・白瓜・一寸豆のシロップ煮。
焚合せ　鯛のあら煮（筍の土佐煮・新蕗の八方煮・散らし木ノ芽）。
焼物　稚児鮎の姿焼（蓼酢）。
中皿　筍の田楽（丁字茄子）。

酢の物　鯛の白子（ポン酢と薬味）。
油物　蒸し貝のバター焼（生野菜）。
留椀　若筍の吸物（木ノ芽）。
水物　枇杷（敷き氷）。

夕飯が終ったころ、ちょうど京都へ来ていた友人が訪ねて来たので、外へ出た。祇園で酒を飲み、十一時ごろ俵屋へ帰り、新館の自分の部屋へ入ると、独特の工夫をこらした寝具が敷きのべられてい、ぬぎ捨てておいた浴衣が新しいものに替えられてあった。

アメリカの映画俳優マーロン・ブランドは俵屋へ泊って、一夜の予定が二夜三夜となり、

「もう少し、もう少し……」

というので、ついに十日間も滞在してしまったそうな。

女中さんたちの接待に、ブランドは瞠目したろう。アメリカでは望んでも望めぬものだからだ。そして旧・新館をふくめ、純日本風の部屋に、異国の人たちが泊っても不便をかけぬ設備が完璧にととのっていたからにちがいない。

翌朝の膳を見れば、どうしても酒がほしくなる。献立は、つぎのごとし。

猪口　金平牛蒡。
煮合せ　湯豆腐（生椎茸・菊菜・湯葉）。
焼物　若狭鯛の一塩（昆布巻・楽京シソ巻）。
皿　焼海苔。
椀　赤出汁。
水物　メロン。

俵屋は京都の高級旅宿として三百年の歴史をもっている。

幕末のころ、井伊大老の腹心として上洛し、朝廷と幕府間に暗躍した長野主膳も俵屋に滞在したところから、舟橋聖一氏が井伊大老を描いた〔花の生涯〕では、俵屋の五代目の当主も登場しているが、この五代目の俵屋主人について〔京都新繁昌記〕という本の中で、

「……ゆゑあつて俵屋へ入家せしが、資性豪邁、仁俠にして一旅店の主人たるに甘んぜず、当時、天下改革の機運に乗じ、家事を妻女に一任して四方の志士と往来し、国事に奔走せり」

などと紹介されている。

明治になってからは、公家や旧大名たちや、木戸孝允（桂小五郎）、大久保利通なども常客だったという。

現在の旧館は、京都の人びとがいう砲焼け（幕末の蛤御門の変）で焼失した後に再建されたものだが、旧態を温存した座敷と庭の見事さと重量感は鉄筋コンクリート建築の比ではないのだ。

いまにも、長野主膳や桂小五郎が、竹の駒寄せのある表構えから、ほの暗い玄関へすっとあらわれて来そうなおもいにさそわれてくる。

この旧態を残すための手入れは、大変なものだろう。いささかの油断もなるまい。

四百坪の敷地に新旧合わせて十九の客室しかない。

客室の大半は庭をもち、日本ふうの旅館でありながら、ホテルの客室よりも一つ一つが独立していて、まるで自分の家にいるようなおもいがする。他の客たちとは、ほとんど顔を合わせることがない。

俵屋が、この旧態をまもりつづけているのは、

「京の旅館だからでございます」

と、女あるじの佐藤年さんはいう。

京都に、日本の歴史と伝統が、まだ辛うじて息づいている以上、女あるじの、この信念

は変ることがないだろう。

俵屋へ泊った翌日、私たちは丹後へ向うことになっていたが、午前中は、ゆっくりと俵屋での時間をたのしんだ。

庭の蹲踞に掛けた竹の上に、白い芍薬が一輪、さりげなく置かれている。

あるじも女中さんたちも、自分の仕事に欲得をはなれて打ち込んでいる。

それが、蹲踞の花片一つを見てもわかるのだった。

昼近くなり、私たちは荷物を俵屋へあずけ、近くのコーヒー店〔イノダ〕へ出かけた。

「イノダのコーヒーをのまないと、自分の一日がはじまらない」

と、京都のイノダ・ファンがいうほどの店である。

午前中の混雑が一段落した時刻で、私たちは、ゆったりとコーヒーをのむことができた。

「昼飯は、どうします?」

と、Kが私に尋いた。

「そうだ、な……」

「駅で弁当を買いましょうか?」

「それよりも、ここでビーフとチーズとハムのサンドイッチを買って行こう。うまいぜ」

「ほんとですか?」

Kは眼を輝やかした。

サンドイッチを買って俵屋へもどると、あるじが列車の中で食べるようにと〔いづう〕のすしを用意しておいてくれた。

これで、この日の旅は、さらに完璧なものとなった。

丹後峰山

和久伝



京都駅から急行の〔丹後（たんご）〕に乗り、保津川のながれに沿って亀岡から園部のあたりまでは、いまや京都のベッド・タウン化してしまったようで、木立も野も丘も切りひらかれ、ビルや住宅が景観を一変させてしまった。

この前に、このあたりを自動車で通ったのは四年前のことだが、そのころにくらべると、いまはさらに変貌がはげしい。

列車は丹波高地を走り、かつては軍港だった舞鶴を過ぎると、車窓に若狭湾（わかさ）が見えてきはじめる。

間もなく列車は丹後の名勝・天ノ橋立（あまのはしだて）にさしかかる。

天ノ橋立は、先ず、丹後随一の名勝といってよかろう。

丹後は京都府に編入されているけれども、ここまで来ると、京都から急行列車でわずか二時間余とはおもえぬほどで、いかにも、

「丹後の国へ来た……」

というおもいがする。

いわゆる高度成長的な開発の魔の手は、まだ丹後には伸びていない。車窓から見る風景は、四年前……いや八年前と、ほとんど変らぬ。

八年前に、私は天ノ橋立を見物に来て、宮津へ泊ったことがある。そのときは、天ノ橋立から列車で三十分ほど先の丹後・峰山という町を、私は見ていなかった。

峰山町が丹後縮緬の名産地であることは、わきまえていたが、峰山へ行く機会もなく、すすんで行ってみる気もなかったといってよい。

ただ、峰山から山地へ分け入ったあたりの味土野というところに、細川ガラシヤの幽閉の地があることは知っていて、

(折があれば行ってみたい……)

と、おもわぬでもなかった。

そして四年前に、はじめて私は峰山へ行った。ガラシヤの遺跡を見に行ったのではなく、某出版社の講演会が峰山で催され、同業の作家ふたりと共に京都から丹後に入ったのである。

折しも秋の夕暮れだった。

この講演会は四日がかりのもので、毎夜、ちがったホテルや旅館へ泊るわけだが、それ

は私たちのたのしみでもあり、また、不安でもあった。

どうかすると、一晩中ねむられぬ旅館へ泊らされてしまうことがある。寝具が不潔だったり、宴会の大さわぎの後の、酔った人びとの高声と乱暴な足音が夜半すぎまで廊下にきこえていたりすることもあるからだ。

で、峰山の町を抜けてしばらく行くと、突如、目の前に旅館〔和久伝〕があらわれた。町外れの、丘を背にした田圃の中に、このような立派な建物の料理旅館があろうとは、おもいもかけぬことだった。

丘の中腹へかかった別棟の〔月佳亭〕という数寄屋造りの部屋へ私は泊ったのだが、その快適な一夜は忘れがたかった。

この夜は主催者たちと広間での宴会があり、膳部も宴会用のものが運ばれてきたが、いずれもうまい。

そして朝になると、大きな炉を切った一間で魚を焙ったり、粥を煮てくれたりした。

それがまたよかった。そのとき同行したM氏は、

「和久伝が忘れがたい」

というので、それから数度、わざわざ足を運んだほどだ。

翌日は雨になってしまったし、また私ひとりの旅ではなかったので、味土野の細川ガラシヤ遺跡を見そこなったのが心残りだった。

そこで、今度、京都へ来たのをさいわい、峰山まで足をのばすことにしたのである。

前日の雨もやみ、峰山へ着くころには快晴となった。

私たちは、和久伝の女主人が運転する車で味土野へ向った。ときに午後四時をまわっていたろう。

奥丹後の山路には、うす紅色のあすなろの花と、山藤が実に多い。

五月の夕暮れは、あくまでも明るかった。

細い山路をのぼるにつれて、木立も深くなり、滝の音がきこえはじめた。

このあたりの川では、鮎がとれるそうな。

村もないではない。

ないが、しかし、村をはなれる人びとが多く、山深い村里のところどころに、つぶれかけた藁屋根がのぞまれた。

「住む人がいなくなりますと、家は荒廃してしまいます。そして一冬のうちに、雪が押しつぶしてしまいます」

と、運転をしながら女主人が語った。

やがて、私たちはガラシヤ遺跡に着いた。

細川ガラシヤの名は玉子。あの明智光秀・煕子夫妻の三女に生まれた。

ときに永禄六年というから、父の光秀は、まだ越前の朝倉家に身を寄せていたわけだ。光秀は、やがて織田信長に召し出され、その才幹を信長に買われ、目ざましい出世をとげることになる。

玉子が、父の主人の織田信長の口添えによって、細川藤孝の息・忠興と結婚をしたのは天正七年のことだ。このときの玉子は、三年後に自分を打ちのめした大異変を予知してはいない。

三年後の天正十年夏。父の明智光秀は京都の本能寺に織田信長を奇襲し、信長を討った。

天下人を目ざす光秀は娘婿の細川忠興（丹後・宮津城主）に援軍を請うたが、細川父子はこれを拒絶し、共に髪を切って謹慎すると共に、玉子を奥丹後の山中の味土野へ押し込めた。

明智光秀は間もなく、羽柴秀吉（豊臣秀吉）と山崎に戦って破れ、居城の阪本へ逃げる途中、土民の手にかかって討ち取られたという。

つまり玉子は、夫の細川忠興にとって主筋にあたる織田信長を害した逆臣のむすめというレッテルを貼りつけられたことになる。

このとき、細川忠興の家臣たちの中には、玉子を自害させ、潔白をしめすべきであると主人の忠興にせまる者がいたそうだが、忠興はこれを押しとどめた。

それほどに忠興は、妻の玉子を愛していたことになるだろう。

玉子は味土野に幽閉中にも、忠興の次男を生んでいる。

天下制覇の道を一気に駈けのぼりはじめた豊臣秀吉は、

「ゆるしてやるがよい」

と、玉子の幽閉を解いてくれたが、変転きわまりない戦国の世の、大名の妻として生きる身に受けた父の謀叛の衝撃は深く大きかった。

これから先も、

（何が起るか知れたものではない……）

のである。

玉子がキリシタンの信仰に心の安らぎをもとめ、ガラシヤという洗礼名を受けたのは天正十五年の夏だった。

玉子の予感は適中した。

豊臣秀吉が病歿するや、関ガ原の合戦が起り、それに先立ち、西軍の石田三成は大坂城を手中におさめ、大坂にいた諸将の妻子を人質にしようとした。

細川ガラシヤが、息子の嫁や娘たちを逃がし、西軍の強制を拒絶し、大坂の細川屋敷で自決したのは、このときだ。ときに三十八歳。

「冬の、霙が降る日なぞに此処へ来たら、わびしくてわびしくて何ともいえません」

と、和久伝の女主人はいった。

山の中の小高い場所に〔細川忠興夫人隠棲地〕と彫られた立派な石碑が建てられている。

この傍に立って谷間を見下ろすと、あちこちに、雪が押しつぶした農家の屋根が土に埋もれかけているのだった。

まだ明るい夕空に白い月が浮かんでいて、しきりに山鶯が鳴いている。

新緑の青さと匂いの中でも、人の気配もない山里は、いかにもさびしかった。

それから私たちは山を下り、丹後半島の海岸へ出て、血のような夕陽が日本海に落ちるのを見た。

この夜は宴席ではないので、気取らぬものが出て、私たちをよろこばせた。献立はつぎのようなものだ。

御造　おこぜの糸造り。生雲丹とおこぜのキモ。ワラビのあしらい。

八寸　ニンナイ（丹後の海でとれる貝）の塩蒸し。木ノ芽和え。鯛の白子。

焼物　稚鮎の塩焼。

酢ノ物　モズク。赤貝。山ウド。針ショウガ。

煮合　丹波筍（たけのこ）の八宝仕立。山蕗と鰯（いわし）。

ことに新鮮な鰯をほっこりと炊（た）いたものは、四年前に来たときも私の舌をたのしませてくれたものだ。

ところで……。

和久伝の先祖は、若狭の小浜（おばま）の廻船問屋で、豊臣秀吉の朝鮮出兵の折には水軍として従軍したのだそうな。

後年、小浜から峰山へ移り、瀬戸物商だったが、のちに旅館となったらしい。

昭和二年の丹後大震災で峰山町が全滅したときも、

「丹後縮緬と盛衰を共にするのだ」

というわけで、町の中央に木造三階建の旅館を再建した。これも実に立派な建築だったらしい。

太平洋戦争が終り、縮緬も復興してからは、業者が和久伝を商用の本拠とするかたちになり、現当主夫妻が町の中央からはなれた静かな山の端に和久伝を移したときも、峰山に後援会ができ、一人十万円を持ち寄った。

「縮緬があるかぎり、和久伝を峰山から失（な）くしてはならない」

というわけだ。

和久伝という料理旅館には、こうした特殊な背景がある。

この宿でも老練な女中さんたちは二十年、三十年の勤続者だ。

「お客によろこんでもらうのがうれしい」

というので、

「田舎者のよさでございましょう」

と、女主人はいうが、そんなことで片づけられるものではあるまい。

夜に入れば、業者の宴会もあって峰山の芸妓の三味線もきこえる。

和久伝は、峰山随一の社交場でもある。

立派な建築だが客室は七室。それだけ、ゆったりとしている。私が泊った月佳亭は三間つづきで、それに茶室がついている。

そのほかに、商用の客が泊るビジネス・ルームと称するものが七室あって、これも小さいがよくできている。

和久伝では、旅行代理店はすべて受けつけていないらしい。代理店が中に入ると、その手数料が客のふところから出ることになるので、

「それでは、仮にお客さまが一万円払っても、こちらでは八千円のサーヴィスしかできません」

だから、代理店を通しての商売はしない。

月佳亭の外は田圃である。
蛙の大合唱だ。
雨戸を閉めてもきこえるが、すこしも気にならぬ。
ほんとうに何年ぶりかで蛙の唄を聴いた。
翌朝は、炉を切った部屋で朝食をとる。
ハタハタやサヨリや、カレイの一塩や、椎茸などを炉の火で焙っては食べる。
ビールも酒もうまい。
そのあとで、ワラビの雑炊。雑炊がいやなら焼きむすびだ。
「どんどん入ってしまいますね。ふしぎだなぁ……」
と、若いKがいった。
今度は冬に来て、この炉端で名物のカニの甲羅焼を食べたいとおもった。
午後、私たちは峰山を発った。
そして宮津で列車がとまったとき、ホームへ下りて冷えたビールを買い込み、
「さあ、はじめよう」
と、和久伝製の弁当をひろげた。
弁当箱の中には、私の大好きな鰯の炊いたのがたくさん詰まっている。

飛驒古川　蕪水亭



むかし、太平洋戦争中に、私は冬の飛騨・高山へ遊びに来たことがある。
美濃の太田から高山へ出たのか、名古屋から行ったのか、よくおぼえてはいないけれども、東京で生まれ育った私は、高山の町を埋めつくした積雪を見て、
（凄い!!）
瞠目したことをおぼえている。
私は駅前の店で藁製の雪沓を買い、これを履いて臥牛山の城址公園へのぼったりした。
現代の観光都市と化した高山からは想像もつかぬ山国の町だったが、それでも古風な店屋で純毛の帽子だのジャンパーだのを売っていた。
物資が不足していて、そのころの東京にはなかった品物だったのである。
しかし「その帽子を二つ下さい」というと、「一つにして下さい」と、ことわられた。
その店の老婆は、私が買った帽子を包みながら、
「お客さんが二つ、かぶるのですか?」

「いや、一つは東京にいる知り合いの年寄りにあげようとおもって……」
「まあ、そうかね……」
帽子はスキー帽のような形をしていて、二重になっているとこを下すと耳や頬を被うようになっていて、寒気を防げる。
「そうかね、お年寄りにあげなさるのなら、もっておいでなさい」
ついに、老婆は二つ売ってくれた。私はジャンパーも買った。
そうして、高山の雪の中をあちこちと歩きまわっているうち、〔アルプス亭〕という小さな食堂を見つけた。
入って見ると、薪のストーブが赤々と燃えていて、よい匂いがたちこめている。
この食堂では、チキン・カツレツとチキン・ライスを出していた。他の料理は、ほとんどなかったような気がする。
高山では、鶏が豊富だったのだろう。
私はカツレツもチキン・ライスも、おかわりをした。ことわられるとおもったが、ことわられなかった。すばらしい米を使っていた。
このときの高山の第一印象は、いまも私の胸から消えぬ。
どこへ行っても、親切にしてくれた。
この日と次の日を高山へ泊り、三日目に高山から一駅先の飛騨・古川へ行き、〔蕪水亭〕

という旅館へ泊めてもらった。当時は旅館というよりは、料理屋のような感じだった。それは高山の人に、よい料理屋だと聞いたからだろうとおもう。

蕪水亭では、奥の二間つづきの離れ屋へ泊った。

ここでも鶏が出た。鶏鍋である。

翌朝は、次の間の小さな炉端で、飛騨名物の朴葉味噌をしてもらい、酒をのんだ。たしか酒は二合までしか出さなかったようにおぼえている。

私は、この宿の家庭的なもてなしと、朴葉味噌が、すっかり気に入ってしまった。

囲炉裏の上の金網へ朴の葉に盛った味噌とネギのぶつ切りを乗せ、焼きあがってくるのを、ふうふういいながら食べる。

東京の者にとっては、このうまさはまったく経験のないものだった。

（戦争が終ったら、また、高山や、この宿へ来てみたいな）

そうおもった。

おもったが、絶望した。

戦争は、いずれにせよ終るだろうが、そのときまで私の命があるかどうかわからない。おそらくないだろう。

間もなく、私は海軍へ入り、どこへ行くかわからぬが、戦争中の日本の一兵士になることは決定している。

「やっぱり、ダメだねえ」
炉端で、私がつぶやくのを、傍で給仕していた女中さんが、
「何が、ダメなんでしょうか？」
「いや、こっちのことです」
あわてて、私は手を振った。
そのころの若かった自分や友人たちのことを、いまになってふり返ってみると、たしかに絶望的であり、自分が生涯をかける仕事も、
「何といったって、この戦争に生き残った上でなくては、決めることもできない……」
のが現実だった。
たしかに明るい気持ではなかったが、さりとて暗い日々を送っていたわけでもない。
そこはやはり、何事にも若さが解決してくれていたのだろう。
ところが、私はろくに戦場へ出ることもなく、生き残った。
そして、いまから十五、六年前に、古川の蕪水亭をおとずれ、むかしのままの離れ屋へ泊り、朴葉味噌を味わったのだった。
そのときの女中さんたちは、十五年後のいまも蕪水亭にいる。
飛騨の高山は、上古以来、国府が在ったところだから、高山に近い古川も古いむかしか

らひらけていたにちがいない。

蕪水亭は、宮川と荒城川の、ちょうど合流地点にあり、川をへだててながめると、まるで中洲の突端に位置しているように見える。

明治初年に、現当主の祖父にあたる北平宇吉さんが料理屋として開店し、二代目が昭和十四年に病歿したのち、その妻（現当主・北平昭雄さんの母）が経営を受け継いだらしい。

三代にわたって、蕪水亭のあるじは、みずから庖丁を把っているだけあって、この旅館の料理はうまい。

「料理人というものは、一つの型にはまって、それから逸脱することを非常にきらいます。けれども、私たちがむかしから生活してきた中で積みかさねられてきた食べものの中には、すばらしい味があるとおもうのです。素朴で自然な、ね。そうしたものの中から、お客さんにおすすめしてみようということで、いまは評判になっている朴葉味噌をお客さんの前へ出したのは、飛騨では蕪水亭が最初だろうとおもいます。古川という町は別に観光のための何物もないところですから、せめて田舎の、残された味を味わっていただきたいとおもうのです」

と、現当主は語った。

俗に、

「焼味噌を三年つづけると身上が潰れる」
という諺が飛騨にはあるそうな。
それほどに、うまいということなのだろう。
さて、この夜の食膳の献立をしるしておこうか……。

前菜　岩梨。むかごの胡麻和え。
吸物　車海老と寄せ独活。三ツ葉。
造り　黒鯛。鮪。烏賊。
焼肴　山女魚の塩焼。筆ショウガ。
焚合せ　山女魚の甘露煮。笹の子。南瓜。山独活。ころ芋の田舎煮（串打ち）。
蓋物　甘海老団子の煮おろし。
小皿　冷よもぎ麺（錦糸卵、針海苔）。
汁　なめこ。春菊（田舎味噌仕立）。
御飯。香の物（白菜古漬）。
果物　メロン。

奥庭をへだてた向うの座敷の宴席に古川の芸妓が入り、三味線や太鼓の音がきこえてく

る。

蕪水亭は、古川の旦那衆があつまるところでもある。

この宿の傍をながれる荒城川は、別名を蕪川（かぶら）といい、むかしは秋になると、川べりで、女たちが飛騨の赤蕪（あかかぶ）を洗ったものだそうな。

白い手ぬぐいをかぶった飛騨女や子供たちが川べりにならび、赤い蕪を洗う光景は、

「いまも目に浮かびます」

と、宿のあるじがいう。

飛騨ブーム、高山ブームの影響は古川におよんでいないが、それでも十五年前にくらべると古い家々が改築され、酒場も喫茶店も料理屋も大分に増えたようだ。

翌朝。水鳥や鯉が泳いでいる荒城川に架かる今宮橋を東へわたり、一之町の一つ先の道を左右へ入ると、瀬戸川とよばれる小さな川が清らかにながれてい、さまざまな大小の鯉が群れ泳いでいる。

このあたりは白壁造りの土蔵（どぞう）や、むかしのままの家がたちならんでいて、ちかごろ、古川ではこのあたりを〔白壁土蔵街〕などと名づけ、観光の名所にしようとしているらしい。

蕪水亭へもどると、保健所の回診車がとまっていて、女中さんたちが検診を受けていた。町の諸方から老人たちが回診車へあつまって来る。勤めに出ている人たち以外の町民

の検診なのだろう。

蕪水亭の女中さんたちも勤続三十年、二十年で、孫が五人もいながらはたらいている元気な人もいる。

あるじは、しきりに、

「田舎の宿で、田舎料理で……」

と、いうのだが、この宿は、ほんとうに気がおけない宿で、一週間も泊ったら、さぞ気持がよいだろう。

ざっくばらんな、それこそ、自分の部屋から浴場へ下着だけで行けるような気やすさがある。

午後になってから、私たちはタクシーで高山市へ入った。約三十分ほどだろう。

高山へ来ると、ジーンズの若い男女が夏の陽光を浴びながら地図を片手に群れていた。

私は、同行の二人を上二之町の蕎麦屋〔恵比寿(えびす)〕へ連れて行った。

この店は古い。入れ込みに客が押しかけている。蕎麦がうまいからだ。

先ず、たっぷりと皿に盛られた山菜の漬物でビールと酒をのむうちに、やや太打(ふとう)ちの蕎麦が運ばれてくる。

恵比寿を出てから、高山の町を歩いた。

三十何年前の、ひっそりと雪に埋もれていた高山だとは到底おもえぬ賑(にぎわ)いだ。

どの道にも観光客があふれていた。
高山では古い民家は観光の資源であるから、きれいに手入れをし、軒なみに喫茶店だの蕎麦屋だのをはじめている。
「アルプス亭っていうレストランは、いまもあるんですか。ぼく、そこでチキン・カツレツが食いたいなあ」
と、Kがいった。
「いや、もうない。この前に来たとき、たしかめたんだ」
「残念」
歩き疲れて、私たちは、ひっそりとした喫茶店へ入った。
〔手風琴〕という店で、中年の女のひとが、うまいコーヒーをいれてくれた。
アイス・クリームには生の苺を一つ乗せてある。苺をスプーンでつぶし、クリームとまぜて口へ入れるとうまかった。
カウンターの向うの古めかしい座敷の床の間に、これも古い手風琴が飾られてある。
トニー・ベネットの〔想い出のサンフランシスコ〕のレコードが低く鳴っている。
客は、私たちだけだった。
「そろそろ、帰ろうかね」
「そうしましょう」

「駅へ行く途中で、ほら、宮川のほとりでお婆さんが屋台を出していたみたらし団子を一本、食べて行こうか」

「いいですね」

私たちは外へ出ようとした。

そこへ、東京から来たらしい若いアベックが通りかかって、女のほうが、この店の〔手風琴〕とある看板を見て、

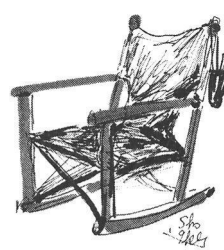
「ねえ、ねえ、ねえ。なあに、このテカゼゴトってのは？」

尋かれた男は、ぽかんと看板を見ていたが、

「さあ、なんだろうな……」

と、つぶやいた。

軽井沢 万平ホテル



はじめて軽井沢へ行ったのは、約四十年も前のことで、そのとき私は、仲のよい友人と二人連れで南アルプスで遊び、八ケ岳の山麓を小海線で小諸へ出た。

小諸の懐古園を見物したりしているうち、夕暮れになったので、タクシーで沓掛（現中軽井沢）へ出て、星野温泉へ泊った。

そのころの沓掛には、江戸時代の宿場の面影が濃厚にただよっていて、晩夏の夕闇の街道には人影もあまりなく、いかにも長脇差を腰に、さんど笠をかぶった〔沓掛時次郎〕があらわれそうな情趣があり、すでに大人の世界で働いてはいたにせよ、まだ少年といってもよかった私たちを感激させたものだった。

翌朝は軽井沢へ出て、貸し馬に乗って遊んだりしたのだが、そのころは現代の軽井沢の夏の殷賑さはなく、いかにも物しずかな山の避暑地で、小道の中の深い木立から洩れる陽光を受け、外国の金髪の少女がハンモックで昼寝をしたりしていた。

それを見た友だちが、うっとりとして、

「まるで泰西名画を見ているようだね」

と、私にささやいたのを、いまもおぼえている。

つまり、軽井沢の風物が、それほど金髪の美少女の午睡に調和していたからだろう。

この日の私たちは軽井沢へは泊らず、旧街道を碓氷峠へのぼり、そこから谷底へ二里ほど下った霧積温泉へ泊った。

水のようにぬるい温泉へ入り、二人して四時間も将棋をさした。

老人たちの中には温泉へつかりながら、おむすびを食べている人もいた。

軽井沢の〔万平ホテル〕へ泊ったのは、その翌年か翌々年の初秋だったろう。

いかにも格式が高く、それでいて、若い私たちにも親切で、友人と二人で、たしか二泊した。二人とも年齢よりは四、五歳老けて見えたし、ホテルの記名も二十歳とか二十一歳に書いて、少しも怪しまれなかったものだ。

たとえば、吉原の大門の交番の前を、二人とも、くわえ煙草で通っても警官にとがめられなかったものである。

この〔老け顔〕のおかげで、私と友人のIは、どれほど得をしたか知れない。

そのとき、Iと私が泊った部屋が、いまも万平ホテルに残っている。

このように旧態を残しながら、現代的な設備をもった新館を設けているわけだが、今度、何年ぶりかで万平ホテルへ泊っておどろいたのは、食堂の料理が一変したことだっ

た。どちらかといえば、戦前の洋食の名残りをとどめた料理が、いま流行の新しいフランス料理の形態に変って、しかも、旨い。

泊った日の夕食に、私が食べたものは、つぎのごとくだ。

食前酒　キール。
前菜　ほたて貝のバルケット入り。
肉料理　サーロイン・ステーキ。
サラダ　トマトとたまねぎ。
デザート　黒すぐりの氷菓。コーヒー。

同行のWとKは、仔羊の蒸焼だの、海老・アサツキ・トリュフ・クレソンのサラダだの、虹鱒のスモークだのを食べたようである。

翌朝の食堂には、日光の金谷ホテル同様に、クレープ風のパン・ケーキがあって、これにシロップとベーコンを添えて食べるのは、まさに戦前のホテルの朝食の醍醐味だろう。

また軽井沢だけに野菜がすべてうまい。したがって朝もトマト・サラダを出してもらうことになる。

万平ホテルでは、冬期に若いコックたちを銀座の〔マキシム〕へ行かせ、修業させてい

るそうだ。

コックを独自に養成しているのは、万平のむかしからのやり方だが、このように神経をくばっているとは私も知らなかった。

明治四十年に発刊された吉田東伍の名著〔大日本地名辞書〕は、軽井沢について、

「……沓掛の東、離山と碓氷峠の間にして、標高九百メートル許の荒野に居る。民家は二区に分れ、北なるは旧駅にして南なるは新駅なり。鉄道停車場あり。高崎へ二十五マイル。長野へ四十六マイル。此地は高爽無双にして、盛夏の避暑に宜し。近年、富豪の徒、亭館を置く者多し」

と、ある。

江戸時代は、中仙道の一駅で、江戸へ三十六里三十一丁。京へ九十八里二十六丁。民家は百二、三十軒ではなかったろうか。

明治の世に入り、近代国家として歩みはじめた日本へ渡航して来た外国人たちは、彼らの嗅覚によって、それぞれの故国を偲ばせる土地へ目をつけ、集まって来るようになった。

万平ホテルの初代・佐藤万平が軽井沢で最初に貸別荘を建てたのは明治二十年だそうな。

佐藤万平の家は江戸時代から、軽井沢で〔亀屋〕という旅籠を経営しており、その場所は、現在の軽井沢銀座通りの郵便局があるあたりだったらしい。

夏になると、軽井沢へやって来る外国人が増えるばかりになったので、亀屋万平は内部を板の間にし、絨毯のかわりに筵を敷き、洋風のかたちをととのえ、外人避暑客に提供したが、

「どうも、亀屋という名は、西洋の人たちにはいいにくいらしい」

というので、

〔万平ホテル〕

と改め、同時に、外人専門のホテルを本格的につくろうと考えはじめた。

いまの万平ホテルがある桜ノ沢に二万坪を確保し、二十二の客室、給食給水及び洗浄式下水装置を完備した洋館ホテルを完成したのは明治三十五年だった。

このとき、横浜の外人たちからも融資をうけたというから、避暑地としての軽井沢は相当に着目されていたにちがいない。

戦後の……ことに日本が高度成長期に入ってからの軽井沢は、それこそ、

「われも、われも……」

と、別荘を建て、盛夏の混雑は一種異様の風俗を現出せしめることになった。

夏休みと別荘には縁のない私だが、シーズン・オフの軽井沢は、大好きである。

夏のシーズンへ入る前の、六月はじめの軽井沢は、まだ人の気配もなく、新鮮な若葉の匂いがむせ返るようだし、また十二月の中ごろの、これはさらに静まり返った冬木立と雪の浅間山をゆっくりとながめるのもよい。

いつだったか、ちょうどクリスマスの日に万平ホテルへ泊り、翌日はタクシーで浅間山の肩口を越えたとき、ついに他の車には一台も出合わなかったことがある。

そのときは小説の取材で、長野原から伊香保温泉まで行ったのだが、鏡のように晴れわたった冬空の下を、浅間、榛名の両山をはじめ、こころゆくまでたのしみながら、ドライブしたのだった。

中庭に面した万平ホテルの食堂は、ほんとうに居心地がよい。

料理がうまいばかりではなく、給仕をする人たちが、いずれも礼儀正しく、親切だからである。

遅い朝食をすませてから、私たちはタクシーで旧道を碓氷峠へのぼってみた。

名物の〔ちから餅〕を売る茶店も、むかしにくらべると、ずいぶん増えたようにおもえる。

熊野神社は峠の中央にあり、その参道が、群馬県（上州）と長野県（信州）の県境というわけで、神社の神主も、両県から一人ずつ出ており、それぞれ、茶店を経営し、ちから

餅を売っている。

私たちは、長野県側の神主さんの茶店〔しげのや〕へ入って、ちから餅を食べた。

それは実に、四十年ぶりのことで、旧友Iと霧積温泉へ向う途中食べて以来のちから餅だったが、味は往年のままのように、うまかった。

朝方は薄日がさしていたのに、霧が濃くなってきはじめた。

私たちは、峠から軽井沢へ引き返すことにした。

白糸の滝を見てから、

「沓掛へまわって下さい」

と、私はタクシーの運転手にいった。

沓掛には、私の亡師・長谷川伸の〔沓掛時次郎〕の碑があり、それをまだ一度も見たことがなかったのをおもい出したからだ。

石碑は、中軽井沢駅に近い長倉神社の境内の一隅に在った。かなり大きなもので、亡師の筆蹟が、

「千両万両に枉げない意地も、人情搦めば弱くなる。浅間三筋のけむりの下で、男沓掛時次郎」

と刻まれてある。

まだ亡師が元気なころだけに、筆にちからがこもってい、なつかしかった。

いうまでもなく、沓掛時次郎は実在の人物ではない。作者の実父が家へ連れて来た流れ者の土方と孕み女がモデルだそうで、その土方を、旅の渡世人に移し変えて戯曲にしたものである。

昭和三年十二月、新国劇の沢田正二郎によって、帝国劇場で初演され、実は私も母に連れられて、このときの〔沓掛〕を観ているのだが、まったく記憶にない。私は六歳だった。そのくせ、同時に上演された〔キリスト〕の場面は、おぼろげながら脳裡に残っている。

その後〔沓掛時次郎〕は舞台に映画に諸優が演じて一世を風靡したので、主人公の生まれ故郷に石碑が建ったのである。

石碑を見ているうちに、雨が降り出し、運転手が傘を持って駈けつけて来てくれた。

「さあ、そろそろ東京へ帰ろうか……」

私がそういうと、同行のKが、

「では駅でゴルフ弁当を買っておきましょうね」

すかさず、こたえた。

厳島　岩惣



瀬戸内海・広島湾に浮かぶ厳島（いつくしま）〔宮島〕は、松島、天ノ橋立と共に日本三景の一つである。

二十年ほど前に、私は九州から帰京の途中、広島へ立ち寄った折、厳島へわたり、半日の見物をたのしんだ。

それから間もなく、広島出身の、知り合いの老人に会ったとき、

「厳島へ行って来ましたよ」

告げると、老人は、

「で、お泊りになりましたか？」

「いえ、半日ほどいて、広島へ引き返しました」

「なあんだ……」

老人は、さも、がっかりした様子で、

「厳島は、泊ってみなくては、ほんとうのよさがわかりません」

「ほう……」

「今度、おいでになったら、厳島の岩惣へ、ぜひとも、お泊りなさい」

「聞いたことがあります、その旅館……」

「別に私は岩惣の宣伝をするわけではありませんが、そりゃあ、いい。ぜひともお泊りなさい」

老人は熱心にすすめて、そのうちに私も暇をつくるから、一緒にまいりましょうといってくれたが、それが実現しないうちに、老人は他界してしまった。

以来、親しかった、この老人のことを想い出すたびに、老人があれほどすすめてくれた旅館・岩惣へ、

(そのうち、何としても泊りに行こう)

おもいつつ、たちまちに二十年の歳月がすぎてしまった。

そして、むかし、厳島へ行ったとき、周囲三十キロメートルにおよぶ島めぐりの船に乗って見た、この島の美しい姿をおもい起したものだった。島には弥山とよばれる山があり、この山を中心に原始林がひろがっていて、そうした自然美があまり損われていない。

損われたのは、大野瀬戸をへだてた宮島口一帯の景観であって、船で厳島へわたり、振り返って見るとき、宅地造成のために切り取られ、削りつくされた無残なありさまには嘆息を洩らすよりほかに仕方もない。

以前は、宮島口一帯の、うす汚れた遊園地や工場などもなかった海辺の風景が、瀬戸の彼方に横たわる厳島の全容と調和し、はるかに、海に浮かぶ厳島神社の朱色の鳥居をのぞむとき、当然ながら、日本の歴史と、歴史を彩った人びとへの想いにさそわれるのだった。

厳島は神の島である。往古、この辺りの海域に住み暮していた人びとは、厳島そのものを神聖視した。

そして、推古天皇のころ、はじめて社殿が造営されたという。大和朝廷のちからが瀬戸内一帯におよんだとき、厳島神社は、海上の守護神としての重味を加えた。

さらに下って平安末期になると、平清盛によって、厳島は平家の氏神となった。いま、私たちが見る社殿の結構は、清盛の構想によるものだったろう。

山を背にした朱色の社殿が海へ突き出している。汐が満ちてくると鳥居も海上に浮かぶ。優美な平安の面影を濃厚にとどめた厳島神社が、宮島口から乗った船の窓へ近づいてきた。

私たちが厳島へ向ったのは、薄曇りの日の夕暮れだったが、空は明日の晴天を約束するかのような明るみをたたえている。

わずかに十五分で瀬戸を渡り厳島へ着いた。

以前は、この島を訪れる観光客の大半は見物をすませ、引き返してしまい、島へ泊るの

は、その三割にみたなかったそうだが、いまは鉄筋の大きな旅館も増えつつある。

旅館・岩惣から迎えの車が来て、私たちは、にぎやかな表通りから、山裾の小道へ入って行った。

濃い夕闇の中に、木立が鬱蒼として見える。その向うに灯が見えた。〔岩惣〕へ着いたのだ。

車から降りると石畳の道に、名物の鹿が立っていて、私たちを親しげな目ざしで見つめている。

奈良の鹿は目つきが鋭くて怖いけれども、厳島の鹿は優しげで、私が手を出して頭を撫でても、逃げる気配がなかった。

私は、奥まった離れ屋の〔洗心亭〕へ入ったが、同行の二人と夕飯を共にするため、通路へ出て行くと、そこにも牝鹿が坐っている。中年の女中さんが「この鹿は、今年の五月に生まれました」と、いった。

離れ屋は、紅葉谷の渓流に沿ってたちならんでいる。

島の表口とは、まるで別世界の静寂だけに、川の音が際立つ。

夕飯の献立を記しておこう。

先付　まつぶ貝。えのき茸の紅葉和え。

前菜　乱菊蟹玉。牡蠣のチーズ焼。鮎の赤煮。銀杏塩煎り。稲穂の花揚げ。
吸物　板雲丹の磯辺はさみ焼。なめこ茸。貝割菜。木ノ芽の清汁仕立。
造り　鯛の松皮造り。車海老姿造り。紋甲イカの花造り。
焚合　帆立貝黄金煮。牛肉・グリーンアスパラ巻煮。六方里芋。生椎茸の艶煮。いんげん豆青煮。
焼物　車海老とイカの利久焼。焼シシトウ。
中皿　牡蠣の銀紙焼。セロリ。トマト。パセリ。
追肴　牡蠣殻焼（レモン添え）。
酢物　酢牡蠣（紅葉オロシ、みじん三ツ葉、ポン酢）。
果物　メロン。

料理は、いずれも念の入った、結構なものだった。
夜ふけて、洗心亭へもどりかけると、牝鹿はまだ、通路際の植込みの蔭に躰を横たえていた。

岩惣の創業は安政元年（一八五四年）で、初代は岩国屋惣兵衛。厳島の山々の管理をしながら茶店を経営し、それがやがて、明治維新後の宮島発展と共に旅館となり、伊藤博文

をはじめ、要人たちの来島が重なるにつれ、岩惣も大きくなってゆく。

現・皇后も、天皇と婚約時代に見えておられ、大正天皇、昭憲皇太后も泊られたことがあるそうな。

厳島というところは、むかし、平清盛が許可した、いわゆる〔宮千軒〕のみが私有地となっていて、その他は国有地だ。岩惣専用の敷地は千六百坪で、

「うまいぐあいに、建物のあります囲りまでが私有地で、人が歩むところは国有地です。向うの紅葉谷公園との私どものつき合いは法律制度以前からのもので、公園や川の掃除も、私どもで引き受けております」

と、当主は語った。

岩惣から紅葉谷公園を抜けて、しばらく行ったところの、若宮ヶ原一帯の原生林はすばらしいそうだ。

本館の一部や、私たちが泊った離れ屋は大正年間の建築で、ここへ一夜を過ごした外国人は、紅葉谷の自然と客室が一体となった、環境に目をみはるという。

ところが、日本人の客は、中年以上の婦人などが、鉄の扉がないし、塀もないし、不用心で落ちつけない、などというらしい。都会のマンション暮しは、このように人間を変えてゆくものなのだろう。

私が泊った〔洗心亭〕は、故吉川英治氏が、〔新平家物語〕の取材で来島されたとき、

一週間ほど、夫人と共に滞留された離れで、いま御遺族と親しくさせていただいているだけに、私には、特別のおもいがあった。

翌朝は快晴で、一浴し、裸のまま、現当主の祖母が工夫したという〔紅葉まんじゅう〕を食べていると、川の向うの対岸へ鹿が二匹あらわれ、くびをかしげて私を見ている。

朝食後、本館傍の庭の一角にある茶店でコーヒーをのんでいるときも、鹿はのびのびと散歩したり、眠ったりしている。餌をねだることもなく、逃げようともせぬ。それがまた、この岩惣を別天地にさせているのだ。

原生林に棲む、たくさんの鹿は、このように何処へでもあらわれる。

紅葉谷を歩み、厳島神社へ参詣した私たちは、神社の裏の小さな食堂へ入り、酢牡蠣で酒をのんだ。

外へ出ると、みやげ物屋の軒下にも、海へそそぐ川（この川をさかのぼると岩惣の紅葉谷へ出る）の辺りにも、鹿が遊んでいる。

常緑樹に被われた厳島神社の前面は海に向ってひろがり、汐が引いた鳥居のあたりまで、鹿の姿を見ることができた。

私たちが厳島を去るころ、少しずつ汐がさしてきて、鳥居の裾へ寄せてくるのが宮島口へ向う船の窓から見えた。

宮島口で船を降り、タクシーで広島市内へ向ったのだが、運転手はむっつりとして口も

きかない。

タクシーのラジオが日本シリーズの放送をしており、広島が近鉄に圧され気味だ。

同行のTが、私に「どちらに勝たせたいですか？」と尋いたので、私は口へ指を当て、片眼をつぶって見せたら、Tはすぐにわかって、にやりとした。

車が広島市内へ近づくころ、広島の山本が犠飛を放って山崎が生還すると、タクシーの運転手は、とたんに機嫌よくしゃべりはじめた。

私たちは駅へ着き、松茸弁当と酒を買いこみ、列車を待つことにした。

フランスとスペインの宿



三年前に、平凡社のカラー新書の一冊として〔回想のジャン・ギャバン――フランス映画の旅〕を書くためにパリへ滞在したときは、シャンゼリゼに近いシャトウブリアン通りの〔メイフラワー〕という小ぢんまりとしたホテルへ泊ったが、去年の初秋、今度はフランスの田舎をまわるつもりで、その前後に泊ったパリのホテルは〔オテル・ド・ラベ〕といって、モンパルナスへもサン・ジェルマン・デ・プレにも近い静かな通りにあった。

この通りがカセット通りだ。

〔オテル・ド・ラベ〕は、むかし、修道院だったそうで、近くのマダム街にはカミュも住んでいたらしい。

このホテルの、スペイン風の中庭のあたりに何となく、そうした雰囲気がただよっていた。四十五室の中級ホテルだが、客室もサロンも清潔をきわめている。

掃除も、朝食の給仕も、がっしりとした体格の三十男が三人ほどで、きびきびと取りしきっていて、しかも親切だ。

このホテルへ泊ることにしたのは、何かの雑誌で、小さな写真入りの記事を見て、(これなら、よさそうだ)と、おもい、予約したのだった。

黒と白のタイルを敷きつめた中庭へ出ると、そこは、このホテルを囲んでいるアパルトマンの谷底のようになっていて、日が暮れるとアパルトマンの窓の灯が落ちて来て、中庭が明るむのである。

朝は、鳩がやって来た。

私たちは、ここに二泊してから、先ずバルビゾンへ向ったのだが、三年前に泊ったホテル〔バ・ブレオー〕が満員だというので、フォンテーヌブローの森の入口に近い村外の山小屋風のホテルへ泊った。

それから、私たちは南フランスへ入って行った。

パリ在住のO君が自分の車を運転し、時間のゆるすかぎり、好きなところへ入って行けたのが、ほんとうによかった。

近ごろは、フランスのオート・ルートに面して、アメリカ風の簡易軽便な、それでいて設備のよいモーテルがいくらもあるので、先ず、泊るには困らない。けれども、なるべくは、むかしからのフランスらしいホテルへ泊りたいというので、行く先々のホテルで、目的地のホテルへ紹介してもらったりして、おもいがけぬ、たのしい宿りをした。

私たちはパリを出て三日目に、南仏のアルルへ入り、街道に面した〔オテル・ジュリアス・シーザー〕へ入った。ここは四ツ星の一級ホテルだが、名前のとおり、外観がローマのパンテオン風の堂々たる構えで、常連の客も少なくないらしい。

アルルの町には、ローマ時代の繁栄をしのばせる遺跡が豊富で、人なつこいアルルの人びとと、プロヴァンスの明るい陽光とが一つになって、何ともいえぬ雰囲気を醸し出している。

ホテルの部屋に、蚊や虫の侵入を防ぐ網戸がついているのもよかった。初秋とはいえ、ここまで来ると、さすがに日中は暑い。私は町へ出て半袖のシャツを買った。フランスの、むかしからのホテルには、ほとんど冷房がない。日が落ちると意外に気温が下がる。

それでも、ホテルの食堂の、旨そうなデザートの菓子には蝿があつまってくる。それもまた、アルルらしくてよかった。このホテルのバス・ルームは大きくて使いよいのだが、シャワーの装置が、あまりにも凝りすぎていて、とても私には使えないので、S・O両君の部屋と替ってもらった。

ここの食堂の料理は旨い。

小海老とフォアグラを使った〔サラド・グルマンド〕というオードヴルがよくて、二泊目の夜も、それを食べたし、ビーフ・ステーキもいい。また、ペパーミントの氷菓もよかった。

このホテルへ二泊したのも、従業員が親切で、食事がうまかったからだ。十六、七の、実に可愛いらしい少女の女中さんがドアをノックしたので、開けてみたが何しろ私一人では言葉が通じない。そこで、日本語で「なんだい？」とやったら、少女が両手を重ねて目を閉じる仕ぐさをするではないか。つまり、ベッドの仕度をしに来たというわけだ。そこで私は、シャツを買うときも日本語でやったのである。

翌朝、この少女が廊下を掃除していたので、日本のカレンダーをあげると、大よろこびをしてくれた。

私たちは、このホテルで行先のホテルをいくつか予約し、ニースからマルセイユへもどって来て泊ったのが、旧港から丘ひとつ隔てた入江にのぞむ〔プティ・ニース〕というホテルだった。ここが、とてもよかった。

〔プティ・ニース〕は、むかしから、このあたりに住んでいた貴族の居館をホテルにしたものらしい。フランスの俳優フランソワ・ペリエそっくりの中年の主人も、その後裔らしく、いかにも上品な物腰だったし、その母堂は八十をこえた人なつかしげな優しい老婦人だった。

海にのぞむ食堂もサロンも、また客室も、しっとりと落ちついた装飾がなされてい、客室も二十そこそこなので、まるで自分の家にいるような気分にさせられてしまう。私の部

屋には浴室の中に、別にシャワー・ルームもついている豪華さだった。
料理もうまい。私は海老のオードヴルにヒレ・ミニヨンの青胡椒風味。それに〔カクテル・ド・ソルベ・オ・フリュイ〕と称する五種類（メロン・レモン・木苺・苺・ヴァニラ）の氷菓が大皿に盛られたデザートにした。
給仕が私に、
「香港から、おいでになりましたか？」
と、尋いたので、おもしろくなって、
「そうだ」
うなずいておいた。中国人に見られたらしいが、やがて、日本人とわかった。
鉛色の海から地中海名物の強風が、突然に吹きつけてくるので、客室の窓は三重になっていた。
翌朝、私は八十五歳の老婦人と仲よくなってしまい、帰るとき、陶器のバター入れをプレゼントされた。お婆さんの頬に別れのキスをしたら、何だか、とてもよい香りがした。
朝飯のとき、老婦人が私たちのために、久しぶりで調理場へ出てつくってくれたという、オムレツのすばらしさは、とても文字には書きつくせない。
「ここはよかった。もう一晩、泊りたかったね」
車が走り出してから、見送ってくれたホテルのブルドッグと黒人のボーイに手を振りな

がら、私はS君にいった。私も、ずいぶん、いろいろな旅館やホテルに泊ったけれど、これほどに印象が深かった宿泊の一夜は、あまりなかったといってよい。

この日は、明日、スペインへ入るというので、ペルピニヤンに近い山の中の、これも旧豪族か何かの城館ホテル〔シャトー・ドゥ・リール〕へ泊った。

これこそ、フランスの童話に出てくるような古めかしい城館で、そそり立つ山肌を背に建てられており、洞穴のような通路や階段を通って部屋へ入ると、バス・ルームなどは最新の設備がととのっているわけだ。

山中だけに風が冷めたく、樹林の中の、別館の食堂内の大暖炉には薪が燃えさかっている。

私はポトフ（フランスのおでん）に満足した。

朝飯は、バロック風な装飾にととのえられたゲーム室のカード・テーブルで食べた。

スペインでは、バルセロナに二泊、マドリッドに一泊、グラナダに一泊したきりだが、最もおもしろかったのが、グラナダのアルハンブラ宮殿のすぐ近くにある山上のホテル〔アルハンブラ・パラス〕だった。

いかにも、今世紀初期の〔よき時代〕を想わせる〔観光旅館〕であって、私たちのほかには、アメリカの観光団がびっしりと入っていた。

アルハンブラ宮について、この稿に語る余地はないが、十六世紀に、カルロス五世がアルハンブラを訪れ、

「この宮殿の、すばらしい眺めを失った人は、さぞ悲しんでいるだろう」

と、回教王ボアブデイルに同情したほどの眺望を、〔アルハンブラ・パラス〕もほしいままにしている。私が入った小さな部屋は古びていて設備もよくなかったけれども、グラナダの市街の彼方に沈む夕陽の圧倒的な景観を、入浴後のベッドに寝そべって、おもうさま、たのしんだひとときは、いまもって忘れがたい。

サラセン形式の匂う、このホテルの古めかしさも、まんざらではなく、大食堂で、アメリカの観光団と共に食べたバイキングふうの夕飯も、うまくはなかったけれど、陽気なアメリカ人たちと、ガヤガヤと食べるのも一興だった。

ひろびろとした一階の酒場からラウンジにかけて、アメリカ人がひしめいている。まるで、一九三〇年代のフロリダのホテルへでも来ているような感じだったし、ジン・フィズをなめていると、むかしなつかしい〔ダーダネラ〕がラウンジのバンドで演奏されるといったあんばいだ。

アルハンブラ宮を見物して後、私たちはレンタ・カーでグラナダの飛行場へ行き、バルセロナへもどった。

その翌日、国境を越えてフランスへ帰り、この日は、スペインへ入る前に電話で予約し

ておいた〔シャトー・ドゥ・ラロック〕へ泊った。トゥールーズ市から五十キロほど先の小さな村のホテルで、むかしは、ガスコーニュの豪族の居館だったらしい。このあたりはデュマの〔三銃士〕の主人公・ダルタニヤンの故郷である。古めかしい小さな食堂のデザートに〔銃士の氷菓(ソルベ)〕というのがあったので、

「これにしよう」

どんなものが出るかとおもったら、何のことはない、レモンの氷菓にすぎなかった。

鴨、きのこ入りのオムレツなど、いかにも田舎ふうの料理も、親切なサーヴィスと共に快い味がする。

部屋は広く、むかしのままの調度に飾られていたが、浴室は最新設備がほどこされていい、窓の向うにはガスコーニュの田園風景がひろがっている。いつまでも明るい夕空に、ジェットの航跡雲が尾を引いていた。この近くに、航空機の工場があるらしい。石造りのテラスへ出て、白くて大きな飼犬のグレート・ピレネーズの頭を撫でてやりながら、のんびりと食前のキールをのむ気分は何ともいえない。

翌朝の、焼きたてのパンのうまさも忘れがたかった。

さしてパンが好きでもない私が、四種類のパンをほとんど食べた上、残りをハンカチーフに包んでホテルを出発したほどだった。

この日は、いくつもの町や村を走りぬけ、ペリゴール地方のレ・ゼジーのホテル〔クロ

マニヨン」へ泊った。

このあたりは、ストラスブールとならぶ有名な「フォアグラ」の名産地だ。したがって、料理自慢のホテルが多い。

近くには先史時代の遺跡が多く、旧石器時代のクロマニヨン人の名をホテルにつけたのだろう。

シーズンには観光客も多いらしいが、田園の風趣はいささかも損われず、別館のプール前の椅子に坐って空をながめていると、あまりにも清澄な空と空気に酔って、時間を忘れてしまうほどだった。

私たちのホテルは、駅員の姿もなく、秋の草花が香るレ・ゼジー駅の近くにあったが、一日に二本ほどしか列車が通らない。まるで個人の邸宅のように落ちついた小さなホテルで、衣装戸棚の戸の裏に針と糸とハサミがセットされている。旅行中の衣類の破れをつくろうようにとのホテルの親切なのだ。S・Oの両君が近くのペリグー市を見物に出かけた後も、私はベッドへ寝ころんだり、あたりを散歩したりして、こころゆくまで田舎の匂いを嗅いだ。

フランスの田舎へ来ると、パンもうまいが、卵や野菜、鶏などが、いまの日本、ことに東京では、もはや味わうことができなくなった旨さで、夕飯のときの野菜のサラダを、おかわりしたほどだ。むろん、自家製フォアグラやトリュフが旨いのは当然として、マッ

シュルーム・ソースをかけたステーキも、野苺を生クリームで食べるデザートもよかった。

食事を終え、サロンへ出て来ると、ようやく、あたりは夜の闇に包まれ、三日月が空に浮いている。

翌日は、昼間のうちに、山道を二時間も走って、ラルズー川峡谷の絶壁の中腹に古い城砦と教会が宙釣りになっているようなロカマドゥールへ遊びに出かけた。

峠の茶屋で昼食をしながら、彼方に、この町を遠望する景観は実にすばらしい。

この夜も〔クロマニヨン〕へ泊った。同じホテルへ二泊すると旅の疲れもとれるし、気分もゆったりとしてくる。

夕飯は、トマトのサラダ、鴨のハム、川鱒の香草入り蒸煮、オレンジの皮をきざんでふりかけたアイス・クリームで、いずれも旨い。何から何まで自家製だった。

翌日。

私たちは、いくつもの峠を越え、リヨンに近いロアンヌの町へ入り、駅前の料理旅館〔トロワグロ〕へ泊った。ここの料理は近年、いよいよ有名になって、夕飯の食堂は大入り満員。私が知っているA君は、ここで修業をし、いまは東京で自分の店を出している。

A君の紹介状を出すと、彼の師匠でもある主人のジャン・トロワグロが、

「おまかせ下さい」

と、いい、魚・海老・ウナギなど、つぎつぎに運んでくる。デザートが三皿も出た。フランス人は、六十をこえた老夫婦が、これをきれいに平らげるわけだが、われわれの胃袋は小さすぎる。

ホテルというよりも、ここは料理屋であって、泊る人は少ないが、設備はフランス・モダンのセンスがあふれていて、なかなかよい。

私たちの旅も、終りに近くなった。

つぎの日は、パリに近いところへ泊るつもりだったが、適当なホテルが見つからず、やむなく、オルレアンに近いジァンという町の、ロワール川の岸辺のホテルへ泊った。二ツ星（二流）のホテルで便所は部屋についていないのに、バス・ルームはついている。しずかで、安くて、気持のよいホテルだ。少年の給仕が何人もいて、きびきびとはたらく。フランスの田舎では、十四、五歳の少年少女が、朝から晩まで一所懸命にはたらいているのだった。

ホテル前の川岸の風景がよくて、何枚かクロッキーをする。夕焼けの川岸を老人たちが犬を連れて、のんびりと散歩をしていた。川の中へ入って釣りをしている男たちもいた。

こうして、翌日。

オルレアンを経て、私たちはパリへ入り〔オテル・ド・ラベ〕へ帰って来た。ホテルの人たちも顔なじみになっているし、何だか、自宅へもどったような気分になる。

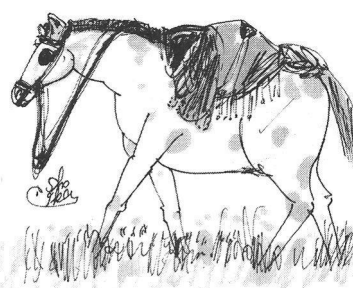
田舎からパリへもどると、あまりにも激しい車輛の渦の中へ巻き込まれ、この美しい都の魅力も充分に味わえぬようなおもいがする。

それほどに、フランスの田舎は私を魅了せずにはおかない。

田舎は田舎のまま、都会のメカニズムを振り向くこともせず、ゆったりと自給自足の明け暮れを送り迎えているのだった。

湯布院

玉の湯



阿蘇のホテルから、雪が降りしきる久住・飯田高原の山中をタクシーで走り抜け、湯布院の旅館〔玉の湯〕へ到着すると、玄関前の排水路と見えたところから湯けむりがあがってい、旅館の飼犬が三匹、ボチャボチャと中へ入って遊んでいるではないか。豊富な温泉が外へあふれ出しているのだ。後でわかったことだが、雪降る畦道を歩いていると、傍の小川へも温泉があふれてきて湯けむりをあげている。玉の湯の、民家造りの大きな食堂のテーブルの下は切り炬燵になってい、これまた温泉で温められているのだった。

冬枯れの木立と池がある広い敷地に、十棟の離れ屋が点在しており、そのほかにもグループ向きの別館がある。

私が入った離れは八畳・六畳の二間で、玄関をふくめ、まるで自分の小さな家にいるような気分にさせられてしまう。旅館ふうの装飾がほとんどないからだろう。それでいて、浴室もトイレも大都市の一流ホテル以上の設備と清潔さがたもたれている。そして、もはやいうまでもなく、満々たる温泉が間断なしに浴槽からあふれている。

それから夕飯を食べたわけだが、膳にあらわれた鶏卵、野菜、山菜などのほとんどが土地の手づくりなのだから、その旨さは格別のものだった。

このようにほめては、いささか気がさすのだが、事実なのだから仕方がない。前章で私は、フランスの田舎のホテルのよさをのべたてたが、日本にも、こんな別天地があった。かねて湯布院のよさを耳にしていたけれども、これほどにいいとはおもわなかった。ところで、私は今度はじめて湯布院へ来たものとばかりおもっていたが、東京へ帰り、昭和三十八年に九州をまわったときの日記を出して見ると、別府から湯布院へ来ているのだ。

「別府駅前からタクシーで湯布院へ向う。雄大なる高原の景観がすばらしい。台上よりのぞむ別府湾の風光また佳し。秋の陽に光る芒の群、その白く光る穂の波、また波」

などと記してある。

それから私は由布院駅から列車で日田へ行き、湯布院へは泊らなかったので、すっかり忘れていたのだ。

夜に入っても雪は熄まず、炬燵へ入って夕飯を食べたのだが、献立は、つぎのごとくである。

一、小鉢（温泉卵、おから、大根なます）
一、地鶏の刺身

一、前菜（地鶏の燻製、絹田巻、梅田巻、鴨南ばん、錦卵、川芹の白和え、カブの三杯酢漬）
一、山女魚の塩焼
一、炊き合せ（油揚、田舎こんにゃく、わらび、里芋、切り干し大根）
一、蓋物（地鶏の紅梅しんじょ）
一、山菜盛合せ（みょうが、しその葉と実、銀杏、菜の花）
一、珍味（雫余子の葛あんかけ）
一、鍋（地鶏、小芹、白菜、ねぎ、ごぼう、わらび、湯布院特産のあぜ蕪）

玉の湯の調理主任は妙心寺派の寺籍をもっていて精進料理を修行したそうだが、飛び切りの材料を生き生きと調理し、この土地の料理自慢の、いわゆる「おばちゃん」たちが、それぞれ得意の物を調理し、主任をたすけているそうな。

温泉の地熱のためか、いまがクレソンのさかりだという。

ともかくも、うまくて、居心地がよくて、久留米絣の夜具の中で、私はぐっすりと眠った。

湯布院町は、豊後富士とよばれる名峰・由布岳の西麓にある。往古から、この町は国府

から豊前への駅所だった。

「三峯、削るがごとく、雲表に尖起す」

と、物の本に記されている由布岳の全貌は雪のために、ゆっくりとは見られなかったが、湯布院の風光と温泉は戦前からよく知られており、私の亡師・長谷川伸も、昭和初期に湯布院を訪れ、こんな歌をよんでいる。

堤の桜も真如の月も、馬が飲みます桶の水

いかにも、牧歌的な情趣があって、私の好きな歌だ。そのころの亡師は二十六文字の詩形を好み、よい歌を残している。

湯布院のすぐ近くには、別府温泉という、九州の熱海ともいうべき大歓楽郷がひかえている。これが期せずして、今日の湯布院に大きな影響をあたえたといってよい。昭和三十年に、由布院と湯ノ平が合併して〔湯布院町〕となったとき、それまでの登山基地としての町から新しい町づくりが始まった。若い町長を中心に、これも若手の旅館経営者があつまって、

「小さな別府になるな」

を、町づくりの合言葉にしたそうな。

歓楽温泉街にしたら、別府にかなうわけがない。それよりも国民保養温泉、住んでみたくなるような温泉町として発展させようというわけだ。

折しも、日本が高度成長に向って歩みはじめかけたときで、数年後には、山奥の温泉地までが薄汚い鉄筋の〔ホテル〕と称するものに変りはじめ、金儲けに狂奔しはじめることになる。

しかし、湯布院は、たとえば町の河川の改修がおこなわれたとき、東京大学・九州芸術工科大学・湯布院町の協力でプロジェクト・チームをつくり、町の環境設計をはじめた。その結果、現在は、町の地区によって、それぞれの個性と趣きを生かした旅館づくりがおこなわれるようになったという。

玉の湯の食堂や喫茶室をふくめた本館も、離れ屋の客室も、民芸調の念の入った建築であるが、単に民芸調をねらっているのではない。食べものから接待の女中さんに至るまで、民芸を生む環境にあるのだから、これほど自然なことはない。少しも嫌味にはならぬ。売店で売っている柚子のジャム、工芸品も同様なのだ。もんぺ姿の女中さんの給与もよく、定着率もよいらしい。近辺の民家の主婦もアルバイトをしているようだが、従業員の研修として、京都の〔俵屋〕〔柊屋〕などの旅館に泊らせ、〔瓢亭〕や〔大市〕などで食事をさせ、サーヴィスの研究をさせているとかで、

「従業員が、誇りを持ってはたらける職場だとおもいます」

と、玉の湯の主人・溝口薫平さんが私にいった。

ほとんど歓楽地帯がなく、美しい自然に囲まれた湯布院へは、諸方から若者たちがやって来るし、この土地が好きになって移住して来る工芸家もいる。

いまのところ不可能だが、できるなら私も湯布院へ移住したくなってきた。夏になると、湯布院では映画祭が催されるし、九州交響楽団が来て〔星空のコンサート〕をやる。高原の温泉町の人びとが、このように、ちからを合わせ、それぞれの職業をふくめて、地方文化の花を咲かせている例を私は知らない。

翌朝も雪だった。

目ざめて入浴し、八畳の炬燵へ入り、茶をのんでいると、ガラス戸の外に、飼猫が三匹もあらわれて遊んでいる。雪の中で、このように猫が地面に寝ころんでいるのは、やはり温泉の熱で土が暖かいのだろう。

枯れ木立の中から寒椿の紅さが目に飛び込んできた。

朝飯は食堂で、味噌汁に、ぜんまい・キャラブキの煮もの、温泉卵、大根漬、梅干などで食べた。

それから外へ出て、雪の畦道を歩いていると、突然、由布岳の山頂が灰色の幕を割ってあらわれた。すかさずカメラを向けたが、二、三枚撮るうちに、またも由布岳は頭を隠し

てしまった。

歩いて寒くなると、玉の湯へもどり、暖かい喫茶室でコーヒーをのんだりする。

大分空港へは日暮れまでに行けばよいので、私にとっては、フランスの田舎めぐりをして以来、半年ぶりの、のんびりした気分だった。

昼すぎになって、雪の中での撮影を終えた同行の二人と食堂の炬燵へ入り、遅い昼飯をたべる。

メニューには、三種の弁当セットや、山芋のトロロ汁、何種類かの山菜、湯豆腐や鴨、地鶏の鍋物のほかは、猪鍋もあるし、鯉鍋もある。

鯉の洗い、馬肉の刺身、揚げ豆腐など、多彩なメニューだったが、私たちは豊後牛の炭火焼で、大分名物の麦焼酎のお湯割りをやることにした。

テーブルに焜炉が出され、その炭火で網の上の厚切りの牛肉を、それぞれの好みに焼く。

豊後牛のヒレは、なかなか旨い。それに、玉の湯のコーヒーと紅茶がよかった。コーヒーの豆は神戸から送られて来るそうだが、何よりも丹念にいれてくれるからだろう。

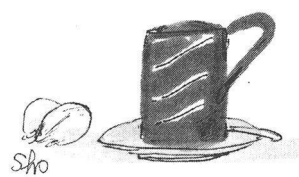
食後の、苺の掻き氷ふうのシャーベットも、しゃれている。

「お天気の日には、駅前から辻馬車が出て、客を案内するそうですね」

と、Kが、このところ目立って肉がついてきた腹を撫でながら、
「桃子を乗せてやりたいな」
と、いった。去年生まれた彼の〔ひとりむすめ〕のことである。
「君は昨夜、ベッドで寝たのだろう。どんなぐあいだった?」
「北欧製のベッドだっていってましたが、低目になっていて、とても寝心地がよかったですよ」
「そろそろ、帰ろうか」
午後四時近くなって、私たちは玉の湯を出た。
タクシーが高原をのぼって行くと、S・Lホテルが見えた。
S・Lの客車を改造して旅客を泊めることが、近ごろはめずらしくなくなってきたけれども、湯布院のS・Lホテルは、あたりの雄大な景観によくとけこんでいて、まるで高原を汽車が走っているように見えた。

倉敷市

倉敷アイビースクエア



倉敷市は、岡山県南部の工業都市で、高梁川の下流の東岸に位置する。水島港の発展と共に、さまざまな企業と工場が密集してきて、その海浜工業地帯としてのスケールは相当なものだ。

岡山駅からタクシーで倉敷へ向うたびに、沿道の風景が変貌し、車輛が激増しつつある。

だが、山陽本線・倉敷駅の東面の一域には、江戸と明治の風致を色濃くとどめており、それに見事な調和を見せた町なみを見ることができる。

このあたりは、むかし、江戸幕府のころ、幕府の陣屋が置かれてあった。

「……代官をして、備前・備中・讃岐三州散在の公料を管治せしむ。駅内に富商多く、三備第一の豊邑と称せり」

と、物の本に記されている。

明治維新後は、その倉敷の富商の一人だった大原孫三郎が倉敷紡績を名実ともに大企業

として発展させたわけだが、彼は同時に社会事業家でもあり、中国から関西に及ぶ財界の大立物であった。

明治十三年、倉敷に生まれ、昭和十八年に病歿した大原孫三郎は、惜しみなく私財を投じ、社会・農業・労働科学などの研究所を創設しているし、西洋絵画のすばらしいコレクションは、いま、倉敷川のほとりの〔大原美術館〕に結実している。

代官所、旧倉敷紡績所、旧町役場などを中心にして、倉敷川の周辺には白壁と瓦屋根と土蔵造りの家々が美しい諧調を見せ、私が、はじめて倉敷を訪れたころは、そうした民家を改造した〔エル・グレコ〕というコーヒー店が一つあったきりだが、いまは観光客が群れ、さまざまな店舗や飲食店が軒をつらねている。

しかし、それでも他の観光名所にはない雰囲気が保たれているのは、町の人びとの良心にもよるのだろうが、風致そのものが、けばけばしい、紛い物の商売を拒否しているからだ。

それも、今度行ってみて、いささか不安になってきた。

あきらかに、この一域にそぐわぬ色彩と形が少しずつ、のさばりはじめてきている。

いまは若い男女たちの旅行が、

「わけもないこと……」

に、なったので、倉敷を訪れる若者たちは季節を問わぬ。

ホテルもできた。

そして、昭和四十六年に、倉敷紡績は、旧紡績所（代官所の跡でもある）の明治のころの建造物を生かしたホテルをつくることに決め、旧工場の保存活用の検討に入った。

何といっても、地元である。

大原孫三郎の遺産を、その後継者が活用するについて、これほどの便宜はなかったろう。

ホテルと命名せず〔スクエア〕としたところに、この事業の意図が、はっきりと看てとれる。

はじめて倉敷を訪れたとき、私は、旧紡績所の遺構を見せてもらったが、今度、久しぶりに倉敷を訪ね、〔アイビースクエア〕へ泊ってみて、その変貌のすばらしさにおどろいた。

赤煉瓦のホテルの壁面が囲む広場の美しさは、まさに倉敷の文化遺産の現代的変容であって、ホテルへ泊らぬ人びとが、だれでも此処へ入って来て、くつろぐことができるのだった。

アイビースクエアの支配人も副支配人も、倉敷紡績の広告・宣伝に従事していたとかで、

「その延長線上の仕事だったのです」

狩野副支配人が、そういった。

大原孫三郎と、その後嗣・總一郎以来の伝統が、せせこましい現代に、こうしたかたちで受け継がれたわけである。

それにしても、むかしの金持は、政治ができぬことを自力で遺すことができた。

いまは、悪事をはたらかぬかぎり金持にはなれないし、また、金持になったところで、その金の使い道をわきまえぬ時代となった。

文化が、おとろえるわけなのだ。

アイビースクエアの表門と塀は、これも赤煉瓦で、ちょっと、中国の城門を想わせる。このような門と塀の中の、ひろい石畳の彼方にホテルの玄関がある。こんなホテルもめずらしいだろう。

客室は、二階までである。これもホテルとしては異例のことだ。

したがって、ホテルの上に、青空がひろびろと展開している。

採算がとれないとおもうのだが、しかし、この土地はオーナーの持ちものなのである。

自分の土地と家で商売をするのと、新たに土地を買ってホテルを建てるのとは、まったくちがう。

しかし、旧紡績所の明治建築の遺構を残して再建しただけに、かえって費用はふくれあ

がってしまったのだそうな。

民芸と近代建築と明治の雰囲気とが、寸分の隙もなく溶け合い、ロビーへ入ったとたんに、安らかなくつろぎが躰をみたしてくれる。

若い男女の客が、オフ・シーズンなのに一杯だった。

それでいて、さわがしくもなく、若さと明るさが、おだやかにホテルの中にあふれている。

清潔で明るく、美しいホテルの造型が、若者たちの心にも何ものかをつたえてくるのだろう。

私たちはコーヒー・ハウスの〔アイビー〕で夕飯をとった。

和食堂もあるが、このコーヒー・ハウスの居心地のよさそうな椅子とテーブルに惹(ひ)かれたのかも知れない。

メニューは豊富で、しかも安い。

同行の二人は、シー・フードのグリルと牛肉の照焼をたのみ、私は炭焼のヒレ・ステーキにした。

この食堂では、ワインなどより、ウイスキーが似合う。

ステーキも、この値段では、とても東京では食べられまい。旨(うま)かった。

最後に私たちは、カレー・ライスを一人前とり、三人で分けて食べ、大いに満足した。

私たちの旅は、いつも、こうなのだ。

四人のときは、カレー・ライスとハヤシ・ライスを一人前ずつとり、別に皿をもらって御飯をのせ、そこへ半分ずつ、カレーとハヤシのソースをかけて食べたりする。

私はTのエビのグリルをつまみ、そのかわりにステーキの二片を分けるといったあんばいだ。

食事が終ってから、白壁と木で造られたバー〔赤煉瓦〕へ行き、少しブランデーをやった。

夜更けて、コーヒー・ハウスの前を通ると、閉店後の掃除をやっていた。

給仕の男女も、調理場の人びとも総動員で懸命に磨きたてていた。

「ぼくの若いころは、こんな、若い者たちのためのホテルなどは一つもなかったよ」

と、私はTにいった。

「子供と大人と、その二つだけ。ことに大人のためのものばかりだった」

「なるほど」

「若者たちだけの旅行なんて、先ず、山登りかハイキング。または海水浴ぐらいなものだったか……」

「海水浴ときましたね」

「いまは、何ていうの？」

「さあ、何ていうんでしょう。ただ、海へ行こうというんじゃないですか」
「だからさ。若くても、一日も早く大人のまねをしたがったし、また、そうしたものだよ」
アイビースクエアの泊り客は、若い人たちが多いのはむろんのことだが、家族連れや、年輩の人びとも少なくない。
このホテルは、この町の人びとの広場（スクエア）になりつつある。
だからこそ、結婚式場や宴席も新設されたのだろう。

翌日は、朝飯をすませてから、先ず、アイビースクエアからも近い鶴形山公園へ行った。いつであったか、春に倉敷を訪れたとき、この公園の桜が盛りだったことをおぼえている。
このあたりは古い倉敷の町なみが、まだ残っているし、アイビースクエアの裏手には倉敷紡績の記念館があって、むかしの記憶が、まざまざとよみがえってきた。
代官所の跡の石井戸もそのままだ。
江戸時代の倉敷は、米や物資の集散地であり、町の蔵からの荷を積んだ舟が倉敷川を下って行ったのだろう。
明治になって紡績工場が創設された当時も、原綿や製品が舟に積まれて川を下った。

そうした過去のいとなみが、倉敷川の温存によって、はっきりとわかる。

川のない町に〔歴史〕はない。

東京がそれだ。川という川を埋めたて、車輛のための犠牲にしてしまったからである。だから、いまの東京は、車輛のための都会になってしまった。

大原美術館、民芸館、郷土玩具館などが、石造りの見事な調和を見せている一角に、コーヒー店〔エル・グレコ〕は健在だった。

蔦に埋もれた二階建の民家を改造した、このコーヒー店はあまりにも有名になってしまったけれど、いまも、むかしのままで、少しも変っていない。

分厚い木製のテーブルとベンチ。温かいコーヒー。親切なもてなし。うるさい音楽も使わず、若い人たちのひかえ目な会話がきこえるのみだ。

はじめて倉敷を訪れたとき、私は、この店へ旅行鞄をあずけて、町を歩き、大原美術館や民芸館を見てまわったものだ。

当時は、たしか、こうした店は〔エル・グレコ〕だけだったような気がする。

いまは、たくさんの店屋が川の両岸にひしめいてい、中には、あまりにも、ここの風景にそぐわぬ、けばけばしい店もできはじめている。

「そろそろ、帰ろうか」

「そうしましょう」

午後になって、アイビースクエアへもどった私たちは、タクシーをよんでもらうことにした。車が走り出したとき、Tがつぶやいた。

「子供が、もう少し大きくなったら、アイビースクエアへ連れて来てやろう」

寄居京亭



三年ほど前に、甲賀の忍びの者を主人公にした新聞連載小説を書いたとき、前半の背景を武州（埼玉県）の鉢形城にしようとおもい、泊りがけで、城址を見に出かけた。その小説の一節を、抜き書きにしてみよう。

埼玉県の北西部にある寄居町は、秩父市の北東に位置している。
奥秩父の山脈を水源とする荒川が、秩父市の長瀞をながれてきて、その川幅が大きくひろがるあたりに寄居町はある。
駅前から南へ通ずる通りの両側は、美しい柳の並木だ。
この通りを十五分も行くと、荒川に架かる正喜橋のたもとへ出る。
ここまで来ると、荒川をへだてた前方右手一帯の断崖の連なりが、いやでも目に入って来る。
この断崖上が、武州・鉢形城の址だ。（中略）

この城の歴史は古い。

平安朝のころには、すでに豪族の居館がいとなまれていたという人もある。

さらに下って、平将門や畠山重忠の居城があったともいう。

鉢形城が、はっきりと歴史の上にあらわれてくるのは、やはり戦国動乱の時代になってからであろう。

そのころ……。山内・上杉氏の重臣・長尾景春が、本格的な築城をおこなった。

永禄三年（一五六〇年）にいたって、小田原の本家・北条氏康の三男・氏邦が鉢形城主となった。（中略）

甲斐の武田氏がほろびてのち、北条氏は旧武田の勢力の下にあった国々へ侵入を開始した。

このような時代に、甲賀の忍びの者が、鉢形城の北条氏邦の家来になりすまし、諜報活動をはじめるわけだ。

私が泊った旅館〔京亭〕は、荒川をへだてて鉢形城址をのぞむ絶好の場所にあった。

客は三組か四組しか泊れないだろう。

もともと、旅館をするために建てたものではない。美しい庭から、真正面に鉢形の断崖をながめつつ、鮎でビールをのんでいると、旅館に泊った気がしない。

まるで、自分の別荘へ来ているような気分になる。

最後に、鮎飯が出た。これは、ちかごろ、めずらしい。むかしは、玉川の岸辺の料亭でよく食べたものだが、私にとって、戦後はじめての鮎飯だった。

鮎を、まるごと、味をつけた飯の上へのせて蒸らし、食べるときは魚肉をほぐし、飯とまぜ合わせて食べる。

鮎の芳香が飯に移って、実に旨い。この鮎飯は江戸時代からあったもので、私も自分の小説に登場させたこともある。

ところで……。

月は朧に東山、霞む夜ごとの篝火に、
夢もいざよう紅ざくら。
忍ぶ思いを振袖に、
祇園恋しや、だらりの帯よ。

この流行歌を、私と同年代の人びとは、よもや忘れていまい。

長田幹彦詞、佐々紅華作曲で藤本二三吉がレコードへ入れた流行歌〔祇園小唄〕である。

この唄が大流行したのは昭和五年ごろで、当時、私の父母は離婚してしまい、小学生だった私は母の実家へ引き取られた。

そのため、月に一度ほど、父がやって来て私を連れ出し、映画や動物園へ行く。

そのとき、私の手を引いて歩きながら、父が、よく唄っていたのが祇園小唄だった。

まさに名曲で、長じて後、はじめて京都を訪れたとき、まさに、この曲そのものの町を見たおもいがした。

フランク永井が唄って復活させた〔君恋し〕も佐々紅華の作曲だし、〔神田小唄〕も〔浪花小唄〕もそうだ。

ことに、西条八十の詞を作曲した〔唐人お吉〕は屈指の名曲といえよう。

旅館京亭は、この音楽家・佐々紅華が妻の故郷の寄居が気に入って、

「ここを、私の永住の地にしよう」

と、いい、自ら設計して建てた邸宅である。

戦争中は、某宮家の邸宅として、半ば強制的に買収されたそうだ。

それを、戦後の昭和二十二年ごろに、

「苦心して、買いもどしました」

と、女あるじがいう。

女あるじは、佐々靱江さんといい、亡き紅華氏の養女にあたる。すなわち、靱江さんの叔母が紅華夫人ということだ。

「買いもどしたのちに、個人で使用するだけでは勿体ないと、亡くなった義父が申しまして、はじめは貸席に、数年後に旅館をはじめましたのです。京亭の名でございますか……それはあの以前に虚羽亭と名づけていまして……羽は、和音階の五音からとったそうですけれど、そのうちに、祇園小唄の因縁もあり、京亭としたのです」

と、靱江さんが語った。

靱江さんは、幼いころから、佐々家の養女にのぞまれていたが、高校三年生になった昭和三十六年に紅華氏が病歿してしまったので、決心をして養女となった。

引きつづいて紅華夫人も亡くなったので、

「心細いともおもいましたけれど……」

そのまま、旅館を引き継いだのである。

京亭の鮎飯は、はじめ、家族だけでこしらえていたのだが、あるとき、なじみの客に出したところ、とてもよろこばれたので、客膳に供するようになったらしい。

鮎や、鯉、鮠、鯰、それに山菜や茸などの食事をたのしむ客も多い。

私は、隠居用に建てられた離れに泊ったが、小さなトイレがついていて、まことに寝心地がよかった。

若い友人たちは大座敷に寝て、翌朝も、
「お目ざめになったとき、いつでも、朝食の仕度をいたします」
と、いってくれて、まことに、のんびりと、昼近くまでいてから、鉢形城址を見に出かけた。
夏には、城址で仕掛ける花火大会が催されるそうな。
桜のころも、きっと、いいにちがいない。
私は、この宿の、落ちついた、美しい風呂場が好きだ。
まるで、自分の家で入浴しているような気分になってしまう。
庭へ出て見ると、釣人たちが荒川へ入って、鮎を釣っている。
風が青葉の香りを運んできて、朝飯のときにのんだビールの酔いにまかせ、縁側に寝そべっていると、時がたつのを忘れてしまった。
それというのも、つまりは、ここが、
「自分の家のような旅館……」
だからなのだろう。
「冬に来て、離れに炬燵を入れてもらって、冬中いて仕事をしたらいいだろうな」
と、私がいったら、映画が大好きな私を知っている友人たちは、
「そしたら、映画の試写会へ行けなくなりますよ」

ほんとうにしなかった。

この日。

私たちは、車で秩父市へ出た。

市内のデパートで、知人の画家・戸井昌造氏の個展を見たり、町の食堂で、ビール、酒、チキン・ライス、カツレツ、ラーメンなど、四人で、めったやたらに飲んだり食べたりして、勘定が六千五百円という安さに、びっくりした。

秩父から飯能のあたりにかけて、私は少年のころ、よく足を運んだものである。

その後、私は京亭を訪れようとおもいながら、まだ果たせないでいる。

けれども、紹介した知人や、「太陽」の編集者たちが取材に出かけたときのはなしを聞いて、三年前と、すこしも変っていないことがわかった。

京亭は、団体客がさわぐ旅館ではない。

家族づれか、親しい友人たちと共に泊って、ゆっくりと語り合える旅館だ。

鉢形城も、一般の人には、あまり知られていない城だが、曲輪の址が、はっきりとわかり、深い濠や、鬱蒼（うっそう）とした木立の中を歩みながら、この城が、豊臣秀吉の大軍に包囲され、ついに落ちたときの挿話を探ってみるのもおもしろい。

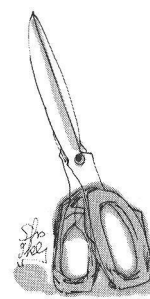
私の小説の主人公にした忍びの者・上田源五郎は、鉢形落城と共に死ぬという構想だったのだが、京亭の離れに泊って寝床へ身を横たえた瞬間に、気分が変り、死なせないこと

にした。

そして主人公は、戦国の世が終りを告げた寛永六年まで、生きつづけることになってしまった。

蒲郡市

蒲郡ホテルと常磐館



まだ新幹線ができる前の東海道線で西へ向うとき、列車が豊橋を過ぎて間もなく、左側の車窓の、小高い丘の松林から緑色の屋根の古風なホテルの背面がのぞまれ、それをながめながら、

（帰りには一日か二日、蒲郡ホテルへ寄って、のんびりしたいな）

そうおもいもし、また、何度か、そのおもいを実行に移した私だった。

そのころの私は、戦後の全盛時の頂点にあった新国劇の脚本と演出を長らくつづけていたので、劇団の公演が、大阪や名古屋でおこなわれるたび、稽古や脚本執筆に東京をはなれることが多かった。

蒲郡ホテルと同じ経営の〔常磐館（ときわ）〕へ五日ほど泊り、脚本の直しをして、毎日のように蒲郡から劇団が公演をしている名古屋の御園座（みその）へ出かけ、夜にまた蒲郡へもどるということもした。

それは昭和三十年から三十三、四年までのことで、いまにしておもうと、世の中はまだ

まだゆったりとしており、若い人たちが生涯の目的をさだめ、それに向って、まっしぐらに進むことができた時代だった。

私が、はじめて〔蒲郡ホテル〕へ泊ったのは太平洋戦争以前のことで、当時の私は兜町の株式仲買店につとめてい、私の店ではない他の店の外交員をしていた三井さんという老人に、

「正ちゃん。いいところへ連れて行ってあげましょう」

と、さそわれたのである。

老人には、自分のむすめのような若い後妻があったが、この細君は連れて行かなかった。

私はこのとき、生まれてはじめて箱根の先の東海道の景観に接したのだった。

深い松の木立におおわれた丘の上の、瓦屋根・三層建築のホテルは、日本ふうの外観と、中国の殿舎のような風格があって、丘の道を自動車でのぼって行くとき、これもはじめて洋式のホテルへ泊る少年の私は、胸がときめいたものだった。

「君も、ホテルに泊ることも、おぼえておかなくてはね」

と、三井さんはいった。

当時の大人、老人たちは何かにつけて、身のまわりの親しい若者たちを、このように面倒を見てくれたものだ。

その夜の食堂で、私はビーフ・カツレツを食べた。

ひろびろとした窓の向うは三河湾で、その海面に小さな島が浮かび、こちらの岸辺から長い橋が架けられている。

「あれは竹島といってね、弁天さまを祀ってある。明日、行ってみましょうかね。裏手の岩の間の細道を歩くのもいいものだ。ところで正ちゃん。ホテルは少々、堅苦しいかね？」

「そんなことありませんよ、三井さん。とても、おもしろいです」

「それなら、よかった。このホテルはね、どこかの繊維問屋が儲けることなんか考えないで経営しているらしい。だから、どこか、のんびりしているだろう。そこが私は好きなんだ。部屋数も少ないし、したがって静かだし……」

「ええ」

ホテルの前庭は紅白の躑躅が満開だった。

翌日は、丘の下の常磐館へ泊った。同じ経営だから、ホテルの前庭からの渡り廊下づたいに、これは純日本旅館の常磐館へ入ることができる。

私より少し年下のボーイが、三井さんと私の旅行鞄を提げて先へ立ち、渡り廊下を下って行った。

ところで……。

戦前の蒲郡ホテルと常磐館は、このときだけで、それから十数年後の昭和三十年の夏

に、私は、このなつかしいホテルへ泊り、その後は何回となく利用した。

劇作から小説へ転じてからも、三河・尾張・遠江の東海地方は、織田信長・徳川家康・豊臣秀吉などを中心に、戦国のドラマが多彩に展開したところであったから、どうしても、くわしく見ておかなくてはならぬ。

そこでまた、蒲郡ホテルへ泊ることにもなったわけだ。

私にとっては、そのときどきの仕事との関連によって忘れがたい、このホテルと旅館が今年に入って急に営業を終えることになり、蒲郡市へ土地ぐるみ売り払われると聞いた。金谷・奈良・万平など、日本の洋式ホテルの先達につぐ古風で床しくて、当時の余裕をしのばせる美しい建築を、せめて写真に残しておきたいとおもい、私たちは東京を発った。

そして先ず、常磐館へ旅装を解いた。

営業をやめると聞いた常客などが、つぎつぎに宿泊の申し込みをして来て、皮肉なことに、ホテルも旅館も予約を断わるのに大童だった。

「ぼくは、ここの、丘の中腹の離れに一度泊ってみたいとおもっていたのだが、ついに果たせなかった」

私は、窓の向うに見える竹島へ目を移しながら、そういった。

同行の人たちも、はじめて此処へ来て、そのよろしさにおどろいている。何しろ、海辺の丘の上と下にホテルと旅館があり、工場だの鉄道だの、町なみだのは、みんな丘の背中

になっている。見えるのは、竹島と青い海のみなのだ。

常磐館は大正二年の創業で、当時は電灯もなく、ランプだったそうな。ホテルのほうは昭和九年の創業だと聞いて、なるほど、はじめて私が泊ったときの蒲郡ホテルには新築の匂いが濃厚にただよっていたことを、いま、おもい出した。

そのころのメイドさんが、いまもホテルにつとめているそうだ。

鯛を中心にした夕飯を終えて、私は大好きなこの宿の浴室へ、もう一度入ることにした。

翌朝は、雨が降りけむっていた。

海岸へ出て見ると、いつの間にか遊園地ができていて、景観が一変してしまっている。

この、蒲郡という、むかしのままの姿を残していたリゾートには似つかわしくない遊園地だが、常磐館とホテルの窓からは、この景観が見えない。

沖には、タンカーが停泊している。

いつの間にか、この小ぢんまりとした、しずかなリゾートを取り巻く環境も変っていたのだ。

そういえば、ホテルの客が減ったのは、新幹線が走るようになってからで、それまでは、東京・名古屋などからの新婚旅行が多かった。

いつだったか、食堂の客で一人きりなのは私だけで、あとは、どの食卓も華やかな新婚のカップルで埋まっていたこともあった。

だが、ホテルも常磐館も、さびれてしまって営業不能となったのではないらしい。オーナーの繊維会社がオイル・ショック以来、営業不振となり、銀行の管理下に置かれたのが原因なのだろう。

ホテルの、茶室めいた休息所のついた廊下を、何度も自分が泊った部屋へ行ってみると、冷暖房の設備も備品も新しく替えられたばかりのようだった。

蒲郡市では、買い取ったホテルをそのまま残し、博物館か美術館のようなものにして、この丘を公園にするつもりだとかで、連日のように会議がおこなわれているという。

蒲郡ホテルが大好きだった三井老人が生きていたら、なんというだろう。

「世の中が、こう切羽つまってきては、仕方もないねえ」

と、哀しげに笑うかも知れない。

何事につけ、

「切羽つまる……」

というのが、三井老人の口ぐせだった。

老人は、私が海軍にとられている間に、深川の家を空襲で焼かれ、亡くなってしまったのだが、そのとき、生きのびたとしてもむろん、昭和五十五年の今日までは健全でいられ

るわけもない。

三井さんが、いま、生きていたなら百歳に近いだろう。

三井老人は、小さな現物専門の外交さんだったが、小金をもっていて、若い細君と共に悠々と暮していたものだった。

「正ちゃん。切羽つまった生き方をしてはいけませんよ。たとえ気分だけでも余裕の皮を一枚、残しておかなくてはいけない。ことに男は、ね」

この言葉を、三井さんに何度、聞かされたか知れない。

また、そうした三井さんの言葉が生き生きと命をもっていた時代だったのである。

昼すぎになり、撮影を終えた同行の人たちがロビイへあつまって来た。

私たちは二階の食堂へ入った。

ホテル売却のはなしが急に決まっただけに、食堂ではたらく人たちの顔色も、こころなしか沈んで見えた。

ウイスキー・ソーダをのんでいる私に、Tがメニューを出して、

「何にします?」

「そうだねえ……」

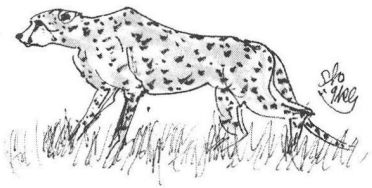
メニューの中の一つが私の目に飛び込んできて、

「ビーフ・カツレツ」

私は、ためらうことなく、そういった。

山中温泉

よしのや依緑園



亡師・長谷川伸が元気であったころ、私に、

「東京生まれの君が信州を好むように、以前のぼくは、どうしてか北陸が好きだったのだね。ことに若いころ……といっても三十を過ぎてから、はたらく間に暇を見つけて、何処かへ旅をするとなると、どうしても北陸へ足が向いてしまうのさ。いまは、もう、そんなことはないがね。七十を越えると、つい目と鼻の先の、生まれ故郷の横浜へ行くのも億劫になってしまう」

と、いわれたことがある。

長谷川師は、小説家であると同時に、〔一本刀土俵入り〕や〔瞼の母〕、〔沓掛時次郎〕、〔暗闇の丑松〕などの代表作をもつ劇作家であったのは周知のことだ。

長谷川師の戯曲における処女作に〔旅の者心中〕という二幕三場の小品があって、舞台の背景は北陸の山中温泉と、その付近になっている。

内容は、江戸のころの男と女の、ぬきさしならぬ恋情の底に、男の嫉妬と女の見栄が鋭

く描かれたもので、脚本の技法は後年の熟達におよばぬとしても、いま読み返して見て、その人間描写の深刻さは、さすがだとおもわせられる。

この処女作には、先生も、思い出が深いものらしい。

「ちょうど、そのころは、君も知ってのように、都新聞（現東京新聞の前身）の記者をしていたわけなんだが、それまでに、子供のころから、種々雑多な職業を転々としながら、あれになってみようか、これを男一生の仕事にしようかと、おもい迷い、決心をしてはやめ、やめては新たに決心をするというわけで……まあ、そのうちに、何とか作家としてやって行きたいというところへ決心がついた」

しかし、まだ、書いた作品が世にみとめられたというわけではないので、おそらく、亡師も苦悶の時代だったのであろう。

そうした時期の作家は、あくまでも自分との闘いを持続して行かねばならぬ。

私なども、そうした時期の自分の写真を、いま見ると、われながら恐ろしい顔をしている。

B社のTさんという編集者が、

「あのころは、躰中にたまった不満を押さえきれないような顔をしておいでした」

と、よくいうのだが、その不満とは他ならぬ自分自身へ向けられたものなのである。

当時の長谷川師は四十前後だったろう。大正十五年（昭和元年）に初めて書いた脚本

が、舞台にのせられたのは五年後の昭和五年一月の新宿歌舞伎座で、主演は故市村亀蔵だった。

「『旅の者心中』の材料はね、山中温泉の、よしのやという宿へ泊ったとき、湯女の竹尾という女から聞いた実事談なのだよ」

と、師は私にも語ったし、御自分でも戯曲集の序文に書いておられる。

北陸の温泉の中で、私がよく行ったのは山代と芦原で、粟津や片山津へも二、三度行ったが、山中温泉だけは一度、車で行って、町と町を囲む景観をながめ、町の食堂へ立ち寄ったのみだった。

亡師が、湯女の竹尾から、はなしを聞いたという、よしのやへ、

（ぜひ一度、泊ってみたい……）

という宿願を、このたび、ようやく果たすことができた。

むろん、いまの北陸の温泉町には、湯女の姿も情趣も消え果てていて、よしのやも〔依緑園〕と称し、能舞台まで設けた鉄筋コンクリート七階の新館をふくむ大旅館に変貌している。

山中温泉は、千二百何十年も前に、百済系の帰化人で奈良時代の高僧だった行基が、発見したと伝えられている。

後年、鎌倉時代の初期に、能登の国の領主・長谷部信連が、この地へ鷹狩りに来て、白鷺が芦の原の流れに傷ついた脚を洗うのを見て、温泉が湧き出ていることを知り、家来のうちの二十余人を配し、温泉宿を開いたという。

いまの〔よしのや依緑園〕に隣接して、長谷部神社に信連が祀られているのは、温泉中興の祖として山中の人びとが敬まってきたからなのだろう。

よしのやは、爾来七百年もつづいている家柄だそうな。

昭和六年、山中温泉が大火に見舞われるまで、よしのやは、町の中程の総湯（共同湯）の近くにあった。

当時の古い写真には、いかにも明治という時代が感じられるし、長谷川師が泊ったのも、このよしのやだったにちがいない。

私たちが、今度、一夜をすごした別館（別荘とも御殿ともよばれている）は、明治中期に、当主が暇にあかせ、檜材をふんだんに使って普請したものだ。

小高い高処に沿って上る廊下の奥には今上陛下も御泊りになられたそうな。

新築のころは、実に、すばらしかったろうが、

「いまは、特に御希望のお客様以外には使っておりません。何分、古いもので、サーヴィスが行きとどかなかったり、御趣味でなかったりした場合、却っていけませんので」

と、いうことだった。

私たちは、天皇が泊られた座敷で、庭をながめつつ、夕飯をとった。献立を、ざっと記しておこう。中でも、

「このあたりの、お惣菜ですが……」

そういって出された、沢庵を塩出しして煮たものや、味濃く煮た筍は、同行の人たちを、大いによろこばせた。

一、土筆の胡麻和え、海老芋、鮭のウド巻、山牛蒡の山椒煮。
一、鯛、甘海老、イカの造り。
一、煮物として、ヨモギそばに奉書巻海老。
一、岩魚の姿焼。
一、合鴨の地酒煮込、鱒の親子糀漬。
一、鮎の揚げもの。

その他いろいろが夕飯で、朝飯には湯豆腐、温泉玉子、洗いネギと柚子をあしらったトロロ汁などが出た。

別館と道をへだてた向うに、大火後に建てられた本館と、昭和四十三年に増築された新館がある。

本館は、もう五十年もたっているわけだが、さすがに昭和初期の大建築で、四人の専属大工が絶えず手を入れており、大聖寺川にのぞむ三間つづきの客室などは、たっぷりと余裕がある。

女中さんは三十人ほどで、一人が二組の客を受けもつかたちになる。

北陸の温泉の女中さんたちの親切さは、むかしからよく知られている。いまも、むかしのようにはまいらぬにせよ、その伝統を旅館がくずすまいとしている。よしのやでも、アルバイトを一切使わぬ。

私たちの面倒を見てくれたのは、かず江さんという中年の女中さんだが、翌日、ロビイのとなりのコーヒー・ルームにいる私たちへ、何くれとなく、こころを配ってくれた。

明治のころは、北陸線の大聖寺駅から鉄道馬車が山中温泉へ通っていて、よしのやの先代当主が、社長だったそうである。

午後になって、外へ出てみた。

薄く曇っている空も、北陸らしい。

北陸の温泉の中では、山中温泉が、もっとも風致にめぐまれているだろう。

谷にゃ水音、峰には嵐
間の山中、湯の匂い

と、山中節にうたわれている。

薬師山、水無山、東山などの山々が眉にせまるかたちで、大聖寺川の碧潭が曲りくねって、よしのやの東側を流れている。いかにも底が深そうだ。このあたりの大聖寺川の上流は、黒谷川とも鶴仙渓ともよばれている。

よしのやを出て南へ行くと、間もなく、有名な蟋蟀橋のたもとへ出た。

小さな橋ではあるが、若葉に埋もれつくした山肌へ吸い込まれるように懸けられていて、眼下には渓流が泡をたてている。

秋の月夜に、この橋へさしかかると、鳴きこめる虫の声に身も心も、

「抱きすくめられてしまうような……」

おもいがすると、私に語った人がいる。

橋の名にも、そうしたおもいがこめられているのだろう。

亡師の戯曲〔旅の者心中〕の大詰は、この蟋蟀橋だ。

そのト書に、

——山中の奇勝、蟋蟀橋。橋の下は流れ。巨大な巌が突き出て見える。橋際より巌へ、目立たねども行き通いの小径がある。

月が青いよりも、寧ろ白く照っている。遠く、湯ざや節の絃歌が時々聞こえる——。

と、ある。

ここで、女が年下の男へ無理心中を仕掛け、男に殺されてしまうのだ。

亡師も、この橋上へ佇んで、舞台の情景を脳裡に想い浮かべたのだろう。

私は、痛風が出た右脚を引きずりながら、ステッキをついて、橋の上に立った。

五十七歳になった、私のこんな姿を亡師が見たら、

「君も、ずいぶん、年をとったものだねえ」

そういわれるにちがいない。

「降ってきましたよ」

と、声がした。

振り向くと、同行のTが近寄って来て、

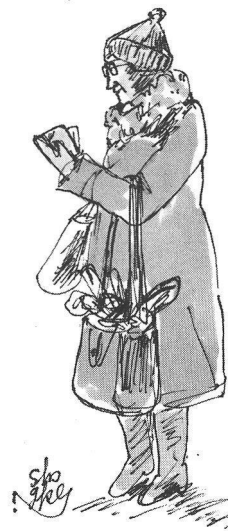
「そろそろ、引き返しましょうか」

「そうだね」

雨が叩いてくる道を、私たちはよしのやへもどった。

箱根

富士屋ホテル



十五、六歳のころ、同年の友だちと二人きりで箱根の明神ガ岳へ登り、遭難しかけたことがあった。

二人とも、当時は山登りが好きで、諸方の山々をまわり歩いていたものだから、明神ガ岳をバカにしていたところがあった。

土曜日の仕事は半日だったので、午後から出かけ、ほとんど食べ物も持っていなかった。

日が暮れるまでに、箱根の姥子の温泉に浸るつもりで、気軽に出かけて頂上をきわめたのはよいが、さて下山となったとき、霧が巻いて来て道に迷ってしまった。

道もないような山中をうろうろしながら、眠くなってくる私を抱くようにして、

「おい、眠っちゃいけないよ。眠るなよ」

必死に叫ぶ友人の声を、いまも忘れない。

この友人がいなかったら、私は遭難していたかも知れない。

友人は友人で、先に私が参ってしまったので、

「何としても助けなくては……」

と、おもったそうである。

夜更けて、ようやくに箱根の裏街道へ出て、姥子へたどりつき、あの大きな岩風呂に満々とたたえられた温泉の中へ躰を沈めたときの気持は、何ともいえぬものだった。

二人とも却って食欲を失ってしまい、膳の上の物を半分も食べられなかった。

その翌日。私が「富士屋ホテルで昼飯を食べよう」と、いい出したら、友人が「あそこはうるさい。山登りの恰好では中へ入れてくれないよ」と、いった。

この友人は、私たちがはたらいていた店の若主人のお供をして、〔富士屋ホテル〕へ泊ったことがあったのだ。

「グリルがあるだろう。そこなら大丈夫だ」

「いや、うるさい。よそうよ」

それから三年後に、強羅へ泊ったとき、富士屋ホテルの食堂へ夕飯を食べに行ったのだった。

そのとき食べた、ホテル自慢の〔虹鱒の富士屋風〕は、いまも富士屋ホテルのメニューにある。

当時のホテルの食堂の典雅な雰囲気には、びっくりした。そのころ、私は何度かホテル

に泊っていたが、趣きが全くちがっていた。

私たちの目には、見たこともない皇居の大食堂のようにおもえた。昭和初期の日本風洋館の極美をつくしたもので、格天井の一つ一つに、日本アルプスの高山植物と野鳥が描かれてい、窓外の、したたるような新緑と山気をたのしむ外人客で一杯だった。

その、何ともいえぬ融合が富士屋ホテルの特色である。

当時の富士屋ホテルは、増築を重ねて繁栄の絶頂期を迎えようとしていた。

今度、私たちが泊った五階建、四十三室の〔花御殿〕の大きな棟も、そのころの建築だが、この一室へ泊ったのは今度がはじめてだ。

いまから十五年ほど前に泊ったときは、戦後に建てられた新館だった。

花御殿の大きな客室へ泊ってみると、昭和初期の最高の贅沢というものが、どんなものか、よくわかるだろう。新しい現代のホテルを知っている若い人たちの目には、それがどのように映るだろうか。興味ふかいことである。

夕暮れとなって、長い廊下を何度も曲ったり、上ったり下ったりして、私たちは食堂へ入った。

依然、この食堂の風格は失われていない。

虹鱒や、牛ヒレ肉の煮込みや、レタスのサラダの味も、むかしと変らぬ。料理長は、このホテルへ入って三十五年にもなるそうだ。

富士屋ホテルは明治十一年の創業というから、日光の金谷ホテルの創業よりも古い。おそらく、日本で最初の洋式ホテルではないだろうか。

富士屋ホテルの創立者で、初代の山口仙之助は、明治という時代でなければ生まれなかった人物だろう。若いころには、日本最初の欧米使節一行と共にアメリカへわたり、辛酸をなめつくした上、七頭の種牛を買って帰国した。牧畜業をはじめるつもりだったのだが、どうも、うまくゆかない。そこで牛を売りはらい、慶応義塾へ入学したというのである。

現代の青年たちが味わうこともできぬ青春だといえよう。

そして慶応で、福沢諭吉に国際観光の重要さを説かれ、ホテル創業を決意し、箱根宮ノ下に五百年の歴史をもつ藤屋旅館を買収し、洋館に改築した。

これが、富士屋ホテルだ。

おもしろいのは、間もなく日光に開業した金谷ホテルの創立者・金谷善一郎の次男正造が、山口仙之助の養子となったことだろう。

この山口正造が専務取締役として、大きな実績を残すことになる。

現在の富士屋ホテルは、山口家の手をはなれてしまった。

これから先、富士屋ホテルが、どのような変貌を見せるか、それはわからぬが、私は、

ともかくも、よき時代の世界的なホテルの姿を、この連載読物にとどめておきたかったのだ。

むかしは、東洋一のリゾート・ホテルとして世界各国に知られ、外国の大金持が夏の間を一ヵ月も滞在した。一泊二食で三十円だったそうな。当時の日本旅館の最高が十円か十五円だったろう。

現在の富士屋ホテルは、他の、どこのホテルとも変りはない。気やすく泊れるし、宿泊料も、むしろ安いほどだとおもう。外人客も全体の二十五パーセントから二十パーセントになっている。比率は逆転している。

近年は、外人観光客のコースの中に箱根や日光がふくまれていないことが多くなったそうな。

滞在日数を減らして物価高の時代の観光をするためには、どうしてもそうなる。

翌朝の食堂へ出ると、金谷ホテル同様、ここにもなつかしい薄焼のパン・ケーキがある。ベーコンとシロップで、このパン・ケーキをやる朝飯は、ほんとうにたのしい。

「箱根へは、ずいぶん来られたのでしょう?」

と、同行のTがいった。

外は霧のような雨がけむっている。

「数え切れない」
「小説の舞台にもつかわれましたか？」
「ええ。何度もつかった」
しかし、富士屋ホテルのある宮ノ下は一度もつかったことがない。
最近では、〔仕掛人・藤枝梅安〕の一篇と、〔剣客商売〕の中の〔箱根細工〕という一篇で湯本とは隣り合せの塔の沢の温泉をつかった。
いろいろと、江戸時代の考証をして描写してみたが、〔箱根細工〕の一節を記してみようか……。

……湯本にたちならぶ湯宿の軒先をすぎ、歩みをすすめるうち、いつの間にか右側の塔の峰、左側の湯坂山の山肌が道にせまって、ひんやりとした山気が大治郎の汗をたちまちに吹きはらった。
早川の瀬音がにわかに高まり、谷間の道をたどる大治郎の顔も手も、鬱蒼たる樹林の青葉に染まってしまったかのようにおもわれる。
曲りくねった早川の流れにかかる細長い橋には欄干もない。いかにも山間の湯場の雰囲気がただよっていて、
（これはよい。二晩ほど泊って、横川先生のおはなしを、ゆっくりとうかがってもよ

いな）

大治郎は、こころたのしくなってきた。

箱根の温泉は、奈良時代の万葉集の歌にも詠まれているほどに、古くから知られているが、塔の沢の湯は江戸時代の初期に発見されたもので、そのころ、かの黄門・水戸光圀が明国から日本へ帰化した儒学者・朱舜水をともない、塔の沢に遊んだ……。

（中略）

湯宿の〔田村屋〕方は、湯の町の左側の奥にあった。わら屋根の湯宿や民家が道の両岸にたちならび、浴客が道に縁台を出して将棋などをやっている。

山駕籠に乗って湯本の方へ向う人びとは、小田原へ帰るのであろう。

と、ある。

近年の箱根は、まことに交通が至便となった。

もう二十年も前のことだが、大阪で、新喜劇の渋谷天外と夕飯を共にしたとき、

「観光地として、箱根ほど便利で、いろいろな設備がととのっているところはありませんなあ」

と、天外さんがいったことをおぼえている。

十何年か前に〔戦国幻想曲〕という小説を週刊誌に連載していて、主人公の渡辺勘兵衛

が武勇をあらわす箱根の山中城攻めのシーンを書くため、箱根へ出かけて行ったが、すべてがスムーズにすすんだために箱根へ泊る必要がなくなり、その日のうちに帰京したことがあった。

今度も、富士屋ホテルを出て、小田原の新幹線へスムーズに乗り継ぐことができた。そうすると、ホテルから東京まで、わずか一時間半であった。

箱根は、観光客の姿も絶えた十二月がよい。

その静寂さは、シーズンのときの箱根とは、まったく別の姿になってしまう。

そうした冬の、霧の深い夜には、箱根の山路に自殺した女の幽霊が出ると、むかし、タクシーの運転手から聞いた。

突然、行手の霧の中に女が現われるので、あわててハンドルを切って、崖から転落してしまうのだという。

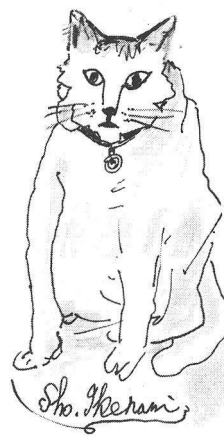
そんな幽霊のはなしを、劇作家の北条秀司氏が戦後間もなく、ラジオドラマに書いた。

タイトルは、たしか〔霧の深い晩〕というのではなかったろうか。

いまの箱根は、夜更けても車輛の響(とよ)みが絶えず、幽霊もびっくりして現われぬらしい。

伊東市

龍石



太平洋戦争前にも、伊豆の諸温泉を何度もまわったが、伊東温泉だけは縁がなかった。いや、ただ一度、少年のころに、〔蒲郡ホテル〕の章で紹介した三井老人が、下田へ連れて行ってくれた帰りに、伊東の近くの川奈ホテルへ泊めてくれたことがあった。

そのとき、若き日の歌手・藤山一郎が美しい女性と共に泊っているのを見た記憶がある。

その女性は奥さんで、たぶん、新婚間もないときのことだったのだろう。

私が、しばしば伊東へ出かけるようになったのは、そこに〔西東荘〕という小さな旅館があったからだ。

西東荘は、私の親しい友人で、ベテラン・シナリオライターの井手雅人の常宿だった。

当時、映画のシナリオを書く人たちは、かならずといってよいほど、気に入りの旅館へこもり、執筆していたものだ。

私も、そのころは新国劇の脚本を書いていたので、旅先での仕事、または湯河原の常宿

へこもって執筆することが多かった。

そういうわけで、

「一度来ないか……」

と、井手雅人にさそわれ、私は湯河原から伊東へ行き、西東荘へはじめて泊った。

西東荘の主人は、斎藤さんといって画家であり、宿屋のほうは奥さんが一手に切りまわしていた。

客室が五つか六つの、ほんとうに家庭的な宿屋で、ひろい芝生の向うには海が見えたし、むろん、温泉もついている。

伊東は温泉の豊富なところで、いまは知らないが、温泉シャワーの設備がある小学校も、たしかあったはずだ。

だから温泉を治療につかっている国立療養所もあるし、ともかくも市民は温泉をたのしみ、個人で温泉を家に引いてあるのもめずらしくはない。

だから、旅館となる前の斎藤家にも、温泉が引いてあったのだろう。

井手と私だけが泊っているときなど、奥さんと娘さんの二人きりで、いろいろと世話をしてくれた。

この娘さんは当時、十七、八だったろうか、いまは結婚して子供さんも大きくなっているが、その名を三冬（みふゆ）という。

（いい名前だから、いつか、時代劇に出て来る武家の娘の名前につかいたい）

そうおもってノートに記しておいた。

いまも連載中の〔剣客商売〕に出て来る老中・田沼意次の血を受けた娘の名前を〔三冬〕とつけたのは、その記憶があったからだ。

三冬は、はじめ女武芸者だったのが、のちに剣客・秋山大治郎の妻となり、いまも時折、腕におぼえの剣を揮うこともある。

私の小説に出て来る人物の名前を、自分の子供につけてしまった愛読者が、何人かいる。

古今亭志ん朝は、私の〔鬼平犯科帳〕が、はじめてテレビになり、松本幸四郎が長谷川平蔵を演じたとき、同心・木村忠吾に扮して好評を博したが、折しも長男が生まれたので即座に〔忠吾〕と命名してしまった。

それからしばらくして、帝劇で、私自身が脚色・演出をした〔剣客商売〕で加藤剛が秋山大治郎を演じたとき、男子出生となり、これまた〔大治郎〕と命名した。

そのほか、いろいろとあって〔三冬〕の名を女子につけた読者も何人かいる。

西東荘では、私たちの好みの魚までおぼえていてくれ、新鮮な家庭料理をたのしませてくれた。

井手雅人は、一年のうちの半分を、この宿で過ごしたこともある。

今度、久しぶりで伊東へ出かけ、なつかしい西東荘の前へ行って見ると、見おぼえのある石垣を残したのみで、個人の住宅に変っていた。主人夫婦が老齢に達したので廃業をしたことは、すでに知っていたが、物見ヶ丘とよばれていたこのあたりは、すっかり住宅地と化してしまった。

この日。

私たちが泊ったのは、伊東のはずれの、川奈にも近い山中の宿だった。

〔龍石〕という、その旅館が、あまり宣伝もせず、しかも豪壮のおもむきがあり、

「なかなか、おもしろい」

ということを、私は、かねて耳にはさんでいた。

山道をのぼりつめたところに、この旅館は忽然とあらわれる。

武家の長屋門風の堂々たる門構えで、中へ入ると大きな池をめぐる深い木立が霧雨にけむっている。

旅館の内部は、太い筆で、ぐいぐいと描いた絵のような設計で、いささかも小細工がほどこされていない。

三十余の客室は、ほとんど同じ二間つづきの造りなのだ。部屋についている洗面所・便所と、その備品や、寝具・浴衣など、全く申し分がない。心にくいほどに神経がゆきわ

たってい、清潔をきわめていた。

それでいて、この高級旅館には浴室つきの客室が一つもないのである。

つまり、新婚や女連れの客への迎合をしていないわけだ。

これは一見識というべきだろう。

そのかわり、さまざまな石を組み立てた大浴場には温泉が昼夜を問わずあふれているし、脱衣場には大小のタオルが山のように積み置かれ、惜しげもなく、

「タオルをおつかい下さい」

と、浴場に詰めている親切な番頭さんがすすめてくれる。

この〔番頭さん〕は、客の背中もながしてくれる。

別棟の広間には団体客も入っていたが、その声もさわぎも、ほとんどきこえない。これは建築の底が深いからだろう。

女中さんが夕飯のときに、いくつもの酒の銘柄をしるしたものを出し、

「どれにいたしましょう?」

と、尋いた。

およそ十種類の銘柄がある。私たちは土佐の酒をえらんだ。

夕飯の献立は、つぎのごとし。

箸付　百合根の梅肉和え。
椀　活ハモと巻湯葉、その他。
生物　活鮃のチリ造り。
口替　塩蒸しのアワビ。海老の木ノ芽鮨。夏鴨の鍬焼。紅鮭とキャビア。源氏柚子。
　青梅の甘露煮。
焼物　甘鯛の柚香焼。
煮物　冬瓜の海老そぼろ。
酢の物　蟹の絹田巻。
油物　海老のふくさ揚げ。
汁椀　焼茄子。黒豆。溶き辛子。
香の物　胡瓜。茄子。沢庵。塩昆布。

その他、オクラの吸いとろや鯛めんなども出て、私には食べきれなかった。材料は新鮮そのものだ。

ついでに、翌日の朝食も記しておこう。

先ず、鮪の細造りが独活や岩茸と共に出て、ワサビとゴマ醤油で食べる。

こうなると、どうしても朝からのみたくなってしまうのは、ぜひもなかろう。

鰤の塩焼、蓮の甘煮、もみ海苔や三ツ葉の浸し。

それから蟹の雑炊が出たけれども、私は同行のTとWにまかせ、鮪の角煮と旨い香の物で白飯を食べた。味噌汁はワカメと豆腐だった。

龍石のオーナーは北村正則といって、戦後は海運業で成功をおさめた人だそうな。そのころから、伊東に土地をもっており、小さな旅館やゴルフ・カントリークラブ、ロッジなどを経営していたらしい。

そのロッジを拡大したものが、いまの龍石だ。

海運業から身を引いたのち、本格的に旅館業へ取り組んだのだろう。

龍石の近くには同じオーナーの〔ホテル・サザンクロス〕があって、ここにはゴルフをたのしみに来る客が多い。

龍石は五年前にオープンし、去年から今年にかけて、ようやく黒字に転じた。

オーナーの資力と見識があればこそだといえよう。

大旅館でありながら、いかにも個性的であって、七千坪におよぶ大庭園と数寄屋造りの建築。それに二部屋に女中一人というサーヴィスの完璧さを誇り、常客がつくのを、じっくりと辛抱して待っていた。

七千坪の庭に八百坪の池があり、竹林、梅林、雑木林とあるのだから、四季の景観と、

それにともなう自然の趣きが多彩なのは当然だ。

夏になると蛍が飛ぶそうである。

その季節に来て、蛍を一匹つかまえ、灯を消した部屋の中へ放してみたい。

オーナーは、この近くに住んでいて、常勤の〔社長〕なのだから、いつも目を光らせている。

従業員は、少しも油断ができない。

そのかわり、

「女中の待遇は、よいとおもいます。ともかくも、女中は接客業の尖兵ですから、シツケはきびしくしておりますけれども、時間を厭わず、お客様に仕えさせていただいております」

と、支配人は語った。

「御入浴のとき、タオルをふんだんに使っていただきますのは、ゴルフ好きの社長の発想なのです」

と聞いて、なるほどとおもった。

そういわれてみると、寝具や浴衣にはらわれている配慮も同じことなのだろう。

一夜をすごし、臥床の中でクシャクシャになった浴衣のかわり、洗いたての清潔な浴衣が用意されている。この点、京都の俵屋と同様の神経がはたらいている。

井手雅人や私が愛した西東荘は、この龍石とくらぶべくもない小さな宿だったが、つまるところ、客をもてなす神経のくばり方は大小にかかわらず、客をよろこばせ、納得させるのだ。

翌朝。

庭と池には霧がたちこめていた。

これをながめながら、運ばれて来たコーヒーをのんだときの、のんびりとした気分は忘れがたい。

それほどに、すばらしい庭だった。

フランスの宿



今年のフランス行は、去年よりも滞在日数は短かったけれど、一日一日の行程をゆったりと組んで出かけた。

去年に泊ったパリの宿〔オテル・ド・ラベ〕は私が申し込んだ日に満室だというので、今度は十六区のパッシーにある〔オテル・マスネ〕へ申し込んだら、うまく部屋がとれた。

同行は、去年も一緒だったS君と、カメラ（兼ドライバー）のY君である。

〔オテル・マスネ〕は百年も前に建てられた大きな建築で、この中がいくつもに区切られているらしい。ホテルだけの建物ではない。フロントも親切で、部屋も白とクリーム色を基調にした清潔な広い客室で、四年前に泊ったリヨンのGホテルをおもい出した。浴室も広く、余分な装飾はほとんどない。

感じがよかったのは、泊った翌朝、ベッドの枕の下へ二フラン入れておいて、その夜、帰ってみると、一フランだけチップを取り、一フランをナイト・テーブルの上へ置いて

あったことだ。経営者が、そのようにしつけているのだろうか。いかにも若い女性がよろこびそうな、草や花を描いた壁紙などで美しく、小ぢんまりとしていた去年の〔オテル・ド・ラベ〕の情緒はないが、男の、しかも初老の私には、こちらのほうがさっぱりとしてよかった。

パッシーの商店街は目と鼻の先だし、私の大好きなパッシーの墓地やトロカデロへも歩いて五分ほどだった。

パリに二夜泊った翌朝、私たちは、いよいよ田舎へ出かけた。

Y君が借りたレンタ・カーは〔プジョー604オート〕で、やや小体だが性能はすばらしく、フランスの大統領も愛用しているそうな。

今度は、はじめにロワールの城をまわってみようということで、オルレアンで高速道路を下り、先ず、ルイ十五世が愛人ポンパドール夫人へあたえたという〔シャトー・メナール〕へ行ったが、あいにく休館。そこで、ブロワとシャンボールの両城を見物し、夕暮れのソローニュの森を抜け、オンゼンの〔ドメーヌ・デ・オート・ド・ロワール〕というホテルへ行った。

いずれ、このあたりの豪族の城館だったのだろう。こんもりとした森の中の館で、フロントの婦人をはじめ、ホテルの使用人のすべてがよかった。親切で飾り気が少しもなく、食堂ではたらく少女も、去年のアルルやレ・ゼジーで見たような、結婚して、いいおかみ

さんになって、子供を五人も六人も生みそうな健康美に輝いている。

「写真を撮らせて」

と、たのむや、たちまちに頬が真赤になる。

お礼に日本製のカレンダーをあげると、

「メルシ」

いかにもはずかしそうに礼をのべ、またしても上気する。いま、こういう少女が日本の何処かにいるかねえ……。

食事もうまく、私は自家製のフォアグラに満足した。

ホテルへ着いたとき、ちょうど停電で女中さんが大蠟燭を灯してくれる。浴室の設備は例によって最新式だった。

翌朝、目ざめて窓を開け放つと、濃厚なオゾンをふくんだ朝の大気が森の樹々の匂いを運んで流れ入ってくる。

その大気を吸い込みながら、ベッドでうつらうつらと過ごす時間こそ実にたまらない。これが私をフランスの田舎へひきつけるのだ。

仕事をいっさい忘れている。電話もかからず来客もない。一年中、はたらきづめに暮しているのだから、こうして半月ほど頭を空にすることは悪くないはずだ。

白鳥が浮かぶ池のほとりで、ホテルの飼い犬へヌガーをあたえていると、二人があらわ

れ、出発を告げた。

つぎの日は、いくつかの城をまわり、シュノンソーの城を最後に、モンバゾンのホテル〔シャトー・ダルティニー〕へ泊った。

この大きな館は、香水王のコティがいとなんだものだそうな。

外観はすばらしいが、金ピカピカの中味はいささか粗雑で、去年のスペインのアルハンブラのホテルをおもい起させる。

しかし、大食堂へ入ると、いずれもキビキビと親切で、先ずシャンパンを注文したら、ソムリエが、

「どなたかのお祝い事でも?」

と尋ねる。S君がとっさに、私の誕生日だと冗談をいったら、向うでは本気にして、デザートに大きなケーキを運んで来た。ケーキにはフランス語で〔誕生日おめでとうございます〕とある。

そこへ給仕監督があらわれ、「当ホテルからのお祝いです」という。

「こりゃあ、君、死んでも食べなきゃなるまい」

「観念します」

食事も悪くなかった。

つぎの日も、申し分のない晴天である。

先ず、アンボワーズの城を見物し、ロワール川に沿った道をツールへ出た。
この日はシノンを見物したのを最後に、沈みかける太陽をながめながら、田舎道をくねくねとすすむ。
ホテルは〔シャトー・ド・テルドラス〕という。
ホテルの庭の向うが牧場になってい、牛が寝そべっていたが、入浴して窓を開けて見ると、みんな小屋へ帰ってしまっている。
このホテルも、オンゼンのホテルのように小ぢんまりとした家族的なホテルだ。この家のむすめさんが食堂で注文をとる。
私は田舎風の豆のスープと、家鴨（カナール）の胸肉のローストにした。
Y君が、
「先刻、牛を撮ろうとして柵（さく）を乗り越えたら電流が通っていて、びっくりしました」
と、いう。
牛が逃げないように弱い電流が通っているらしい。
翌朝は曇って、霧がたちこめていたが、昼近くからしだいに晴れてくる。
アンジエ、ナイトの両城と市街を見物してから、海浜のリゾート・タウンのラ・ボールへ着く。
近くに競馬場もあり、カジノもあって、夏のシーズンは賑（にぎ）わうのだろう。大きくて立派

で、近代的なホテルが海岸道路にたちならんでいるが、私たちが泊ったのは、松林とひろびろとした芝生の彼方に海をのぞむホテルで〔カステル・マリー・ルイズ〕という。

いかにも瀟洒な邸宅風のホテルで、私はアパルトマンと称する別棟の二間つづきの客室へ入った。

有名なリゾート・タウンのホテルだけに、隅から隅まで手入れが行きとどき、美しい浴室で湯に浸りながら、窓からながれ込む汐風の匂いをこころゆくまで吸い込む。

今度の旅行には、いつものように痛風の発作にそなえ、携帯用のステッキとスリッパを用意してきたが、痛風は出なかったけれど、左脚に神経痛が出て、ステッキは大いに役立った。

だが、この日は痛みもなく、腹も空いて、食堂では牡蠣や舌びらめのグリエが旨い。舌びらめはことによく、香草の入ったバターソースの味は、四年前にリヨンの〔ラ・メール・ギイ〕で食べた舌びらめのムニエルをしのばせるに充分だった。

華麗な食堂には、このあたりの別荘に暮しているらしい、金持だが退屈な日々を送り迎えしている老人男女たちが多く、その人たちの交流が、見ていてまことに興味ぶかい。

食後、暗い海辺へ出てみた。

ここは、もうブルターニュだ。半島の向うの海はイギリス海峡である。

ぐっすりと眠った翌朝は、またも快晴だった。

はじめてフランスへ来て運転をするY君なのだが、少しも心配はない。S君は去年のフランス行で地図を見る眼がたしかになっているし、私は後の座席でぼんやりしていればよい。

一応の予定はたててあるが、諸方の見物も臨機応変にして、なるべく疲れぬようにし、休養を目的とする。

ともあれ、日が沈まぬうちに予約したホテルへ入ることが肝要なのだ。夜道となったら地図があっても異国人の私たちにはどうにもならない。

七七四号線を北上する途中で、ゲランドという古い城壁に囲まれた町や、有名なカルナックの巨石の列などをのんびりと見物。昼すぎにカンペールの町で軽い昼食をすませ、ブルターニュの古い風俗が残っているポンラベの町で遊んだ。川岸の品のよい民芸品店でスカーフなどを買ってから、またカンペールへもどり、アルモリック山塊を越え、海をのぞむ崖上に建つ、トレブルダンの小さなホテルに到着する。

到着と同時に日が海へ沈んだ。

このホテルは、いかにも質朴な田舎の民家で〔マノワール・ド・ランケルレク〕という。

部屋もベッドで一杯という小さなものだが、食事は旨い。

S君とY君は牡蠣に目がないので、むさぼり食べる。

「昨日のラ・ボールより、こっちの牡蠣のほうが旨いです」
と、いう。
私は小海老とアルティーショーのオードヴルと、鰈のロティにした。新鮮な魚肉、濃厚なクリーム・ソース。旨かった。デザートは、このあたりの名物クレープにする。
食後、食堂のとなりの小さなバーへ移ると、炉に薪が燃えている。よい香りがただよい、しばらくは身うごきするのも面倒になり、コーヒーとコニャックを一時間もかけてのんだ。
翌朝、目ざめると、窓から海が消えていた。
乳白色の深い霧がたちこめている。
少し寒い。
ベッドへもぐり込み、少年が運んで来たコーヒーとパンを食べた。
十時半に、まだはれぬ霧の中を出発する。
この日は、海に突き出た城郭都市として名高いサンマロでゆっくりと遊んだり、買物をしたりしたので、これも有名なモン・サン・ミッシェルへ着いたときには、秋の日が沈みかけていた。
中世以来の巡礼地で、海の中の小島にそびえる大教会は、遠望するにとどめた。
見物していたのでは、それこそ、日が沈んでしまう。
「ともかく急ごう」

というわけで、この夜の泊りのモンパンション村の〔シャトー・ド・ラ・サル〕に着いたときは、もう薄暗かった。

ここは昨日のホテルよりも、さらに冷え込みが強い。食堂の暖炉には、むろん薪が燃えている。

まるで、中世の地主の屋敷のように古びていて、石造りの壁も、ふとい柱や梁も堂々たるもので、女主人ルメスルさんが親切に世話をしてくれた。S君は空港へ電話をしたり、予約をしていない明日のホテルの紹介をたのんだりしたのだが、すべて手ぎわよく、しかも念を入れてやってくれたらしい。

ただし、食事は濃厚すぎて、私にはどうもいただけなかった。

先ず、仔牛の喉肉の煮込みをやったのだが、そのクリーム・ソースのくどい味にまいってしまい、後の羊のローストには、ほとんど手が出なかった。

しかし、S・Y両君は旨かったようだ。

ノルマンディのクリームは名物らしいが、使い方が上手でない。そのかわり、翌朝のコーヒーと共に出た牛乳の旨さはたとえようもなかった。

コーヒーには入れず、牛乳だけをたっぷりとのむ。

朝露に濡れた裏庭で、となりの牧場の牛を見ていると、日射しがあたたかくなってきた。

ホテルを出て、アブランシュの町へ出ると、ここには霧がたちこめている。日曜日だった。それも忘れていたのだが、マイエンヌ川に沿った町の露店市に出合って、それとわかったのである。

露店は、長い橋の上にもたちならんでいた。

今日のコースは、まったく急ぐ必要もなく、二十四時間のカー・レースで名高いル・マンの、中世以来の旧市街保存地区を見物してから、程近いルーエの町のホテル〔オテル・リコルドー〕へ到着する。

教会の前の、しっとりと落ちついたホテルで、片足の無い老主人は料理長を兼ねている。少々皮肉をまじえたユーモアを発揮して、S君のフランス語を、

「ほう、一所懸命、勉強をしましたね」

などという。

料理の選択については、

「結構な御注文をいただいて、ありがとう」

と、いった。

夜は家族総動員で食堂での活躍となる。

息子と娘と共に、きびきびと給仕にはたらく中年のマダムは、まるで泰西名画に描かれているような古典的美人。すばらしい横顔だった。

先ず、メロンとポートワインの前菜。メロン・アベック・ポートというやつ。それから私はオマールを食べた。旨い。

食事を終え、本館から少しはなれて、寄宿学校（中学）のとなりにある別館（アパルトマン）へもどる。

しずかな町で、夜になると自動車も通らぬ。

窓から外を見ていると、向い側の住宅のマダムが靴音を鳴らして帰って来た。

このホテルは一八七六年の創業で、代々リコルドー家によって経営され、現主人のリコルドー氏は第一級のシェフとして、フランスの料理界でも知られた人だそうな。

すると、裏手から猫が三匹も駈けあらわれ、マダムにすがりついている。

失われた片足は、第二次大戦に出征したときのものか、と想像する。そうなるとマダムは従軍看護婦だったのではあるまいか……などと、あらぬ想いが浮かんでくるほど、リコルドー夫妻には、いかにもフランスの匂いがただよっている。

朝から日暮れまでは、パートの小母さんが来てはたらき、マダムも休み、二人の子は高校へでも行くのだろう。本館のフロントは、リコルドー氏と老母のみになっていた。

この日、いよいよパリへもどる。

シャルトルの大聖堂を見てから、私たちはオート・ルートへ入り、パリへ向った。

日暮れにマルメゾンへ行き、ナポレオンの前妻ジョセフィーヌが住み暮した館を見てか

ら、パッシーの〔オテル・マスネ〕へもどる。

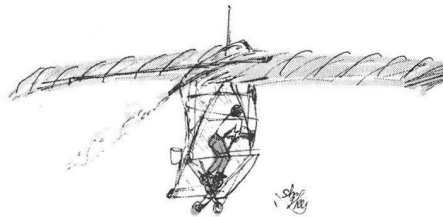
一週間ほど見ぬうちに、パリの樹々の葉は落ちて、風も冷めたく、みんな、ゆっくりと湯に浸ってなかなか出て来ない。

じゅうぶんにあたたまってから、近くの中華料理店へ出かけ、鶏の熱いスープや焼飯を食べた。

もう、其処此処のレストランでは、店の前で生牡蠣を売りはじめている。

下町では焼栗売りも出ているにちがいなかった。

沼津市 スカンジナビア



むかし、東京の下町に生まれ育った私は、私のみならず、海洋とは無縁の生きものだったといってよいだろう。

申すまでもなく、海（東京湾）は目と鼻の先にあるのだから、これに憧れるということもない。

子供のころから、楽しみを追う暮しが身についていて、たとえば夏休みが終って、小学校の教室へ日焼けした顔をそろえても、それは海や山で焼けたものではなかった。

町中を駈けまわったり、上野の山へ蟬を取りに行ったりして焼けたものだった。

五十何人の同級生のうちで、親たちと避暑に行ったとか、海水浴に行ったとかいうのは二人か三人ではなかったろうか。

山手の子とちがい、下町の子たちは、たとえばチャンバラ映画を見てまわるだけで、もう充分にみたされていたのだ。

そのころ、幕末の剣士・伊庭八郎を主人公にした映画を観たことがある。

八郎に扮したのは、後に名傍役として鳴らした故・山本礼三郎で、ヒロインの乙女に山田五十鈴が出ていた。

五十鈴は、まだデビューしたばかりで、十五、六歳ではなかったろうか。おもえば彼女の声名も長くつづいているものだ。

当時、小学生の私は、この伊庭八郎を主人公にした小説を書くなどという将来が自分にあろうとは、むろん、夢にも想ってはいない。

伊庭八郎を主人公にした小説〔幕末遊撃隊〕を書いたのは、もう二十年も前のことになる。

その取材で沼津へ行き、海辺の、まるでお化け屋敷のような古いホテルへ泊ったが、夕食がひどく、閉口してしまい、沼津まで出て駅弁二つと酒やビールを仕込み、ホテルへもどったことがある。

この明治の初期につくられたホテルは、間もなく取り壊されてしまったけれども、翌日、取材を終えると、沼津から小さな船に乗って、先ず土肥の温泉へ泊り、つぎの日は、バスで松崎を経て下田へ行き、それから天城峠を引き返し、湯ヶ野へ泊ってから帰京した。

そのころの伊豆は、ほんとうによかった。

ことに西海岸は、戦前の面影を、そのままにとどめてい、海にのぞむ温泉といえば、土

肥温泉のみといってよかった。

西海岸は、山が海にせまっている。

その山の裾に、小さな浦が数え切れぬほどあって、その浦に民家が肩を寄せ合うように、ひとかたまりになっている。

このあたりの人びとが漁業にはたらくことはいうまでもない。女も子供も激しい労働をしていた。

むかし、西海岸を訪れる観光客は、ほとんどなかったようにおもう。

土肥温泉へ来るにしても、修善寺や吉奈からバスで山を越えて来た。

ところが、四年ほど前に仕事の取材で西海岸をまわったとき、海岸一帯が隙間もなく観光開発されている姿に瞠目したものだ。

そして、車で沼津へ向って行くと、沼津市の手前二里半ほどの三津の湾に白い客船が浮いているのを見たのである。

これが、フローティング・ホテル〔スカンジナビア〕だった。

（これはいい。一度、泊ってみたいものだ）

と、そのときおもった。

ずっとむかし、船の長旅をして、

（二度と船の旅はすまい）

懲り懲りした私だったが、この船のホテルは海を走るわけではない。十六本のアンカーによって、しっかりと固定されていて、客は岸辺の桟橋をわたり、中へ入ればよい。私たちは、夏のシーズンが終るのを待ち、泊りに出かけた。

スカンジナビアの船体は一九二七年（昭和二年）に、スウェーデンで建造されたという。

持主は、クリッパーライン社のオーナーで、エィナー・ハンセン。つまり、ハンセン氏のプライベート・ヨットだった。

五、一〇五トンの大ヨットである。

かのギリシアの大富豪オナシスのプライベート・ヨットが、二、〇〇〇トン程度だったというから、その倍以上の大きな船だ。

第二次大戦前の、金持にとっては最もよい時代を、この船は、栄華に酔い痴れていた多勢の客を乗せ、ヨーロッパの海をまわっていたのだった。

やがて第二次世界大戦が始まると、バルト海を制圧したナチス・ドイツが、この船を接収した。

そのころのスカンジナビアには、何という名前がつけられていたのか、私は知らぬ。

船を日本の某企業が買い取ったときの条件の一つに、

「旧船名は、絶対に使用せぬこと」
というのがある。
日本へ身売りをした、この船のプライドを、せめて、この一条によってまもりぬこうとしたのだろう。
「シンボル・マーク（救命ボートのライオンのマーク）を、コマーシャル・ベースでは絶対に使用せぬこと」
の、一条もある。
さて……。
スカンジナビアを接収したナチス・ドイツは、この船を、高級将官のクラブとして使用することにした。〔砂漠の鬼将軍〕などとよばれて、一時はアフリカ戦線に英・米軍を圧倒した、あのロンメル将軍も、この船を、
「こよなく愛した……」
と、語り継がれているそうな。
ロンメルは、後にヒトラー暗殺計画に加わり、これが失敗して後、自殺をとげている。
戦後の映画では、故シュトロハイムとジェームズ・メイスンがロンメル将軍を演じた。
（なるほど……）
マホガニーとチーク材を見事に使った船内のフロア、歩廊などに、シュトロハイムやメ

イスンの将軍姿をWらせて見ると、寸分の隙もない雰囲気が私の脳裡へ浮かんでくる。
また、それ以前のイヴニングドレスと宝石に身を包んだ淑女たちをWらせて見ても同じことだ。
このフローティング・ホテルの魅力は、そこにあるのだろう。
客室の調度も、ほとんど、むかしのままで、浴室の設備など、いかにも豪華ヨットのものだ。
すべてが背丈の高い外国人なみに造られてい、それをそのまま残してある。
船が好きな人が泊ったら、こたえられまい。
夜更けて、私などにはいささかうるさいモーターの響きも、そうした人たちなら、かえってよろこぶかも知れない。
まるで、海の上を走っているような感じになるからだ。
二間つづきの客室へ入って、私が、
「もしかすると、ロンメルは、このソファにかけ、ベッドで眠ったかも知れないね」
そういうと、
「ああ、そのころの彼らは、大変な羽振りだったんでしょうね、チキショウ」
と、Tがこたえた。
船内の壁の木工細工やステンドグラスなど、むかしの北欧の職人たちが腕を揮った、す

ばらしい出来栄えだ。

第二次大戦後、船はスウェーデンへ返還されたが、個人では維持できなくなり、一般営業に切り換えられ、船客を乗せ、世界の保養地を巡航するようになった。

それも、かなり贅沢な船旅だったらしい。

その名残りが、メイン・ダイニング・ルームでの北欧バイキング料理なのだろう。

ダイニング・ルームのカーペットについても、

「できるかぎり、長期間、使用すること」

という条件がついている。

このカーペットは、イギリスのバッキンガム宮殿のカーペットと同じものだという。

ちかごろは、物めずらしさもあって、見学だけの客や、バイキング料理だけをたのしむ客も多くなったと聞いたが、やはり、このホテルには泊るべきだろう。

泊って、この船に生命を感じ、彼の生き抜いて来た歴史を想うべきだろう。

翌朝。

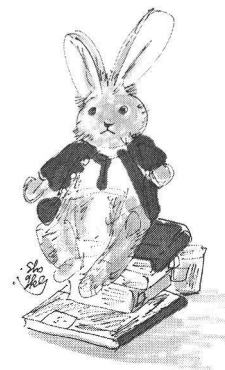
空は晴れていたが、富士山は見えなかった。

冬になれば、海の向うに……いや、三津の湾を抱きかかえるようにして、くっきりと富士が姿を見せるはずだ。

「どうだい。この船の歴史を、日米合作で映画にしたら、おもしろいだろうね、T君」

「いいなあ、主役はだれです？」
「この船の持主だったスウェーデンのエィナー・ハンセン氏さ」
「ハンセン氏が、いまも生きている……？」
「冗談じゃあない。いまはハンセン氏の息子になっている。だから主演俳優は親子二代の二役をつとめるわけだ」
「おもしろいなあ……」
どうです。どこかの映画プロデューサーが、この案を買いませんか？

芦原温泉　開花亭



むかし、私は年末になると京都へ出かけた。

一年中、はたらきつづけてきて、年末の十日ほどを自分の休暇にし、このときばかりは仕事をせず、本も読まず、テレビも見なかった。

なじみの宿やホテルに泊り、好きなときに目ざめ、好きなときに眠り、好きなときに好きなものを食べるという日々を送り、大晦日近くなってから帰宅するのが常だった。

家族も、年末年始の仕度に追われる期ゆえ、かえって私が家にいるのが邪魔になるらしい。

京都に飽きると、旧知の人びとが多い近江の彦根へ出て、花街の中の、親しくしている料亭〔小島〕で、ゆっくりと酒をのむ。

彦根へ来ると、雪になることが多かった。

といっても師走の雪である。雪も名物の一つになっている、このあたりでも、それが本格的に降り積もるのは新しい年を迎えてからだ。

彦根から北陸路へまわることも多かった。

そのころになると帰京の日も近づいているので、日を重ねて旅をするわけにもまいらぬ。

芦原から、山代、片山津、粟津あたりまでが精々のところで、そうした温泉場で二日ほど過ごすわけだが、北陸でも雪が降っている。

しかし、まだ、降りつづくことはない。

夕暮れから夜にかけての雪が浅く積もったかとおもうと、翌日は青空がのぞく。

北陸が雪に閉ざされるのは、やはり、年があらたまってからだ。

芦原では、小さな宿をえらんで泊った。

年輩の女中頭は、どこの宿でも例外なく親切で、朝の食膳に、自宅から持って来た漬け物を出してくれたりする。

チップを置けば、かならず、みやげ物を忘れない。

北陸の湯の町の、女たちの親切さは、行ってみた者でなければわかるまい。

ガラス戸ごしに、朝の湯豆腐で酒をのみながら、中年の女中さんたちの身の上ばなしを聞いていると、また、ちらちらと雪になる。

炬燵へ寝そべって、ぼんやりと雪見をしながら、按摩をとっていると、一年の疲労が消し飛ぶようなおもいがしたものだ。

だが、十年ほど前から、この年末恒例の旅から遠ざかってしまった。年末の旅に出ないことはないが、仕事のための旅行が多くなり、辛うじて、その帰りに伊豆の温泉へ一泊する程度になってしまった。

仕事のための旅は、私ひとりの旅ではない。

また、以前のように、のんびりとした気分で旅をつづけられるような日本ではなくなってしまったようだ。

「むかしのような商売をしていたのでは、もう食べて行けなくなりました。それなら、いっそ、やめてしまおうとおもいまして……」

こういって、諸方のなじみの宿や店が、この十年にどれほど廃業してしまったことだろう。

さて……。

去年の暮れに、私は久しぶりで芦原を訪れた。

一昨年の初夏に、芦原でそれと知られた旅館〔開花亭〕へはじめて泊り、この旅館には、まだ芦原のよさが残っていることを知った。

芦原温泉の歴史は浅い。

あと二年すると百年記念の祭りがおこなわれるそうな。

一足先に芦原へ着いていたカメラマンのWは、巨大な岩石の累層が日本海へ突き出てい

る北陸屈指の観光名所を撮りに行ったらしいが、雪で、おもうようにゆかなかったらしい。

開花亭の創業は大正元年だそうだが、昭和三十一年の芦原大火で、町の大半が焼けてしまったのだから、いまの建築は、その後のもので、八年前に建て増しされた新館をふくめて客室は三十七室。客にとっては理想的な旅館といってよい。

客室は、いずれも、約三千坪の見事な庭園に面して建てられ、勤続何十年もの古参女中さんたちが、実に行きとどいた接待をしてくれる。

開花亭では、百何十名もの団体客を年に二、三回しかとらぬ。

「コンピュータ導入で、機械的に大量の客をさばくというエージェントのやり方は、本来の接客業とはちがうとおもいます」

と、当主の北川昭治氏はいう。

「私どものように、こんな和風建築で、しかも二階建で、効率の悪い旅館をやっているなんて変り者だといわれもしましたが、しかし、これが開花亭の方針なのですから仕方がありません。今後も個人のお客様を主とした経営をつらぬいて行きたいと考えています」

開花亭は、派手な宣伝を、ほとんどしない。

芦原ほんらいの風趣が、色濃く残されているのだ。

いつだったか、先日、どこかの新聞だか週刊誌だかで読んだのだが、いま、人気絶頂

（絶頂が何年もつづいている）の松竹新喜劇をひきいる藤山寛美は、一年一日の休みもなくはたらきつづけ、毎月の演目をこなすために追いまくられている。

その寛美が、夜ふけて大阪の舞台を終え、疲労困憊の躰を急行列車に乗せて芦原へ駈けつけ、芸者たちと大さわぎをするのが、ただ一つのストレス解放になるということで、その翌朝早くには、あわただしく芦原を発ち、大阪の昼ノ部の舞台へ駈けもどるのだという。

おもえば藤山寛美が気の毒になってくるが、つまりは、それだけ芦原というところは、客のこころを和ませてくれるのだろう。

夕飯が出るころには、いくらか雪も小降りになったようだが、ここ数日来の雪だけに、かなり積もっている。

京都から特急〔雷鳥〕で着いたときは十数分の遅れにすぎなかったのだが、

「明日は大丈夫だろうか？」

こころもとなげに私がいうと、女中の淳子さん（三十年勤続）も、宿のおかみさんも、

「十二月に列車がうごかないなんてことは決してございません」

と、いう。

「ま、そりゃあ、そうなんだが……」

「大丈夫でございますよ」
「そう、大丈夫だろうね」
十二月に何度も北陸へ来ている私は、雪に閉じこめられた経験が一度もない。
しかし、何となく不安だった。
明日は予定の場所へ、どうしても移らなくてはならぬ。
夕飯の献立を記しておこう。

付出し　生子（ナマコ）（ワサビ）。
造り　三国沖の赤海老・ヒラマサ。
八寸　毬蒸（いがむ）しの雲丹。ワカサギの昆布巻。鮎の粕漬。南天イクラなど。
替鉢　鰊（にしん）そば。
鍋　鱈（たら）チリ。
強肴　鰌（かじか）の焼物（ショウガ、酢ゴボウ）。
酢肴　越前ズワイ蟹（二杯酢）。
椀　赤出し仕立（ダダミ葱（ねぎ））。
水菓子　グレープ・フルーツ。

夜更けて、シーツも蒲団カヴァーも洗いたての寝具に横たわると、湯タンポが入っていた。

テレビが、いまは亡き越路吹雪のビッグ・ショーの抜粋をやっている。

突然、戸外で妙な音がとどろいた。

何の音だか、さっぱりわからぬ。

と……稲妻が白く光って、カーテンの隙間から疾り込んできた。

雷鳴だったのだ。

また、雷鳴がとどろく。

さまざまな場所で、四季それぞれの雷鳴をきいている私だが、大雪の夜の雷鳴は生まれてはじめて耳にした。

翌朝。

目ざめると、まだ雪が降っている。

暖房のよくきいた客室にいて、庭に積もった雪を見ていると、さほどにはおもえないが、テレビのニュースでは、列車の運休もあるようだった。

やがて、私たちは炬燵の上にととのえられた膳に向い、桶の湯豆腐で酒をのんだ。

温泉玉子やモズク。焙った笹鰈。いずれも朝の酒にはよい。

食事をしながら、Tが電話で、列車の様子を駅に問い合せるが、

「切れ目なしに、はなし中です」
と、いう。
「ちょっと、駅へ行って来ます」
食事を終えると、Tは雪の中へ飛び出して行った。
私は自分の部屋へもどり、身仕度をととのえはしたが、今日の予定が狂うことを覚悟した。
しばらくして、Tが部屋へあらわれた。
「列車は、うごきません」
「困ったね」
「しかし、自動車で北陸自動車道を行けば、米原までは三時間か三時間半で行けるそうです」
「ほんとうかしらん」
「大丈夫でしょう」
「それで行くよりほかに仕方がないね」
昼前に、私たちはタクシーで出発した。
おもいのほかの積雪だった。
重くて、厚い灰色のカーテンを掻き分けるようにして、タクシーはのろのろと走る。

丸岡のあたりは、家も道も山々も木も、まったく雪に埋もれつくしているようだった。

こうして、北陸自動車道へ入ったわけだが、敦賀の手前まで行き着くのに、早くも二時間ほどかかってしまった。

雪のない晴天ならば、この有料道路を一気に走りぬけ、すでに米原の新幹線のホームに立っているところだ。

長いトンネルへ入り、いま少しで抜け出ようというとき、タクシーは立ち往生してしまった。

先にトンネルを出た他の自動車が数台、スリップして雪の中へ突っ込み、道を塞いでしまったのである。

そのまま、一時間がすぎた。

「あと、三十分早く、宿を出ていたらなあ」

しきりに、Tがくやしがる。

二時間がすぎた。

トンネルの中で三時間がすぎると、腹が空いてきた。

「ああ、ビールがのみたい」

と、Wがもそもそといった。

「カレー・ライスが食いたい」

と、T。

「そうだ。宿でもらった、みやげ物の菓子を出して、みんなで食べよう」

と、私。

タクシーのラジオは、この師走の大雪が大正六年以来のものだと報じている。宿の人たちや私たちが油断をしたのも当然というべきか……。

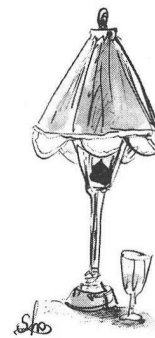
五時間たった。

トンネルの中の自動車の列は微動だにしなかった。

トンネルの向うで事故車を片づけているらしい道路公団の係員が、もう何時間も「しばらくお待ち下さい」と、繰り返すのみだった。

湯河原温泉

楽山荘



湯河原の〔楽山荘〕へ、はじめて泊ったのは、昭和二十八年の秋だった。

「いい宿ですよ。泊って、ゆっくりと相談をしましょう」

と、さそってくれたのは、新国劇の島田正吾である。

島田は四十代の半ばで、役者として脂が乗りきったところだったし、私は三十になっていなかった。

そのころの私は大劇場の作者としてデビューしてから、まだ二年しかたっていない。

翌二十九年の春の明治座で、私は渡辺崋山を劇化することになり、主演の島田が私と演出の佐々木隆を招んでくれたので、佐々木さんと私は一足遅れて湯河原へ向った。

楽山荘は、奥湯河原といってよい。道の両側の山肌がせまっていて、

「此処が楽山荘です」

と、駅から私たちを乗せて来た運転手がいって、ドアを開けた。

見ると、何もない。せまい石段が高処へ登っているのが見えるだけで、高処の上には神

社か何かあるのだろうとおもった。
「此処って……何もないね」
「その石段を登って行くんですよ」
「へえ……車は行かないの？」
「行けないんです」
と、いう。
そこで、石段を登りはじめた。途中で一息いれる場所があり、腰掛けが用意してある。石段は百七十段あった。
若いころだし、別に苦にはならなかったが、旅館への出入りは、この石段一つきりしかない。
登り切ると、駅からの電話で到着を知った女中さんが水をいれたコップを二つ、盆に乗せて私たちに出したのには恐れ入った。
それから私は、たびたび、楽山荘で仕事をするようになった。
新国劇の脚本を書くことがほとんどだったけれど、映画のシナリオも書いている。
旅館で仕事ができなくなったのは、小説に転じて、しかも時代小説を書くようになってからだろう。
そういうわけで、私が直木賞を受賞した昭和三十五年から約二十年間、楽山荘へも御無

沙汰ということになる。

久しぶりで問い合せてみると、

「むかしのままにやっております。ただし、いまは道を切りひらいて、玄関の近くまで自動車が入るようになりました」

とのことだ。

たしかに、自動車が玄関近くまで入り、それだけが変っていて、あとは何一つ変っていない。

この小さな山は楽山荘の所有で、温泉はいまも昼夜湧き出て、その豊かな湯量には、同行の二人も瞠目していた。

「どうです。相変らず、うちのお湯はスゴイでしょ」

と、むかしの女あるじ・喜多夏江さんが八十をこえて尚、元気だったのにもおどろいた。

失礼なはなしだが、もしやすると、

（亡くなっているかも……？）

と、おもっていたのである。

「センセ。むかしより、いまのほうがイイ男よ」

「冗談いいなさんな」

「だって若いころは、キリギリスみたいに痩せてたもの」
と、早速、一発かまされてしまう。
糖尿と、目がいくらか悪いそうだが、むかしのままの声にちからがこもっている。
いま、楽山荘を経営しているのは、養子の孟さんだ。
それにしても変らない。
竹林に囲まれた本館、別棟の離れ屋。
紅椿が咲き、冬の山々が暖かい日ざしを吸って、きこえるものは風の音だけだ。
このように静かで、おだやかな環境ゆえ、仕事に打ち込むには絶好の旅館なのだが、何しろ当時は百七十の石段を登り下りしなくては町へも出られない。
下りるのはよいが、帰りに登ることを想うと、外へ出るのも億劫になってしまう。
いきおい、仕事に熱中するよりほかはないことになる。
楽山荘は島田正吾家のみか、新国劇ともなじみが深く、劇団の長老で、いまは亡き久松喜世子などは、躰をやすめに楽山荘へ来ると、
「ただいま」
と、いうほどだった。
当時の久松さんは七十をこえていたが、いっしょに温泉へ入っていて、
「池波さん。山を下りて玉突きに行かない？」

なぞという。

「石段がいやだから……」

「じゃ、一人で行って来る」

と、この老女は石段の登り下りを、少しも苦にしなかった。

さすがに女優としての躰が鍛えぬかれていたのだろう。なればこそ、八十をこえて新橋演舞場で、島田の忠太郎を相手に〔瞼の母〕のお浜を演じることができたのだ。

二十年ぶりで、私は本館に接した別棟の離れへ入った。

私が愛用したのは本館二階の竹の間だったが、この離れでも、別館（三階）の花の間でも仕事をした。

竹の間に泊って、明け方まで仕事をして、どうやら眠ったかとおもうと、突然、離れ屋の窓から朗々たる唄声がきこえる。

もう書いてもいいだろう。いまは亡きテナー・藤原義江が彼女と泊っていて、〔椿姫〕か何かを二人で唄っているのだ。オペラ歌手の唄声は雨戸をつらぬく。

この宿の常連のことを書くと、いまは亡き人が多くなった。

安井曾太郎、前田青邨、五味康祐、中山義秀、高見順。そして私の亡師・長谷川伸も楽山荘で病後の保養をしたことがある。

中山義秀氏は離れに泊っていて、連日、一枚も書かず、芸者をよんで酒びたりになって

い、朝になると女あるじをよび、
「池波君は何枚書いた？」
と、尋く。
女あるじが、中山氏の執筆をはげますつもりで、わざと、
「一幕、終ったらしいですよ」
「畜生め」
その中山氏に庭でお目にかかったとき、氏の傑作〔碑〕を、
「もし、やれる機会がありましたら、新国劇でやらせていただきたいのですが……」
たのむと、こころよく、
「たのしみにしているよ」
と、いって下すった。
島田正吾からも、たしか、中山氏にたのんだと記憶する。
私は、島田・辰巳に、あの兄弟を演じさせて〔碑〕をやりたかったのだが、いろいろな事情があって、ついに機会を得なかった。
全盛期の新国劇で〔碑〕をやったら、さぞ、よかったろう。いまも残念でならない。
そのかわり、井上靖氏の〔風林火山〕の上演は一発で決まった。
何となれば、昭和三十二年の十月に、新国劇が読売ホールを借りて、自主公演をおこ

なったからである。

そのころの私は、新国劇という劇団に惚れ込んでいて、火の玉のように燃えていたし、島田・辰巳の意欲も激しかった。

〔風林火山〕の主役・山本勘助は島田正吾の当り役となったが、辰巳柳太郎の武田信玄もすばらしかった。

読売ホールの公演は、はじめ〔風林火山〕の一本立ということだったので、辰巳柳太郎が楽山荘で脚本を書いている私のところへ何度も電話をかけてきて、

「おれの役は、いい役なのかね？」

「いい役も何も、原作を読んでごらんなさい。あんたも主役みたいなもんだから……」

「ほんとかね」

「まあ、安心をして、まかせておきなさい」

「たのむぜ」

といったが、それでもライバルの島田に後れをとるまいとして〔どたんば〕という炭坑を舞台にした一幕物を出し、これも成功した。

あのころの劇団と私自身の熱気は、いまも忘れられない。そのころに培ったものが、いまの六十に近くなった私の仕事を支えていてくれるといってもよい。

二十年ぶりで泊った私の部屋は、別棟の離れの二階だった。

約二十年前に、この離れへ滞在して、松竹映画〔敵は本能寺にあり〕のシナリオを書いていたとき、東京では、あの安保騒動の真最中だったのである。

したがって私は、あのときの東京の騒ぎを目にたしかめてはいない。

仕事が終り、山を下ったときには、もう七月に入っていて、それからすぐ京都へ行って、撮影所の人びとと最後の手直しをし、帰京すると直木賞の受賞ということで、私が芝居の世界から去って行く切掛となった年だ。

夕食、朝食の料理に、何やら見おぼえがあるので、

「むかしの板前さんは？」

と尋いたら、これまた七十をこえて、いまも庖丁をとっているそうな。

楽山荘の創業は昭和七年。先々代の主人が、はじめ別荘にしていたのだが、温泉を掘ってみたところ、あまりにも湯量が豊富なので、

「私物化するのはもったいない」

とあって、旅館を開業した。

離れ屋をふくめて、部屋数は十五ほどだから、ゆっくりと静かに温泉をたのしむためには理想的なところだろう。

私が泊っていたころは、まだ五味氏は来ていなかった。

庭で、はなしをしたのは中山・高見の両氏で、

「このごろ、浅草はどうなってます？」

と、高見順氏は、なつかしそうに目を細めて私に尋ねたりした。

湯河原の、このあたりは山肌が両側からせまっていて、地形が複雑なので、大きな建物が侵蝕できない。

それが、むかしのままの環境を保ちつづけさせているのだろう。

朝起きて窓を開けると、先ず、彼方の箱根の山々が朝の日ざしを浴びているのが目に入る。

清澄な空気が、小鳥たちをよろこばせる。

ことに夏がよい。

私も、此処でやれる仕事を持って、またやって来ようと、おもわずにはいられなかった。

解説

筒井ガンコ堂

「せっかくここまで来たのだから……」ということが、池波正太郎の〈旅〉では、ほとんど、ない。足をのばしてついでに立ち寄るということはなく、興味が赴くものなら最初から計画の中に組み入れられている。下調べはいつも周到だ。

その計画自体も、決して無理がない。この「無理をしない」ということが、池波正太郎が決めた旅のルールの第一条と考えていいように思う。

まず、不案内な土地、殊に外国に出かけた場合、明るいうちにその日の旅館に入ることを心がける。あるいは、そのようにスケジュールを組んでおく。途中に、少し回り道をすれば、名の知れた景観古蹟があったとしても、「無理をしない」。その思い切りのよさ、自制心の強さは、見事である。それは偏に、その旅の、目的の成就と平穏のために、余計なことをして不用意にトラブルを招来しない用心なのである。池波正太郎にとって、旅は早や、冒険ではない。

食事にしてもそうだ。旅に出れば当然、その土地土地の誇る美味珍味のことがある。多

くの人にとって、それが最高の愉しみでさえあるようだ。それでなくても「一億総グルメ」の時代である。みやげ話の材料にもなる。で、国内でも海外でも、有名料亭、有名レストランに日本人が殺到するわけだが、池波正太郎は、そのことに執着することがない。あれほどの「うまいもの好き」の人が、である。然も、腹八分目ならぬ腹七分目を守って崩さない。側の者が、もしや身体が不調なのではないかと心配する程の（と言っても決して過言ではない）節制ぶりなのだ。むろんそれも、旅の目的の成就と無事を思っての、自制なのである。「無理をしない」のだ。その上、下痢、風邪その他に備えて、各種の薬（かなり高価なものがあるようだ）を鞄に入れておくことを欠かさない。尤も、聞くところによると、それらの薬のお世話になるのは決まって、本人ではなく、同行の編集者だったり、カメラマンだったりするようだ。

「無理をしない」旅という印象は、編集者だった私が同行するようになった十一、二年前からのことで、池波正太郎も若年の頃は、かなり無茶な旅を経験しているフシがある。それは、数ある時代小説の、例えば道中の記述などの中に窺える。忍者や盗人の夜陰にまぎれての行動の件りを記す小説家の脳裡にはきっと、明りも持たずに箱根や信州の山路を歩いた若い時の記憶がチラついていたに相違ない。資料やそれを補う想像力だけで書いたとは思われない、迫真の描写力で〔闇〕を感じさせられたことは、ファンなら皆覚えがあることだ。

そして戦後、劇作から小説執筆に果敢に挑んでいた時期に、頻繁に精力的に、所謂「取材旅行」が各地に繰り広げられたであろう。それは想像を絶する程の、孤独な、真剣血を吐く取材の〔旅〕だったと思う。多くの史料、古地図その他を携えて、その地方地方の地理を、歴史を、風俗を、創作の材料として自家薬籠中の物にするための、苦しくもまた充実した〔仕込み〕の旅。信州、京、大坂、越後、出雲、薩摩、播州、伊賀、甲賀、彦根、駿河路、小田原……その足跡は何万キロに及んだろうか。

次に、徐々に世の中も落ち着いてきて豊かになり、小説家として確乎たる地歩を占めた頃から、取材旅行と併行して〝毎日の自分の生活が営まれている場所から離れる〟意味での〔旅〕が始まると考えてよさそうだ。それは小説家にとって必要なことでもあった。小説家というのは連日机の前に坐り詰めの居職である。気分転換が必要だ。再生産の活力導入である。それが散歩であったり、映画鑑賞であったり、音楽鑑賞であったり、あるいは何の目的もない気儘なひとり旅であったりする訳だ。そんな旅で池波正太郎は、相手の目に映るままに、〔呉服屋〕になったり、〔刑事〕になったり、〔べっこう屋〕になったりして「化けの道楽」をたのしんだらしい。と同時に、見知らぬ人と相対することで、自分自身をたしかめてもいる。「ひとりで旅へ出ることは、おのれを知ることになる」とは、名著『食卓の情景』にある言葉である。また、仕事や家庭を離れて、何も彼も忘れてしまうのんびりした旅の途中で出会う人物や風物が、その心算もないのに記憶の底に残って、年

月を隔ててイメージが膨らみ、小説のある情景として結実することもあっただろう。『食卓の情景』は、思えば、旅そのものを随筆に書く（勿論「食」に絡む旅という限定はあるが）目的で〔旅〕をした最初期のものであった。手許の本で調べてみると、これは昭和四十七年一月七日号から翌四十八年五月四日号までの「週刊朝日」に連載され、同年六月三十日に単行本として発行されている。この系統の〔旅〕の本として、この後『散歩のとき何か食べたくなって』と、食事を含めた旅宿に関する本書『よい匂いのする一夜』がある。また、平凡社のカラー新書の一冊『回想のジャン・ギャバン―フランス映画の旅』取材を機に海外旅行が続き、併せてそれらの旅のエッセー集が相次いで出版されることになる。すなわち五十三年の『フランス映画旅行』、五十五年の『旅と自画像』、五十六年の『旅と青空』、『田園の微風』、五十八年の『ドンレミイの雨』、六十年の『ルノワールの家』などである。これらの著書には、達者な著者自身の着彩スケッチが例外なく多数収録され、又装画も著者が描いていることで話題を呼んだ。幼い頃絵を志したこともあるという池波正太郎の「画家再誕」の場ともなっている。

〝こころに沁みるあの宿この宿〟を訪ねた本書の企画自体、奇しくも〔旅〕の中で生まれている。雑誌「太陽」に「散歩のとき何か食べたくなって」（著者自身のネーミングである）を連載中、西国へ取材に出かけた。ちょうど十年前である。新幹線の中で雑談（旅中のリラックスした座談が、すこぶる面白く、また勉強になる。これは編集者冥利というも

のだ）しているうちに、きちんとした旅宿がだんだん少なくなっているという話になった。で、意に叶う宿のあれこれを挙げて貰ったら、たちどころにリストが出来上がった。そのラインアップを見て私は、「この企画は他社には内密にして下さい」とお願いし、編集長の了解も得ず、いずれ「太陽」で連載する約束を取り交したのだった。それから数年後、企画案を練り上げた上で、約束は果たされたのである。これは昭和五十四年七月号から五十六年五月号まで「太陽」に連載され、同年四月二十日に平凡社より刊行された。

さまざまな〔旅〕を経験し尽くした、言わば〔旅〕のヴェテランとして、池波正太郎が究極的に旅宿に求めているものは何だろう。

それは、その土地土地の郷土色を最も豊かに活かした建物であり、落ち着いた静かな部屋であり、美味い食事と酒であり、そこで働く人たちの濃やかな心遣いであり、快適な眠りを約束してくれる清潔な寝具である。就中「清潔」ということが肝要のようである。

「料理の一品二品を減らしても、私は掛蒲団のカバーを替えてもらいたいとおもう」（『男のリズム』）

そして、

「つまるところは、『清らかに、客をもてなしたい』と願う旅館やホテルの人びとのこころが、客に安らぎをあたえてくれるのだ」（『日本の宿』）

そんな「あの宿この宿」がこの一冊には紹介してある。

最初に私は、「無理をしない」旅と書いた。それはつまり、池波正太郎が、他人が決して窺い知ることが出来ない、孤独で、厳しく且つ苦しい、そして思い返せば充実した楽しい、数かずの〔旅〕を繰り返した後に思い決めた、ある時期以降の〔旅〕の仕方の謂なのである。同行経験者の一人として、忘れずにそのような限定を付しておきたい。

そして、そのような池波正太郎との〔旅〕が、融通のきかない、固苦しいものだろうと想像する人に対しては、断固として「ノン」と申し上げる。逆なのだ。そのような「無理をしない」旅だからこそ、時間的にもたっぷり余裕があり、その出発から帰着まで、ゆったりした気分で〔旅〕の娯しみを満喫できるのである。

池波正太郎は自ら律すること厳しい人であるが、当該の〔旅〕に重大な支障を来さない限り、同行者にはすこぶる寛容なことを申し添えておきたい。宿で夕食を終え、翌朝何時にどこでと打ち合わせが済めば、それ以後はむろん自由時間である。私は、そんな時間を利用してニースでは吉田大朋氏とカジノに出かけてささやかな〝ビギナーズ・ラック〟を味わったし、長野市では神代辰巳監督の「赤い髪の女」（これは名画だった）の深夜興行を脇坂進氏と観に行った。約二十日間に及んだフランス取材の滞在最終日の「ボクにも一日くらい自由な時間をくれよ」という言葉は、言うまでもなく、同行の私に自由時間を与えるための科白だったのである。池波正太郎は、そんな心遣いをする人である。（一九八六・四）

大仁ホテル　静岡県田方郡大仁町吉田　電話〇五五八＝七六＝一七七一
五明館　長野県長野市大門町　電話〇二六二＝三二＝一二二一
日光金谷ホテル　栃木県日光市上鉢石町一三〇〇　電話〇二八八＝五四＝〇〇〇一
俵屋　京都市中京区麩屋町御池下ル　電話〇七五＝二一一＝五五六六
和久傳　京都府中郡峰山町字杉谷二五六　電話〇七七二六＝二＝三一三一
無水亭　岐阜県吉城郡古川町向町三の八の一　電話〇五七七＝三＝二五三一
万平ホテル　長野県北佐久郡軽井沢町桜ノ沢九二五　電話〇二六七四＝二＝二七七一
岩惣　広島県佐伯郡宮島町もみじ谷　電話〇八二九四＝四＝二二三三
玉の湯　大分県大分郡湯布院町湯ノ坪　電話〇九七七八＝五＝三五四一
倉敷アイビースクエア　岡山県倉敷市本町七の二　電話〇八六四＝二二＝〇〇一一
京亭　埼玉県大里郡寄居町寄居五四七　電話〇四八五＝八一＝〇一二八
蒲郡ホテルと常磐館　愛知県蒲郡市（一九八〇年五月で営業終了）
よしのや依緑園　石川県江沼郡山中町南町二の五　電話〇七六一七＝八＝一〇〇一
富士屋ホテル　神奈川県足柄下郡箱根町宮ノ下三五九　電話〇四六〇＝二＝二二一一
龍石　静岡県伊東市吉田一〇一二　電話〇五五七＝四五＝二二六六
スカンジナビア　静岡県沼津市西浦木負七六七　電話〇五五九＝四二＝二一一一
開花亭　福井県坂井郡芦原町温泉五の二〇一　電話〇七七六＝七七＝二五二五
楽山荘　神奈川県足柄下郡湯河原町宮上七六二　電話〇四六五＝六二＝八五三一

（この本は、一九八一年四月に平凡社より刊行されたものです。）

よい匂いのする一夜

池波正太郎

© Toyoko Ikenami 1986

1986年6月15日第1刷発行
1992年12月4日第9刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3510
販売部 (03) 5395-3626
製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——有限会社中澤製本所

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。 (庫)

ISBN4-06-183751-6

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

講談社文庫刊行の辞

二十一世紀の到来を目睫に望みながら、われわれはいま、人類史上かつて例を見ない巨大な転換期をむかえようとしている。

世界も、日本も、激動の予兆に対する期待とおののきを内に蔵して、未知の時代に歩み入ろうとしている。このときにあたり、創業の人野間清治の「ナショナル・エデュケイター」への志を現代に甦らせようと意図して、われわれはここに古今の文芸作品はいうまでもなく、ひろく人文・社会・自然の諸科学から東西の名著を網羅する、新しい綜合文庫の発刊を決意した。

激動の転換期はまた断絶の時代である。われわれは戦後二十五年間の出版文化のありかたへの深い反省をこめて、この断絶の時代にあえて人間的な持続を求めようとする。いたずらに浮薄な商業主義のあだ花を追い求めることなく、長期にわたって良書に生命をあたえようとつとめるところにしか、今後の出版文化の真の繁栄はあり得ないと信じるからである。

同時にわれわれはこの綜合文庫の刊行を通じて、人文・社会・自然の諸科学が、結局人間の学にほかならないことを立証しようと願っている。かつて知識とは、「汝自身を知る」ことにつきていた。現代社会の瑣末な情報の氾濫のなかから、力強い知識の源泉を掘り起し、技術文明のただなかに、生きた人間の姿を復活させること。それこそわれわれの切なる希求である。

われわれは権威に盲従せず、俗流に媚びることなく、渾然一体となって日本の「草の根」をかたちづくる若く新しい世代の人々に、心をこめてこの新しい綜合文庫をおくり届けたい。それは知識の泉であるとともに感受性のふるさとであり、もっとも有機的に組織され、社会に開かれた万人のための大学をめざしている。大方の支援と協力を衷心より切望してやまない。

一九七一年七月

野間省一

五木寛之　海の見える街にて〈流されゆく日々'80〉
五木寛之　青春の門　全六冊　改訂新版
五木寛之　旅の終りに
五木寛之　野火子
五木寛之　旅の幻燈
五木寛之　メルセデスの伝説
五木寛之　男が女をみつめる時
五木寛之　疾れ！逆ハンぐれん隊
五木寛之　爆走！逆ハンぐれん隊
五木寛之　危うし！逆ハンぐれん隊
五木寛之　珍道中！逆ハンぐれん隊
五木寛之　挑戦！逆ハンぐれん隊
五木寛之　怒れ！逆ハンぐれん隊
五木寛之　さらば！逆ハンぐれん隊
井上ひさし　モッキンポット師の後始末
井上ひさし　モッキンポット師ふたたび
井上ひさし　いとしのブリジット・ボルドー
井上ひさし　ブラウン監獄の四季
井上ひさし　歌麿の世界
井上ひさし　他人の血
井上ひさし　喜劇役者たち
井上ひさし　ナイン
井上ひさし　たそがれやくざブルース
井上ひさし　闇に咲く花
生島治郎　兇悪の拳銃
生島治郎　ぎゃんぶるハンター
生島治郎　地獄からの脱走
生島治郎　兇悪の警察
池波正太郎　忍びの女　全二冊
池波正太郎　近藤勇白書
池波正太郎　殺しの四人〈仕掛人・藤枝梅安・蟻地獄〉
池波正太郎　梅安最合傘〈仕掛人・藤枝梅安〉
池波正太郎　梅安針供養〈仕掛人・藤枝梅安〉
池波正太郎　梅安乱れ雲〈仕掛人・藤枝梅安〉
池波正太郎　梅安影法師〈仕掛人・藤枝梅安〉
池波正太郎　梅安蟻地獄〈仕掛人・藤枝梅安〉
池波正太郎　私の歳月
池波正太郎　殺しの掟
池波正太郎　よい匂いのする一夜
池波正太郎　緑のオリンピア
池波正太郎　梅安料理ごよみ
池波正太郎　田園の微風
井上　靖　わが母の記
井上　靖　楊貴妃伝
井上　靖　本覚坊遺文
井上　靖　異国の星　全二冊
伊藤桂一　静かなノモンハン
石川英輔　大江戸仙境録
石川英輔　未来妙法蓮華経
石牟礼道子　苦海浄土〈わが水俣病〉
今西祐行　肥後の石工
今西祐行　ヒロシマの歌ほか
いわさきちひろ　ちひろのことば
いわさきちひろ　いわさきちひろの絵と心
松本猛　ちひろへの手紙
石野径一郎　ひめゆりの塔

今西錦司　生物の世界
入江泰吉　大和路のこころ
井沢元彦　猿丸幻視行
井沢元彦　六歌仙暗殺考
井沢元彦　修道士の首
井沢元彦　ダビデの星の暗号
井沢元彦　五つの首
井沢元彦　義経幻殺録
井沢元彦　欲の無い犯罪者
李御寧　「縮み」志向の日本人
石森章太郎　トキワ荘の青春（ぼくの漫画修行時代）
伊藤雅俊　商いの心くばり
泉　麻人　丸の内アフター5
石井敏弘　風のターン・ロード
石井敏弘　風の魔術師
伊井直行　草のかんむり
今井正明　カイゼン
生田直親　雪のコンチェルト
今井　博　モスクワの市民生活
岩川　隆　どうしやうもない私（わが山頭火伝）
一志治夫　たった一度のボールポジション
いしいひさいち　わたしはネコである
飯沢匡　つば広の帽子をかぶって（いわさきちひろ伝）
黒柳徹子　Y.O.K.O.とN.O.（オノ・ヨーコ人と作品）
飯村隆彦　静三年坂
伊集院　匠の時代　1～12
内橋克人　「重厚長大」産業の復権
内橋克人　「手法革命」の時代
内田康夫　死者の木霊
内田康夫　シーラカンス殺人事件
内田康夫　パソコン探偵の名推理
内田康夫　「横山大観」殺人事件
内田康夫　漂泊の楽人
内田康夫　江田島殺人事件
内田康夫　琵琶湖周航殺人歌
上野　明　伸びる会社伸びない会社
牛島秀彦　九軍神は語らず
生方幸夫　銀行VS.証券（腐敗の構造と新展開）
歌野晶午　長い家の殺人
歌野晶午　白い家の殺人
With編集部編　男子禁制OL物語（丸ごと一本音激白集）
遠藤周作　海と毒薬
遠藤周作　白い人・黄色い人ほか二編
遠藤周作　わたしが・棄てた・女
遠藤周作　ユーモア小説集
遠藤周作　第二ユーモア小説集
遠藤周作　第三ユーモア小説集
遠藤周作　怪奇小説集
遠藤周作　第二怪奇小説集
遠藤周作　ただいま浪人
遠藤周作　どっこいショ
遠藤周作　ぐうたら人間学
遠藤周作　ぐうたら愛情学
遠藤周作　ぐうたら好奇学
遠藤周作　ぐうたら交友録
遠藤周作　協奏曲
遠藤周作　口笛をふく時

遠藤周作　結　　婚
遠藤周作　聖書のなかの女性たち
遠藤周作　さらば、夏の光よ
遠藤周作　最後の殉教者
遠藤周作　何でもない話
遠藤周作　悪霊の午後　全二冊
遠藤周作　作家の日記
遠藤周作　父　　親
遠藤周作　わが恋う人は全二冊
遠藤周作　イエスに邂った女たち
遠藤周作　妖女のごとく
遠藤周作　反　　逆　全二冊
遠藤周作　ひとりを愛し続ける本
永　六輔　無名人名語録
永　六輔　普通人名語録
江波戸哲夫　小説大蔵省
江波戸哲夫　左遷〈商社マンの決断！〉
江波戸哲夫　乗っ取り指令
江波戸哲夫　小説都市銀行
海老沢泰久　さびしい恋人
大江健三郎　新しい人よ眼ざめよ
小田　実　何でも見てやろう
興津要編　古典落語　全六冊
大原富枝　婉という女・正妻
大谷羊太郎　殺意の演奏
落合恵子　奇妙な愛の物語
落合恵子　愛すれどひとり
落合恵子　女が別れを告げるとき
落合恵子　ザ・レイプ
落合恵子　眠たい入江
落合恵子　ラブソングを歌いたい
落合恵子　アローン・アゲイン
落合恵子　ここに愛がいる
大岡　信　百人一首
大橋　歩　トマトジュース
大橋　歩　ハート
大橋　歩　鉛筆の先っちょ
大橋　歩　生活のだいじ
大石邦子　この生命ある限り
大石邦子　この愛なくば
大石邦子　この胸に光は消えず
岡倉天心　宮川寅雄訳　茶の本
沖　守弘　マザー・テレサ　あふれる愛
岡嶋二人　焦茶色のパステル
岡嶋二人　七年目の脅迫状
岡嶋二人　あした天気にしておくれ
岡嶋二人　開けっぱなしの密室
岡嶋二人　三度目ならばＡＢＣ
岡嶋二人　とってもカルディア
岡嶋二人　チョコレートゲーム
岡嶋二人　ビッグゲーム
岡嶋二人　ちょっと探偵してみませんか
岡嶋二人　記録された殺人
岡嶋二人　ツァラトゥストラの翼
岡嶋二人　そして扉が閉ざされた
岡嶋二人　熱い砂〈パリ～ダカール11000キロ〉
大石芳野　闘った人びと

講談社文庫　目録

太田蘭三　赤い雪崩
太田蘭三　破牢の人
太田蘭三　餓鬼岳の殺意
太田蘭三　南アルプス殺人峡谷
太田蘭三　木曽駒に幽霊茸を見た
太田蘭三　殺意の朝日連峰
大前研一　企業参謀　正続
大前研一　世界が見える日本が見える
大前研一　トライアド・パワー
大前研一　新・国富論
大沢在昌　野獣駆けろ
逢坂剛　コルドバの女豹
逢坂剛　幻のマドリード通信
逢坂剛　スペイン灼熱の午後
逢坂剛　カディスの赤い星全二冊
逢坂剛　十字路に立つ女
小川和久　日米軍
小川和久原　潜回廊
小川和久　情報フィールドノート1〜2
小川和久　仮想敵国ニッポン〈激動の世界を読む〉
御田重宝　戦艦「大和」の建造〈アメリカの対日戦略シフト〉
御田重宝　シベリア抑留
御田重宝　特攻
大野芳　がん生還者の記録
沖藤典子　女が会社へ行きたくない朝
沖藤典子　女が職場で悩むとき
沖藤典子　転勤族の妻たち
小野和子編　飯村隆彦　オノ・ヨーコ　ただの私（あたし）
大野和弘　ニューリッチの構造
小野卓司　廃校の夏〈難聴児たちの甲子園〉
大泉実成　説得〈エホバの証人と輸血拒否事件〉
尾上松緑　松緑芸話
折原一　倒錯のロンド
海音寺潮五郎　孫子
海音寺潮五郎　列藩騒動録全二冊
海音寺潮五郎　江戸城大奥列伝
梶山季之　李朝残影
梶山季之　李朝残影
梶山季之　那覇心中
加賀乙彦　頭医者留学記
川口松太郎　一休さんの門全二冊
川口松太郎　一休さんの道全二冊
海渡英祐　伯林（ベルリン）一八八八年
梶龍雄　透明な季節
金井美恵子　タマや
柏葉幸子　霧のむこうのふしぎな町
柏葉幸子　地下室からのふしぎな旅
柏葉幸子　天井うらのふしぎな友だち
柏葉幸子　エバリーン夫人のふしぎな肖像
加藤周一　雑種文化
勝目梓　その死を暴くな
勝目梓　蜜と牙
勝目梓　牙の街
勝目梓　報復のバラード
勝目梓　日蝕の街
勝目梓　女教師に捧げる鉄拳
勝目梓　欲望十字街

勝目　梓　私設断頭台
勝目　梓　絢爛たる檻
勝目　梓　緋の光彩
勝目　梓　悪女軍団
勝目　梓　柩の十字架
勝目　梓　夜のエージェント
勝目　梓　闇が裂ける
勝目　梓　殺し屋
勝目　梓　肉狩り
勝目　梓　不倫の報酬
勝目　梓　蜜の報酬
勝目　梓　引き裂かれた夏
勝目　梓　炸裂
鎌田　慧　自動車絶望工場
鎌田　慧　日本の兵器工場
鎌田　慧　教育工場の子どもたち
鎌田　慧　アジア絶望工場
鎌田　慧　ロボット絶望工場
鎌田　慧　国鉄処分
鎌田　慧　弘前大学教授夫人殺人事件
鎌田　慧　「東大経済卒」の十八年
鎌田　慧　トヨタと日産〈自動車王国の暗闇〉
桂　米朝　米朝ばなし〈上方落語地図〉
覚張貴子　宮城由紀子　インテリアの本
上之郷利昭　西武王国
上之郷利昭　新・西武王国
上之郷利昭編　堤義明は語る
上之郷利昭　本田宗一郎の育てられ方
開高健編　それでも飲まずにいられない
門田泰明　美貌のメス
門田泰明　愛憎のメス
門田泰明　狂瀾のメス
門田泰明　人妻鬼
桂　戴作　自分発見テスト〈エゴグラム診断法〉
景山民夫　転がる石のように
景山民夫　休暇の土地
景山民夫　ガラスの遊園地
景山民夫　食わせろ!!
川本三郎　ちょっとそこまで
香月利一　P.S.アイ・ラブ・ビートルズ〈ビートルズ・エピソード929〉
笠井　潔　復讐の白き荒野
河原敏明　美智子妃
過労死弁護団全国連絡会議編　過労死！
加藤寛一郎　生還への飛行
金田一春彦　安西愛子編　日本の唱歌全三冊
岸本英夫　死を見つめる心〈ガンとたたかった十年間〉
金　達寿　日本の中の朝鮮文化1～8
北方謙三　君に訣別の時を
北方謙三　鎖
北方謙三　烈日
北方謙三　われらが時の輝き
北方謙三　魂の岸辺
北方謙三　夜の終り
北方謙三　帰路
北方謙三　火焔樹
北方謙三　日付変更線
菊地秀行　妖戦地帯1～3

菊地秀行　怪奇城
菊地秀行　キラーネーム
菊地秀行　魔人学園
衣笠祥雄　お父さんからきみたちへ〈明日を信じて〉
黒岩重吾　太陽を這う
黒岩重吾　明日なき巡礼たち
黒岩重吾　潮の墓標
黒岩重吾　古代史への旅
栗本薫　ぼくらの時代
栗本薫　ぼくらの気持
栗本薫　ぼくらの世界
栗本薫　絃の聖域　全二冊
栗本薫　優しい密室
栗本薫　女狐
栗本薫　鬼面の研究
栗本薫　幽霊時代
栗本薫　神州日月変　全二冊
栗本薫　伊集院大介の冒険
栗本薫　猫目石　全二冊
栗本薫　伊集院大介の私生活
栗本薫　天狼星　I～II
栗本薫　双頭の蛇　全二冊
栗本薫　ハード・ラック・ウーマン
栗本薫　魔都恐怖仮面之巻
日下圭介　蝶たちは今…
黒井千次　星からの1通話
桑田忠親　石田三成
桑田忠親　明智光秀
桑田忠親　戦国史疑
黒柳徹子　窓ぎわのトットちゃん
熊井明子　愛のポプリ
桑原譲太郎　六本木戦争
桑原譲太郎　京都飛恋伝説
桑田佳祐　ロックの子
桑田佳祐　平成NG日記
久保博司　日本の警察
久保博司　日本の検察
胡桃沢耕史　旅券のない旅
胡桃沢耕史　黄塵を駆ける　全二冊
胡桃沢耕史　ブルースはお好き
胡桃沢耕史　バロン探偵局
胡桃沢耕史　可愛い拳銃使い
栗林良光　大蔵省銀行局
栗林良光　大蔵省主計局
栗林良光　大蔵省主税局
栗林良光　大蔵省証券局
草野厚証　券恐慌
工藤美代子　女が複眼になるとき
黒川博行　海の稜線
W・クロマティ　さらばサムライ野球
R・ホワイティング　松井みどり訳
軍司貞則　翔べ、バルセロナへ〈野球を五輪競技にした男たち〉
栗本慎一郎　縄文式頭脳革命
源氏鶏太　見事な娘
源氏鶏太　坊っちゃん社員
源氏鶏太　天下を取る
源氏鶏太　僕と彼女たち
源氏鶏太　奥様多忙

小峰　元　アルキメデスは手を汚さない
小林久三　暗黒告知
駒田信二　中国妖姫伝
駒田信二　中国怪奇物語　全三冊
駒田信二訳　水滸伝　全八冊
古森義久嵐に書く
今野　敏　超能力者狩り
今野　敏　妖獣のレクイエム
今野　敏　超人暗殺教団
今野　敏　復讐のフェスティバル
小林道雄　日本警察腐蝕の構造
小林道雄　翔べ！はぐれ鳥
小杉健治　死者の威嚇
小杉健治　影の核心
小杉健治　崖
小檜山博　雪嵐
小泉喜美子　時の過ぎゆくままに
後藤正治　空白の軌跡〈心臓移植に賭けた男たち〉
佐藤さとる　佐藤さとるファンタジー童話集Ⅰ～Ⅺ
佐藤さとる　わんぱく天国
佐藤さとる　コロボックル物語①～⑤
佐藤さとる　机の上の仙人
佐藤さとる編　ファンタジー童話傑作選(1)(2)
佐野　洋　砂の階段
佐野　洋　銅婚式
佐野　洋　親しめぬ肌
佐野　洋　贈られた女
佐野　洋　紅い喪服
佐野　洋　崩れる
佐野　洋　美しい死刑
佐野　洋　推理日記Ⅰ～Ⅳ
佐野　洋　奇しくも同じ日に……
佐野　洋　深夜のためらい
佐野　洋　折々の殺人
佐野　洋　青い記憶
佐野　洋　生きていた灰全二冊
佐野　洋　いつまでも昨日
斎藤　栄　殺人の棋譜
斎藤　栄　新・殺人の棋譜
斎藤　栄　Nの悲劇
斎藤　栄　お伽噺殺人事件
斎藤　栄　少女まんが家殺人事件
斎藤　栄　鳥取砂丘殺人事件
斎藤　栄　日美子の誘拐集団
斎藤　栄　日美子の完全犯罪
斎藤　栄　湘南海岸殺人事件
斎藤　栄　ファウスト殺人事件
笹沢左保　恋をする女たちへ
笹沢左保　時計の針がナイフに変わるとき
早乙女貢　沖田総司　全二冊
佐藤愛子　戦いすんで日が暮れて
佐藤愛子　花はくれない〈小説佐藤紅緑〉
佐藤愛子　私のなかの男たち
佐木隆三　復讐するは我にあり　全二冊
咲村観　上杉謙信　全三冊
咲村観　秦の始皇帝
咲村観　燃えよ！経営魂

咲村　観　源頼朝全二冊
斎藤惇夫　冒険者たち〈ガンバと十五匹の仲間〉
斎藤惇夫　グリックの冒険
西東　登　蟻の木の下で
佐賀　潜　華やかな死体
澤地久枝　烙印の女たち
澤地久枝　私の青春日めくり
佐々木丸美　雪の断章
佐々木丸美　忘れな草
佐々木丸美　花嫁人形
佐々木丸美　崖の館
佐々木丸美　水に描かれた館
佐々木丸美　夢の館
佐々木丸美　風花の里
佐々木丸美　沙霧秘話
沢田サタ編　泥まみれの死
酒井美意子　ある華族の昭和史
佐高　信　会社人類学入門
佐高　信　日本官僚白書
佐高　信　新版KKニッポン就職事情
佐高　信　「非会社人間」のすすめ
佐高　信　情報は人にあり
佐藤綾子　愛して学んで仕事して
佐藤綾子　自分育てのすすめ
佐藤綾子　マンハッタン母学生〈愛なんかこわくない心を伝えるパフォーマンス〉
佐藤綾子　マンハッタン母学生〈愛なんかこわくない心を伝えるパフォーマンス〉
佐藤雅美　薩摩藩経済官僚
佐藤雅美　幕末「住友」参謀〈広瀬宰平の経営戦略〉
佐藤雅美　主殿の税〈田沼意次の経済改革〉
坂本藤良　坂本龍馬と海援隊
佐瀬　稔　金属バット殺人事件
堺屋太一　超巨人明の太祖朱元璋
佐藤正午　恋を数えて
佐藤正午　恋売ります
坂本光一　白色の残像
司馬遼太郎　歳月
司馬遼太郎　王城の護衛者
司馬遼太郎　俄〈浪華遊侠伝〉
司馬遼太郎　北斗の人
司馬遼太郎　妖怪
司馬遼太郎　尻啖え孫市
司馬遼太郎　播磨灘物語全四冊
司馬遼太郎　おれは権現
司馬遼太郎　真説宮本武蔵
司馬遼太郎　風の武士全二冊
司馬遼太郎　戦雲の夢
司馬遼太郎　軍師二人
司馬遼太郎　大坂侍
司馬遼太郎　最後の伊賀者
司馬遼太郎　箱根の坂全三冊
司馬遼太郎　アームストロング砲
海音寺潮五郎　日本歴史を点検する
司馬遼太郎　歴史の交差路にて〈日本・中国・朝鮮〉
金達寿　陳寿〈三国志〉英雄ここにあり全三冊
柴田錬三郎　岡っ引どぶ　正続
柴田錬三郎　源氏九郎颯爽記
柴田錬三郎　秘剣揚羽蝶

柴田錬三郎　血　汐　笛
柴田錬三郎　お江戸日本橋　全二冊
柴田錬三郎　顔十郎罷り通る　全二冊
柴田錬三郎　主水血笑録
柴田錬三郎　われら梁山泊の好漢　全四冊
柴田錬三郎　剣と旗と城　全三冊
柴田錬三郎　木乃伊館
柴田錬三郎　血太郎孤独雲
柴田錬三郎　鈴姫異変
城山三郎　今日は再び来らず
城山三郎　梅は匂い人はこころ
城山三郎　外食王の飢え
城山三郎　本田宗一郎との一〇〇時間〈燃えるだけ燃えよ〉
城山三郎　屈託なく生きる
城山三郎　日米互いに何を学ぶか
E・ヴォーゲル
白石一郎　火　炎　城
白石一郎　鷹ノ羽の城
白石一郎　銭の城
白石一郎　びいどろの城
白石一郎　庖丁ざむらい〈十時半睡事件帖〉
白石一郎　観音妖女〈十時半睡事件帖〉
白石一郎　刀〈十時半睡事件帖〉
新章文子　危険な関係
志茂田景樹　黄色い牙
志茂田景樹　破魔神紀1～2
志水辰夫　飢えて狼
志水辰夫　裂けて海峡
志水辰夫　散る花もあり
志水辰夫　背いて故郷
志水辰夫　オンリィ・イエスタデイ
芝木好子　牡丹の庭
芝木好子　湯葉・隅田川・丸の内八号館
芝木好子　築地川・葛飾の女
芝木好子　紫の山
芝木好子　京の小袖
芝木好子　下町の空
芝木好子　春の散歩
塩沢　茂　イトーヨーカ堂店長会議
神一行　大蔵官僚〈超エリート集団の人脈と野望〉
神一行　自治官僚
島田荘司　占星術殺人事件
島田荘司　殺人ダイヤルを捜せ
島田荘司　火刑都市
島田荘司　網走発遙かなり
島田荘司　御手洗潔の挨拶
島田荘司　異邦の騎士
島田荘司　死者が飲む水
島田荘司　斜め屋敷の犯罪
島田荘司　ポルシェ911の誘惑
島川嘉也　右脳ビジネス
島川嘉也　「奥の細道」の知恵
塩月弥栄子　気ばたらきしてますか
塩月弥栄子　女四十代からの生き方にはコツがある
清水義範　グローイング・ダウン
清水義範　蕎麦ときしめん
清水義範　国語入試問題必勝法
清水義範　永遠のジャック&ベティ

講談社文庫　目録

清水義範　深夜の弁明
清水義範　「青春小説」
椎名　誠　フグと低気圧
椎名　誠　犬の系譜
椎名　誠　熱風大陸（ダーウィンの海をめざして）
椎名　誠　ねじのかいてん
島田雅彦　偽作家のリアル・ライフ
宍倉正弘　手錠〈ある警察官の犯罪〉
杉本苑子　今昔物語ふぁんたじあ　全二冊
杉本苑子　玉川兄弟　全二冊
杉本苑子　長勝院の萩　全三冊
杉本苑子　孤愁の岸　全二冊
杉本苑子　江戸芙蓉堂医館
杉本苑子　元禄歳時記　全二冊
杉本苑子　虚空を風が吹く
杉本苑子　傾く滝
杉本苑子　絵島疑獄　全二冊
杉本苑子　胸に棲む鬼
杉本苑子　滝沢馬琴　全二冊
杉本苑子　引越し大名の笑い
杉本苑子　聞き書きにっぽん女性「愛吏」
杉本苑子　埠頭の風　正続
鈴木健二　気くばりのすすめ
鈴木健二　記憶力のすすめ
鈴木健二　役に立つ日本史物語
鈴木達也　山口組壊滅せず
鈴木卓郎　日本警察の解剖
杉田　望　小説　国際プラント・ビジネス戦争
杉田　望　半導体戦争〈フォーラムXの陰謀〉
杉元伶一　就職戦線異状なし
杉山邦博　土俵の鬼三代
砂川しげひさ　コテン氏の音楽帖
瀬戸内晴美　かの子撩乱
瀬戸内晴美　蘭を焼く
瀬戸内晴美　祇園女御　全二冊
瀬戸内晴美　京まんだら　全二冊
瀬戸内晴美　薔薇館
瀬戸内晴美　彼女の夫たち　全二冊
瀬戸内晴美　純愛　全二冊
瀬戸内晴美　恋愛学校
瀬戸内晴美　燃えながら
瀬戸内晴美　嵯峨野より
瀬戸内晴美　幸福
瀬戸内寂聴　ブッダと女の物語
瀬戸内晴美　草宴
瀬戸内晴美　こころ　全二冊
瀬戸内晴美　花怨
瀬戸内晴美　愛の時代　全二冊
瀬戸内晴美　輪舞
瀬戸内晴美　蜜と毒
瀬戸内寂聴　伝教大師巡礼
瀬戸内晴美　ブルーダイヤモンド
瀬戸内寂聴　寂庵説法
瀬戸内寂聴　美と愛の旅
瀬戸内晴美　再会
瀬戸内寂聴　いのち華やぐ
瀬戸内寂聴　寂庵だより

ISBN4-06-183751-6
C0195 P400E (2)





よい伝統を引き継いで、奇跡のように残り続ける素晴しい宿。激しい世相の変転の中で、変らないもてなしの心はどのようにして守られたのか。「旅」好きの著者が、日本各地とヨーロッパに、ゆかりの宿を再訪して、誇り高く、折り目正しい人々と出合う喜びの旅。よいものは何故よいのかを、明晰に語る随筆集。

よい匂いのする一夜
池波正太郎
定価400円
(本体388円)

い
4
12